

# 南園會報



第十號

第十周年紀念號

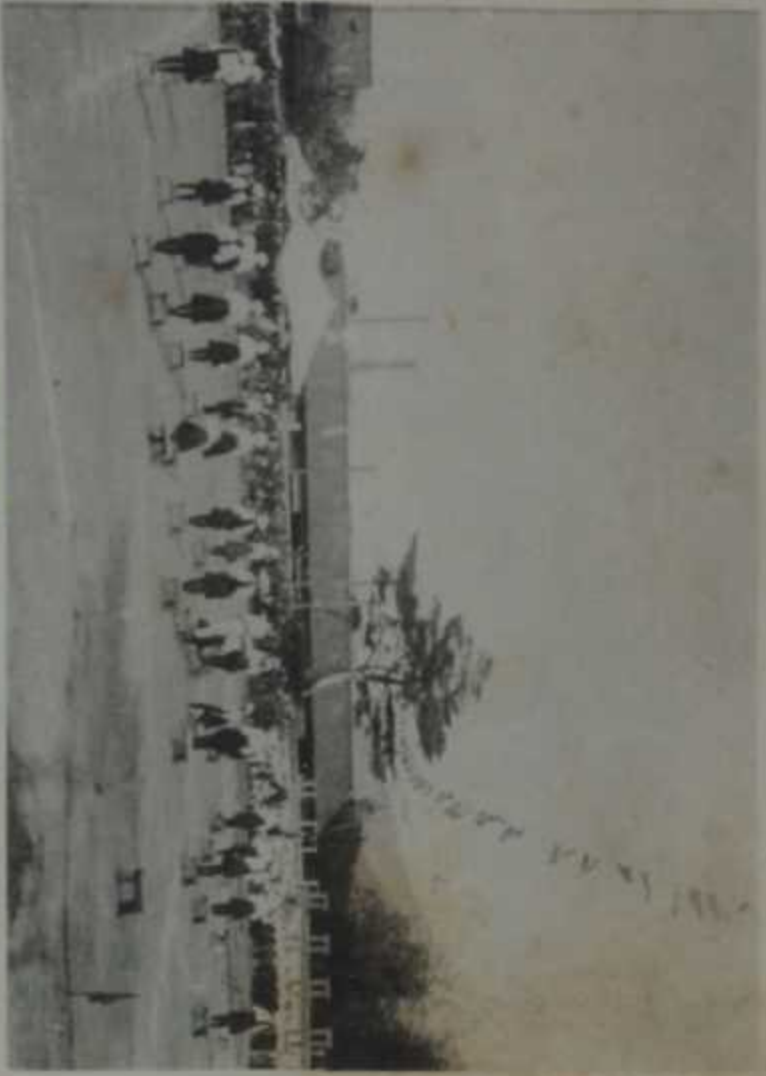
大正十一年十二月二十日

山口縣萩高等女學校

南園會

＝(次 目)＝

一、阿武川を距て、 △口 繪▽	一、運動會と宴會	一、諸先生講評	一、新義州より	田村 真子	七
一、運動會と展覧會	一、大正十年度本科卒業生	一、山口縣萩高等女學校一覽表	一、釜山より	野尻 幸代	七〇
一、大正十年度實科卒業生	校 歌	一、藤公の母	一、福川村より	阿部八重子	七一
△賀 詞▽	一、開校十周年記念式場に於ける齊藤學校長の式辭	△教 の 園▽	一、大阪府箕面より	有馬 淑子	七一
一、橋本本郷知事閣下の告辭	一、林阿武郡長の告辭	一、橋本長官閣下講話	一、松江市より	山崎 貞	七三
一、瀧口吉良氏の祝辭	一、小野阿武郡會館長の祝辭	一、玉木砲兵中佐講演	一、徳山より	福根 房子	七三
一、小野阿武郡町長總代の祝辭	一、生徒總代答辭	一、ラザレウムにつきて	一、岡山縣高梁より	玉木千代子	七三
△記念式記事▽	一、記念式	一、信念の確立につきて	一、福岡市より	赤司 尊子	七四
一、開校以來勤職職員表彰	一、開校式宴會	一、自然に感謝いたしませう	一、支那より	倉田 静子	七六
一、音楽會	一、音楽會	△文 の 園▽	一、鹿兒島市より	橋口 静子	七七
一、展覧會	一、生花大會	一、生徒短文	一、城津より	中原 春江	七七
		一、折にふかれて	一、大阪府玉出町より	田中 静子	七九
		△校外會員文壇▽	△會員名簿▽		
		一、追憶	一、特別名譽會員	一、名譽會員	八〇
		△本校記事▽	一、特別會員	一、舊會員	八〇
		△本會記事▽	一、校外會員	一、在校會員	八二
		△篤志者芳名▽	△ 雜 記		
		△校外會員消息▽	一、編輯を了りて		一〇四



七 奉掛腰ノ年四科本



ル一 奉懸肩ノ一本



十 賓來ルケ於ニ場會宴式念記年周十



三 賓ケ行雲ノ二賓三本



品績成徒生校學女等高各內縣



品績成徒生校本會覽誕念記年周十立創校本



奏合曲第全



「母ノ公藤」會樂音全



大正十三年三月 本科第二回卒業生



生業卒回拾第科實

月三年壹拾正大

# 南園會報

第十號

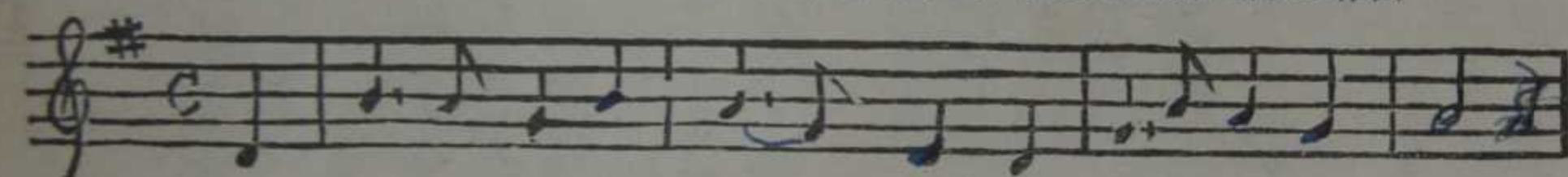
第十周年紀念號

大正十一年十二月二十日

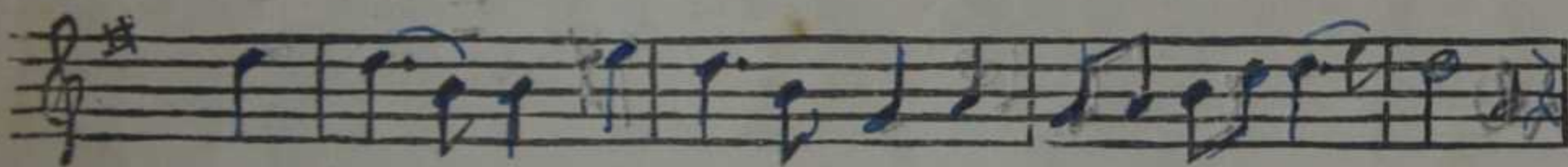
山口縣萩高等女學校

## 校歌

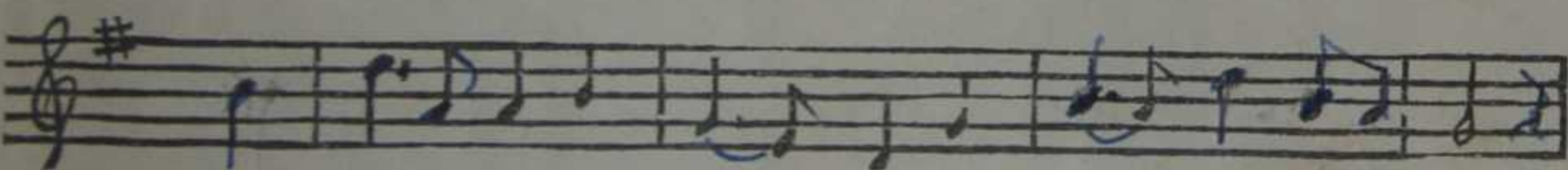
山口縣萩高等女學校教諭中野貞介先生作歌  
日本女子大學教授白井規矩郎先生作曲



よのうきぐもをはらひける



ごこくさんかのまつのかぜ



ときはよひびくはぎのさと

(一) 世のうき雲をはらひける

護國山下の松の風

常磐にひびく萩のさと

(二)

指月の山にてる月の

きよくやさしき心もて

たねす修めむ人の道

(三)

阿武の流にゆく水の

よるひるやまぬ心もて

たねす勵まむ人の業

(四)

やまをみなの命にも

かへける操胸にえり

己がつとめをなし遂げむ



### 賀詞

#### ●開校十周年記念式場よ於ける齋藤學校長の式辭

本年は當校開校十周年に相當致しまするし、又一面には我が國學制頒布五十年に當りますので、聊か祝意を表する爲め此の菊花馥郁たる候を選び、特に 明治天皇の御聖徳を偲び奉るべき本月本日と申し、開校十周年記念式と舉行することに致しました所、縣廳よりは知事閣下御差支の爲め、態々本澤縣視學を御派遣下され、又岡田閣下を始めとし多數貴賓の御臨場を忝う致しましたことは、本校の光榮として深く感謝する所でありま

す。 借、本校の沿革に就て其の概要を述べますと、明治四十三年三月阿武郡會は「刻下の奎運に鑑み本郡に高等女學校の必要を認むるに依り、右設置に關する調査をなし、適當の時機に於て郡會に附議せられたし。」といふことを決議して之を郡長に建議せられました。當時の郡長松浦誠氏は其の建議に基かれて種々の調査を遂げ、生徒定員三百名經常費六千圓を目途とする高等女學校を設立することとして、創立費約參萬圓を要するといふ見込を立てられました。而して經常費は町村賦課に依るの外、峠内一町三ヶ村より特別寄附として年々金壹千圓を支出すべく協定せられました。茲に經常費支出の見込は立ちましたけれども、何分創立費が巨額でありま

す爲め當局の苦心一方ならざるものがあつたが、本郡出身の富豪兵庫縣武庫郡本山村なる久原房之助氏の母堂故久原文子乃自は、大に此の舉を賛せられまして、創立費の全額金參萬圓を寄附せられましたるに依つて愈總ての費金支途の解決が付きました、併し其の茲に至りますに就ては、只今此の席に御貴臨の榮を得て居り

ます所の、當時の郡會議長瀧口吉良氏、萩町故壇山宗史氏、在大阪なる岡十郎氏などの方々の、特別なる御盡力に依りましたことは、久原家の義墓と共に我々の常に肝銘して忘るゝこと能はざると同時に、感謝措かざる所であります。

翌四十四年三月阿武郡會に於て、郡立實科高等女學校設立の件が議決されました、同年十二月萩町は當時拂下を得たる公府毛利家所有、舊南園御殿の土地一圓、並に新に購入の隣接宅地を添へ、本校々地として使用權を郡に提供せられました。郡は更に南園御殿の建物を萩町より買入れ、由緒記念の意味を以て本校舎の一部となし、別に教室寄宿舎を新築しまして、前校長米原鶴太氏を迎へて、明治四十五年四月一日より開校致しました。

當時の敷地總坪數三千二百九十二坪、建物總坪數七百三十三坪五合でありました、爾來校地を擴張すること一回、校舎を増築すること三回でありまして、校地の擴張及校舎増築の前二回は、何れも久原房之助氏令夫人久原清子氏の寄附に依りて行はれ、後一回の新築は郡費を以て支出致しました、目下工事中のものは二階建六教室と附屬建物とでありまして、郡費壹萬八千七百參拾參圓を投じて建築しつゝあるものであります。右竣工の曉は敷地總坪數五千五十坪、建物總坪數一千三百三十四坪二合五勺となるのであります。

學級數並に生徒數は設立の當初は三學級百七十五人に過ぎなかつたものであります、今日では九學級四百十八名で、當初の約二倍半に達して居ります。尙明年明後年に亘り收容人員を五十八宛増加致しまして、大正十三年度には十一學級五百三十人を收容し得る計劃であります。現在生徒四百十八名の内、寄宿舎に收容せるは六十五人で、其餘は通學生であります。而して郡外生は四十人で、郡内生は參百七拾八名であります郡内の内、内籍を有する者は二百九十九人で、全校生徒の約七割に當ります。

開校當時より大正九年三月までは、修業年限三ヶ年の實科高等女學校でありましたが、大正九年四月より趨勢の進運と、社會の要求とに鑑みまして、學校組織を變更致しまして、修業年限四ヶ年の高等女學校と爲し、

修業年限二ヶ年の實科と、修業年限一ヶ年の補習科とを併置致しました、是は當校に取りましては、一大進歩であります、我が國女子教育の現況より考へますれば、之を以て決して満足すべきでありませぬ。近き將來に於て、本科の修業年限は五ヶ年に延長しなければならぬこと、信じます。

入學者の情況は、創立當初並に其の後の數年間は獎勵勸誘に努めたるものにも拘はらず、應募人員は常に募集人員に達しなかつたり、或は僅かに數人を超過する位に過ぎなかつたのでありましたが、大正九年以降は順に増加致しまして、本年は本科生の如きは二倍以上に達しまして、志望者百人中入學し得る者僅かに四十四人五九に過ぎない程の盛況に達しましたことは、本郡女子教育熱勃興の一現象として、大に喜ぶ所であります。經費は明治四十五年の設立當時に於ては、經常費豫算四千五百八拾七圓に過ぎなかつたのであります、今年の經常費豫算は、最近追加致しましたる特別備品費を除きましても、參萬參千八百八拾九圓に達して居ります併しながら本年縣下高等女學校の、平均一人當教育費九拾圓四拾參錢に對比しますると、本校一人當の教育費は八拾壹圓七錢貳厘にして、平均額よりも猶一人に付九圓參拾五錢八厘少いのであります、此の點より考へますれば、本校教育費は随分多額に上つて居るやうですけれども、生徒一人に割當つれば縣下の平均以下にあるのであります。

當初より今日まで内一町三ヶ村は、分賦額以外に大正九年度までは年々壹千圓宛を、大正十年度は參千六百圓を、大正十一年度は四千四百圓を特別に寄附せられました、本校經費に對し格段なる援助をお與へ下つて居りますことは、深く感謝する所であります。

次に職員に就いて申し上げます、私は大正七年五月前校長の後を襲ひて参りましたが、何分諸事不行届のこと計りで、恐縮に耐へません。只今學校長、教諭、助教諭、書記、校醫を合して全部で貳拾壹名でありまして一名も缺員はありません。右の内開校當時よりの勤績者が四名と、五年乃至六年の勤績者が三名もありまして何れも忠實熱心に其の職に精勵しつゝあるといふことは、本校教育上尙に仕合のことと存じます。本校が今日の



陸運を致しましたるも、畢竟この永年勤績者達が、自己の利害を顧みずして、終始一貫献身努力せられたることで、確かに一要因をなして居ると考へます。

生徒學力の程度は、一年と向上しつゝあると信じます。從來本校より上級學校に進學致しましたる情況に鑑みましても、餘り他に後れを取つては居ないと思ひます。殊に體育の方面に於ては、近時大に運動を奨勵致します結果、身體發育の情況著しく良好となりましたことは、誠に喜ぶべき現象と考へます。本年身体検査の結果を、全國高等女學校並に縣内の高等女學校の平均率に比較しまするは、二者何れに對しましても本校生徒の体格が優つて居りますことは各位と共に喜ぶ所で御座います。

創立以來の卒業生は通じて七百八拾六人ですが、内五拾八人、即ち卒業生全數の六分三厘は死亡しましたことは、遺憾に存じますが、この死亡率は他校に比較しまして、決して多い方ではありません。卒業生分布の情況は、別室に表示致して置きましたる如く、北は北海道より南は九州まで、内地各府縣は素より、遠くは台灣、朝鮮、滿州、支那、馬來半島、布哇、等に擴がつて居りまして、卒業生七百八拾六人中四時内出身者が、五百七拾四名の多數を占むるに拘らず、現に時内は在る者は二百九十三人に過ぎない情況であります。斯く女子が郷國を離れて男子と共に遠く海外にまで活躍するに至りましたことは、眞に意を強うするに足ると思ひます。教育上に於て、地方の情況を顧慮するといふことは、素より必要のことには相違ありませんけれども、將來の女子を教育する上に於ては、單に一地方の事情にのみ囚はれ、時代の趨向をも察せず、徒らに舊套を墨守したる施設に安んじて居ては、却つて青年女子の不幸を招くものであらうといふことを、此の統計の上よりして強く感せしめらるゝ次第であります。

當校の沿革大略前述の通りであります。今回郡制廢止と共に、本校も近く縣に移管せられんとして、既に其の準備も整つて居りますことは、本校否本郡女子教育の一大進展として、各位と共に慶賀する次第であります。本校が斯く今日の盛運あるを致しましたるは、久原家を始め、設立當時御盡力下されました特志の方々、

並に縣郡の當局及び、縣郡會議員町村長、關係學校、其他郡内有志各位の、深甚なる御同情と多大なる御援助との賜なりと、衷心感謝する所であります。

今や世界は戦後の經營として最も力を教育に注ぎ、英、米、佛は固より獨逸の如き明日食ふべき麴麩の苦しみある間に於てすら、尙且教育の施設を忽にしない所以のものは、蓋しあらゆる文化の根本となり、基礎となり、原動力とあるものは教育であるからであります。過る十月三十日學制頒布五十年記念祝典に際し畏くも特に賜はりました。

勅語の御中に

「國家の光輝、社會の品位、政治、經濟、國防産業の發達一として其の効に待たざるなし 皇考の制を定め學を勸めたまへるは是が爲なり」

と仰せられたる如く、諸般の事總へて教育の力に待たなければならぬ譯であります。

我が國女子の教育は、近時著しき發達を見るに至りましたけれども、之を歐米先進國の情況に比較致しますれば、遙に遜色があります。教育上の機會均等が世界の大勢たる以上は、我が國女子の高等教育機關が速かに男子と同様に完備せられまして、將來の女子は其の智識の上に於ても、其の思想の上に於ても、男子と遜庭のない所まで進まなくてはならぬと思ひます。

吾々は此の記念日を以て、將來更に發達をなすべき出發の起點とし、即ち茲に一新紀元を劃しまして、大に清新の氣分を高潮し、益内容の改善充實を圖りたいと存じます。生徒諸子は、能く社會の大勢に鑑み、大に進取的精神を發揮し、智徳の修養、体力の増進に努められ、優秀なる婦人として、其の天職を完うし、益本校の名聲を發揚せられて、本日の記念式をして有意義のものたらしめらるることを望みます。

終りに臨み、縣郡當局、並に地方有志諸彦の、將來益本校に對し、御同情と御援助とを賜はらんことを切望致します。

橋本本縣知事閣下ノ告辭

六

萩高等女學校開校以來茲ニ十年、其ノ間或ハ組織ヲ改メ或ハ學級ヲ増シ、逐次充實擴張ヲ加ヘテ今日ノ隆昌ヲ來セルハ、之レ一ニ校長以下職員生徒諸子ノ協力ト郡當局並ニ郡民諸氏ノ翼贊ニ依ルモノト謂フベシ、今此ノ記念式典ヲ舉グルニ方リ、已往ノ經過ヲ顧ミテ、欣快轉禁ジ難キモノアリ。

惟フニ女子教育ノ効果ハ、獨リ婦女ノ教養ヲ高ムルノミナラズ、延イテ夫タルベキ男子ノ品性ト、次代ノ國民タルベキ子女ノ素質ニ及ボシ、影響測ルベカラザルモノアリ、方今帝國ノ地位甚ダ重ク、國民ノ自覺漸ク加フルト共ニ、女子教育ノ振興充實カ特ニ世論ヲ喚起スルニ至レルハ、蓋シ偶然ニアラザルナリ。

此ノ秋ニ當リ、本校茲ニ第一期ノ創業時代ヲ送リテ更ニ大成ヲ今後ニ期セントス、本縣教育ノ爲誠ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ。望ムラクハ職員並ニ生徒諸子、深ク時勢ノ歸趨ヲ察知シ、戮力協心益々教育ノ實績ヲ舉テ愈々校運ノ伸展ヲ期セラレシコトヲ。

山口縣知事 橋本 正 治

大正十一年十一月三日

林阿武郡長ノ告辭

茲ニ秋晴菊花ノ好季節ヲトシ、本校創立十周年記念式典ヲ舉行セラルハ、最モ欣快ニ禁ヘザル所ナリ。抑モ本校創立以來既ニ十星霜ヲ經タリ。其ノ間常ニ本郡女子教育ノ機關タル權威ヲ保持シ、外其ノ設備ヲ完整シ内教育教授ノ充實ヲ計リ、校運年ト共ニ隆盛ヲ來シ、卒業生ヲ出スコト、己ニ八百有餘名現在生徒ヲ收容スルコト、四百名ノ多キニ達セリ。蓋シ創業守成共ニ其ノ人ヲ得テ、書策經營宜シキヲ制シタルト、一面本郡人士ニシテ、夙ニ女子教育ヲ思フノ切ナルモノアルニ因由セズンバアラズ。

今ヤ本校モ近ク縣立學校ノ班ニ入ラムトスルノ好機運ニ際會セリ。職ヲ公ニ奉メル者、並ニ學ヲ本校ニ受テ

ル生徒諸子ハ、一段ノ奮勵ヲ以テ事ニ當リ、更ニ本校ノ光輝ヲ發揮セラレシコトヲ切望ス。

山口縣阿武郡長從六位勳六等 林 勇 輔

大正十一年十一月三日

瀧口吉良氏ノ祝辭

先帝陛下御誕辰の佳節、實にも氣高き菊花の馥郁たる清香を放つの秋、即ち今日をトして本校開校十周年記念式を舉行せらるゝに當りて、此盛典に參列することを得たるは、私の太だ光榮とする所でありませう。

温故知新の趣旨に基き、試に本校の由來を溯遡するに、曾て明倫小學校に校長たりし安藤紀一先生が、明治三十二年六月一日當時の阿武郡小學校職員を代表して、高等女學校の設立を提唱せられたるのが、本校實現の遠因にして、爾來往苒幾星霜を閱みし、明治四十三年に到り、阿武郡會より阿武郡長へ左の建議書を提出せり。

刻下の奎運に鑑み本郡に高等女學校の必要を認む右設立に關する調査をなし適當の時機に於て本會に附議相成りたし。

右及建議候也

山口縣阿武郡長 藤富嘉作殿

山口縣阿武郡會議長 瀧口 吉良

明治四十三年三月四日

於斯機運漸く熟し來り、會々久原文子刀自が巨萬の資金を義捐せられたるのが近因となりて、則ち今より十ヶ年以前に、本校が呱呱の聲を揚げたので、其の當時郡の行政代議兩機關の要路に立つ人々の間においては、一場の座談として所謂良妻賢母といふも何だか鹿爪らしく聞ゆるので、農村本位の世話女房を養成する位の

七

程度にて互に其の意見を交換した事もありませんが、それが奎運の進歩時代の要求に促かされて、今日の如く向上發展したと云ふことは、蓋し周知の事實であります。

又舊藩主毛利公の南園御殿の一廓を本校の敷地として公爵家に於て割愛せられたる高義と、其間に隠然斡旋せられたる井上侯の俠氣とは、本校の深く徳として譲られざる事柄に属すると共に大なる誇とせらるゝことならむと、僭越ながら私が忖度するのであります。

凡そ特種の學校には、其の學風とか其の校風とか云ふものが自ら存在するものにして、設令は慶應大學には慶應の學風あり、早稻田大學には早稻田の校風があるが如く、學風校風なるものは所謂學校夫れ自身の生命とも謂つべき歟と存するのであります。

さて本校の學風は如何、本校の校風は如何と云ふことに想到するに、本校の敷地は縣下に於て他に比類なき舊藩公南園御殿の一廓にして、其の舊建物の一部は于今現存して天保申歲の大洪水の節は、忠正公が未だ御世子の時代に於て、此の御殿の階上より其の洪水汎濫の慘狀を目撃せられて、之が爲め後年姥倉の疏水工事を起畫せられたる史實も存し、八重姫様なる貞松様が多年御住居になりし深き御由緒もあり、且つ御筆蹟も残り居て彼を思ひ此を惟へば、冥々の裡に大なる感化を享けて、油然として報念が湧起せらるゝことは信して疑はざるのであります。

然るに眼を轉して過去五ヶ年に渉る歐洲大戦争終局以來の世界の趨勢を觀察すれば、我帝國の國体に副はざる最も思ひべき時代思潮が澎湃として擡頭し來り、其出發点を自己に求めて、毫も他の影響を顧みず、忠孝節義に疎くして犠牲的精神が日に月に稀薄に流るゝのは、實に長大息の至に禁えないのであります。斯る時代に當りて、本校が此の逆流に對抗し、毅然として報本反始の校風を涵養し、忠恕の二字を以て其の信條とし、以て江湖に其の範を示されんことを渴望して止まざるのであります。

私は過る五月二十五日、松陰神社の春祭に參拜して歸途池田森玉堂にて、維新當時の勤王の志士寺島忠三郎

昌昭氏の家に傳りたる繪本忠經なる本一冊を貰ひ受けましたが此の忠經は後漢の安帝の時代に馬融の子馬融字季長といふ人が孝經に對して著はしたもので、其の章句も孝經に類似して居ます。其の中に

行其孝必先以忠  
竭其忠則福祿至

といふ語も見ゆす。又其上表紙の裏と表に

中心是謂忠

孝子是謂孝

「臣之所以爲臣以死佐君也

子之所以爲子以誠佐親也」

と松陰先生の筆跡の様なるものがあります。

又右の忠經の著者馬融の門人鄭玄字康成と云ふ人が忠恕の二字を註釋して

「中心を忠といひ、如心を恕といふ。恕はれしはかると訓す。中は中庸の中にて、かたよらず程よきにかなふ義也。恕は身をつめつて人のいたさを知る心也。」

と申して居ます。ツマリ恕とは思ひやり即ち同情であります。

抑程よきにかなふと同情に厚いと云ふことは、畢竟人間として最も缺くべからざる必要の要素と思惟するが故に、叙上の如く忠恕の二字を本校の信條として教養あらむことを渴望して止まざる所以であります。

滿堂の女學生諸君よ、願はくは我勤王の化神たる忠正公の忠の字を頭に戴き、久原文子刀自の名に因みて文の林にいそしみ、最も同情に厚くして貞松様の御名の

「十八公榮霜履露 一千年色雪中深」

といへるが如き堅貞なる志操を抱き、松陰先生が其の妹君に與へられたる

「長閑さや願なき身の神詣」

てふ俳句の如く、虚心坦懐純潔無垢苟も淑女たるの名に羞らず、雖ては良妻となり賢母となりて、至誠至忠我帝國の文明に貢献して、以て母校の名譽を發揚せられむことを。

終りに臨みて、茲に今日の芽出度記念式の祝意を表し、併せて冗辯を弄したる多罪を謝します。

大正十一年十一月三日

瀧口吉良

小河阿武郡會議長ノ祝辭

副議長 瀧口清作氏代讀

茲ニ本校創立十周年記念式典ヲ舉行セラルルニ當リ席末ニ列スルノ榮ヲ負フ、光榮何物カ之ニ加カン。抑々教育ハ國家興隆ノ根本ニシテ、世界列強競フヲ力ヲ育英ノコトニ用ユ。特ニ女子教育ノ普及發達ヲ圖ルハ、小ニシテ一家ノ和樂ヲ招キ、大ニシテハ社會ノ平和ヲ效シ、以テ國運ノ隆昌ノ源ヲ成スト謂フベク、本郡夙ニ子女高等教育ノ必要ヲ感シ、本校ヲ設立ス。爾來十年幾多ノ子女ヲ教養シ社會ニ貢獻セリ。今ヤ學制頒布五十年ヲ迎ヘ、郡制將ニ廢止セラレントスルノ時ニ臨ミ、恰モ本校創立十周年ヲ祝福ス、我等ノ記念何物カ之ニ加カンヤ、郡會ハ此ノ絶好機ヲ記念スル爲數萬圓ヲ投シ、校舍ヲ擴張シテ新ニ教具ヲ備フルコトヲ協贊シ、以テ將來ニ計ル所アリ。學ヲ本校ニ修ムル生徒諸子益心身ノ修養ニ勵ミ、師長ノ期待ニ副ハレント切望ス愛ニ阿武郡會ヲ代表シテ祝辭ヲ述ブ。

大正十一年十一月三日

阿武郡會議長 小河源吉

小野阿武郡町村長總代祝辭

本校創立十周年記念ノ盛典ヲ舉ゲラル。本職等席末ニ列スルコトヲ得タルハ、洵ニ光榮トスル所ナリ。願ヨルニ本校創立茲ニ十周年、其ノ校運ノ隆ナル蓋シ郡當局ノ經營劃策ノ宜ロシキト校長職員各位ノ努力ノ資ニ非ラズンハ何ア此ノ如キヲ得ンヤ。今ヤ本校ハ近ク縣ニ移管セラレントスルノ秋ニ際シ望ラクハ一層設備ノ改善ヲ圖リ、時代ノ趨勢ニ應シ、教化ノ實ヲ舉ゲ以テ炳乎トシテ、校運ノ彌々盛ナラント切望スルト俱ニ、生徒諸子ニ對シ益々自奮自省ヲ要望スルモノナリ。惟フニ女子ニ尊ム所ノモノハ德操ニ在リ。宜シク校訓ノ示ス所ニ則リ、嫁シテハ良妻賢母トナリ、以テ國家社會ノ爲、貢獻セラレント聊カ無言ヲ陳ベテ祝辭トナス。

大正十一年十一月三日

阿武郡町村長總代 小野彌市

生徒總代答辭

千町田の稻豊にみのり、垣根の菊美しうはゝるひ大正十一年十一月三日しも、わが學び合にては、開校十周年記念式を舉げさせられ、知事閣下御代理を始め貴賓の御方々いでまして、いとも懇なる御諭を賜る、かたじけなき極みになん。願れば、我が學びやは久原文子刀目とはじめ、あまたの御方々の御心盡しにより、明治四十五年四月開校せられ、その後校運に月に榮わもて行き、今日しも開校十周年を迎へぬるは、校長先生を始め諸先生の眞金熔くる暑き日も、深雪降る寒き日も親はらからにも劣らざる御心もて、教へ導き給ひしによるは更にて、又大方の女子の教育を盛にせまほしく思はるゝ御方々の深き御心しらひにもよること、いとも多きを思ひ侍れば、ありがたさいふべき方もなき心地ぞする。あはれ如何にして、年ごろの大いなる此の御恵に報い奉るべき。また如何にして、今日の榮ある式にて垂れさせ給ひし御諭に應へ奉るべき。

ただ一筋に厚き御諭の旨を守り、此の學びやの設立の標旨を考へ、此の記念日を一新紀元として、一入憤を發して向上に努め、指月の山に輝る月の如く清くやさしき心をもて人の道を修め、阿武の川に流るゝ水の如く夜晝やまぬ心をもて、學びの業を勵み、人としては國民として眞心もて事に當り行末は妻として、はた母として己の天職を全うする婦人となりなば、鴻恩の萬分の一にもなりなんと思ひ侍るはこころ。  
ささか拙き懷を述べて答辭とす。

大正十一年十一月三日

山口縣萩高等女學校

生徒總代 小川 光子



創立十周年  
記念式記事

記念式

大正十一年十一月三日、明治大帝御降誕の佳日と奉して、講堂に我校開校十周年記念式が舉行された。午前

- 十時十分第一振鈴を相圖に、全校生徒四百二十名職員二十一名入場、續て知事代理本澤本縣視學、林郡長岡田陸軍少將、瀧口吉良氏、郡會議員、町村長、中小學校長新聞記者其他百七十餘名の來賓並に百餘名の卒業生入場、席定まると、左記順序により、嚴肅にして盛大なる記念式は舉行せられ、午前十一時三十分目出度終り引き續き、勤績職員表彰式が舉行された。  
(當日の式辭、告辭、祝辭答辭は巻頭に掲載しあり)
- 順 序
- 一、生徒職員來賓入場
  - 二、舉式の挨拶
  - 三、唱歌君が代
  - 四、勅語奉讀
  - 五、唱歌、勅語奉答
  - 六、學校長式辭
  - 七、長官、郡長告辭
  - 八、來賓祝辭
  - 九、生徒總代答辭
  - 十、校歌
  - 十一、閉式挨拶

- 十二、勤績職員表彰式
- 十三、來賓職員生徒退場

開校以來勤績職員表彰

本校開校以來十ヶ年勤績せられたる中野、世良、河村中村四先生に對して、阿武郡長より感謝狀に銀洋杯を南園會長より感謝狀に袴地を添へて贈呈せられ、又開校當時校長たりし米原先生に對して、阿武郡長より感謝狀に銀洋杯を、南園會長より感謝狀に萩焼花瓶を添へて贈呈せられ、各々其の効績を表彰せられた。

記念式宴會

記念式終了後直に來賓一同宴會場に入る、十一時四十分齊藤校長の挨拶によりて開宴、菊花の笑を酒盞にうけ、心の露を祝ひ盡して鶯々の氣堂に満ちて歡聲戸外にもれた。

宴酣なる頃、岡田少將の發聲にて、兩陛下の萬歳と萩高等女學校の萬歳を三唱し、齊藤校長の發聲にて來賓諸氏の萬歳を三唱して會を終り、一同音樂會場に入る。

當日の献立、折詰、紅白餅一重、清酒一本

當日の宴會場は食堂を以て之にあて、場四圍は幔幕を張り、柱は紅白布にて包み、五色のモールを天井に張り、卓間數十の鉢植か羅列されてあつた。

音樂會

會場は講堂、高さ四尺、闊口三間、奥行二間の舞台に、金屏風を背景とし、前面に音樂會と白字にて大書せる大幕を張り、島屋吳服店寄贈の大花輪を配して清楚なる裝飾を施し、午後一時齊藤校長の開會の辭に始まつた。

- 順 序
- 一、獨 唱 ゴム風船 本一梅 山本 照子
  - 二、合 唱 故郷を後に 本二菊 石津 可子
  - 三、歌 曲 巖上の松 本 四 三輪 先生
  - 四、ダンス ジャンボンダンス 本二梅 三島夫久子
  - 同 林 松林 和子
  - 同 大田 露子
  - 同 河邊 温子
  - 同 時子

- 五、談話 主婦と科學的智識 本二菊 岡田 カツ
- 六、合唱 月待草 本四 高橋クニ子
- 七、實驗(化學)燃燒に就いて 本三 森屋 春子
- 八、童謡唱歌 青い鳥 同 長井アヤ子
- 九、英語 朝の挨拶 本二菊 藤井 藤江
- 十、歌曲 千鳥 本一菊 石川 ナツ
- 十一、合唱 落葉舟 本一梅 芳野 愛
- 十二、談話 自然と花 同 清須 イト
- 同 本一梅 吉見不二子
- 同 本一梅 原田 先生
- 同 補 福富 朝子
- 同 本二菊 齋藤 貞子
- 同 本一梅 小野 勝子
- 同 本一梅 長瀬 小波
- 同 本一梅 村上 玉子
- 同 本一梅 山本 照子
- 同 阿武ヨシ子

- 一三、獨唱 故郷の海 同 丸尾喜美子
- 一四、談話 家庭教育者としての母 本四 吉屋ウメ子
- 一五、唱歌劇 藤公の母 本四 溝部キク江
- 一六、獨唱 子守歌 同 中村 春子
- 一七、ダンス 麗しき天然並に 本四 小川 光子
- 同 シヤンピングダンス 同 井上ミツ子
- 同 同 利助 本三 田村 久代
- 同 同 唱歌 本四 有志
- 同 本二梅 椿 シヅコ
- 同 本四 伊藤 菊子
- 同 同 鈴木美代子
- 同 同 長嶺 光子
- 同 同 小茅 マキ
- 同 同 村橋 元子
- 同 本四 石川 ツル
- 同 同 田總 ニキ
- 同 同 堀 トキ子
- 同 本四 溝部キク江
- 同 本三 刀福 コト

- 二〇、談話 生活改善に就いて 本二 椿 シヅコ
- 二一、英語 吾々は何故英語を學ぶか 本四 關屋キヨ子
- 二二、合唱(三部)秋の野原 同 石津 存子
- 二三、歌曲 菊水 本三 有志
- 同 卒業生 原田 先生
- 同 同 田阪 文子
- 同 同 河村アヤ子
- 二四、對話唱歌 羽衣 漁夫 本四 野村 静子
- 同 同 天女 小茅 マキ
- 同 同 唱歌 有志

- 本校生徒並にに縣内外女學校生徒の成績品展覽會が開催された。
- A、會場
- 裁縫三教室、本一梅、菊 裁縫品
  - 全 二教室、本二梅、菊 全
  - 全 一教室、生徒製作廢物利用及び生徒製作品販賣所
  - 普通三教室、本三本四補習科 裁縫手藝品
  - 全 四教室、實一實二 裁縫手藝品
  - 普通五教室、本校生徒作文習字圖書成績品
  - 全 六教室、縣内外女學生全
  - 全 七教室、本校生徒全
- 本四「はるばる」實二「やまぶき」其他生徒創作
- B、出品種類及び点数
- 二十、本校、 他校、
  - 裁縫品、四五〇点
  - 手藝品、二三〇点
  - 作文、四〇〇点 三四〇点
  - 習字、四二〇点 四八〇点
  - 圖書、三八〇点 四八〇点

展覽會

十一月三日午前九時より、五日午後二時迄三日間、

創作、三點  
雜誌、二種

G、出品校

一、縣内、十校

大島高女、岩國高女、佐波高女、都濃高女  
豊浦高女、下關高女、德基高女、大津高女  
山口高女、中村高女、

一、縣外、五十六校

關東及東北、八校  
東京府荏原高女、神奈川縣平塚高女、  
栃木縣足利高女、千葉縣木更津高女、  
福島縣會津高女、福島縣磐城高女、  
秋田縣秋田高女、埼玉縣久喜高女、

中國、六校

廣島縣豊田高女、岡山縣井原高女、  
島根縣濱田高女、島根縣津和野高女、  
岡山縣笠岡高女、廣島縣世羅高女、  
四國、四校  
愛媛縣西條高女、香川縣木田高女、  
德島縣撫養高女、高知縣中村高女、

近畿中部、二十一校

岐阜縣海津高女、愛知縣安城高女、  
大阪府市岡高女、愛知縣一宮高女、  
京都府加佐高女、富山縣高岡高女、  
大阪府河北高女、兵庫縣篠山高女、  
新瀉縣新津高女、愛知縣丹羽高女、  
兵庫縣神戶高女、大阪府三島高女、  
静岡縣三島高女、静岡縣掛川高女、  
三重縣南牟婁高女、山梨縣第一高女、  
長野郡上田高女、和歌山縣田邊高女、  
石川縣能美高女、京都府與謝高女、  
名古屋第一高女、

九州、十一校

熊本縣玉名高女、鹿兒島縣川内高女、  
長崎縣五島高女、福岡縣柳河高女、  
福岡縣大牟田高女、福岡縣三潞高女、  
福岡縣嘉穂高女、長崎縣平戸高女、  
大分縣別府高女、佐賀縣成美高女、  
大分縣大野高女、  
北海道朝鮮、六校

馬山公立高女、釜山公立高女、  
仁川公立高女、鎮南浦高女、  
大連高女、小樽高女、  
宗匠上利先生指導の本校生徒生花は、各成績品の間に点綴せられ、一段の光彩をそへてゐた。  
入場者は三日間、三千人を越えて盛會であつた。

生花大會

展覽會開會中、南園館に本校教師上利宗匠の社中の方々の生花大會開催、出品數三十点、観覧者多數に上つた。

運動會

十一月五日、數日來の過勞にも疲勞の色だに見せず今朝來の準備に忙殺された生徒一同は、午前九時煙花一發の相圖に、直ちに運動場に整列、齊藤會長の開會の辭に、一同生氣を新にして競技に入る、

順序

- 一、体操 全校生徒
- 二、二百米競争 本一梅
- 三、盲啞競争 全一菊

- 四、二百米競争 本三
- 五、メダキンボール 實二
- 六、キックボール 本四
- 七、ジャーマン式徒手体操 全一梅
- 八、障礙物競争 實一
- 九、二百米競争 本二梅
- 一〇、肩越ボール 全一梅
- 一一、二百米競争 全二梅
- 一二、二人三脚 全一梅
- 一三、二百米突競走 全一梅
- 一四、肩越ボール 全一梅
- 一五、二百米突競走 實一
- 一六、スルウエンドキヤヲチリレー 本二菊
- 一七、二百米突競走 實二
- 一八、キヤブテンボール 本三
- 一九、クワスリレー
- 本一梅、田中孝、阿武ヨシ子、寺田アサ子、  
吉山シズ子、  
本一菊、小野村サトリ、澄川トク、石田久子、  
金子萩野、

- 本二梅、阿武將子、長井キヨ、小川ナツ子、林露子、
- 本二菊、小野村アキ子、村谷千代子、鈴木婦美子、秋山千代、
- 二一〇、クラスリレ
- 本三、藤原トモ子、山藤スエ子、中村照子、大田ユク、
- 本四、小茅マキ、長嶺光子、中原豊子、三島夫久子、
- 實二、阿武幹子、石川静子、岸ステ、永安静江、
- 實一、有田喜代子、岡公子、渡邊マデ子、中本初代、
- 二二、日本アルプスマーチ 本四 實一
- 二三、二人三脚 實二
- 二四、變種競走 實一
- 二五、四拍手行進 實一 梅 菊
- 二六、二百米突競走 本二 菊
- 二七、スルウエンドキャッチリレ 本二 梅
- 二七、障礙物競走 本三
- 二八、千鳥旗送リ 本一 菊
- 二九、二人三脚 本二 菊
- 三〇、麗はしき天然 本四 實二
- 三一、盲啞競走 本一 梅
- 三二、体操ダンス 本四
- 三三、スルウエンドキャッチリレ 本二 梅
- 三四、雲行ク雁 本三 實二
- 三五、來賓競走 キックボール
- 三六、職員競走 全
- 三七、ハードルレース 本四
- 三八、体操ダンス 本二 梅 菊
- 三九、二百米競走 他校選手 尋常校 高等校
- 四〇、紅白龍球 同窓生
- 四一、優勝リレ 本校選手
- 四二、体操 全校生徒
- 二二、閉會の辭

同窓生の紅白龍球は、長袖の優雅な装ながら、輕快な動作は、競技者は在學當時をなつかしみ、參觀人は在學生と卒業生との間に、面白コントラストを印象された

事であらう。

級別優勝リレになると、各級應援團急に色めき、應援歌を高唱、應援旗を振りかざし、見物人にも一段の緊張振りが見れた、

各四人の選手は、級の名譽を雙肩に荷ふべく、必勝を期し、場を上り、全力を盡して疾走したが、四年最初より優勢、遂に最後の桂冠を得た。敗れたとはいへ本一梅の奮闘は、大に將來あるを思はしめた。

秋日和には見まがはしき好天氣、かて加へて十周年記念が興味をそゝりてか、午後に至りては參觀者四周に人垣を作り、近年稀なる盛會裡に、三時半終了した。

◎諸先生の講評

十週年記念の諸事業に對する校長先生はじめ諸先生の講評は、ただに當日の出演者に對する注意といふよりも、全校生徒の學習上の好指針なりと思ひますし、當日來場卒業生の方の參考にもなりませので、講評の極大要を摘出いたします。

一、校長先生

今回本校開校十週年記念式を舉行するに就いて、種々の催しを附けて致しましたが、何れも豫期以上の成果を收め、殊に總ての舉行事項が豫定の時間通り、些の滞りもなく進行しました事は、誠に満足に存じます各地より參列なしたつた、多數來賓の方々も、大體好感を持せられたるらしく、翌日の長州新聞には、大に激賞された記事が掲げられて居りました。是は要するに、諸先生方の一致努力と、諸嬢の公共的努力との結果だと思ひます。偕記念式の際私の述べました如く過去十年の我校の進歩は、誠に喜ぶべく、祝ふべく、記念すべきであります。徒らに過去を祝するのみでは、この式も意義をなしません、即此の記念日を、一の新しい紀元として、今後五年なり十年なりを期して更に見るべき進歩を事實に表はすことに於て、始めて意義あるものとなるのであります。夫れ故我々の努力も、諸嬢の勉學も、更に今後に在ることを決して忘れてはなりません。只今から各部に亘つて、擔任先生より講評して頂きますから、諸嬢は細心な注意を拂つて謹聽し、其の長所は益々之を發揮し其の短所は速かに之を矯正することに努力せられんことを望みます。



一、中野先生

私は此の學校に創立當時より奉職して居る一人でありますが、年を追うて考へて見ますのに、現在の諸嬢の性行が次第次第に純真に向ひつゝある事が見られるのを、私は非常に喜んで居ます。先日はれた記念式の諸事業には、諸嬢の此の傾向が確にあらばれて居ました。諸嬢は此の傾向を持続して、更に善良なる方面に進進しなくてはなりません。

扱、私の關係した音楽會の事について申すと、一般に音楽會は相當の出来であつた、先づ成功といふべきであると思ひます。部分的にいへば、

補習科の小田さんの「主婦と化學的智識」は言語も明瞭であり、筋もまづ徹底して居ましたが、あの人は尙より以上なし得る素質があります。本科四年の中村さんの「家庭教育者としての母」は、態度に十分の落つきがあり、發音に抑揚緩急があり、調子がよほどよく出来ましたが小田さん同様、まだあれ以上出来ると思ひます。

拙作唱歌劇「藤公の母」は女子教育の必要を具象化するために、題材を郷土秋地に因縁深き世界的偉人藤

公の幼時に取らして、賢母の教訓が藤公の全人格をつくるに大關係があつたことをあらはすのが主眼でした。そして劇中最も高尚なる能樂の美点と、西洋音楽の美点とを、調和し純真の人情美をあらははして開校十周年記念を奉祝したいと思ひて創作したものであります。諸嬢も見られた通り、多數の來賓は非常に感動された様でした、長州新聞には其の社説に於て理解ある批評が下されて居りました。かく多くの人を感動せしめ得たのは、聊かのてらひもなく誇張もなく、純真な心を以て全く其中の人物となり得たからだと思います。此の心持は諸嬢の平素の行爲にも極めて大切な事だと思ひます。

展覽會の方で私の受持についていへば、騰寫刷雜誌本四の「は、づき」實二の「やまぶき」は悉く生徒自身の手になつたもので、學生其他多數の參觀人の眼を惹いた様でした。此の如き金は決して容易な努力で出来るものではありませんが、本校生徒がよくこれとなし得、またなし得つゝあると云ふ事は、非常に結構な事だと思ひます。

作文も他校の成績も澤山出て居て随分優秀なものもあ

りますが、私は本校の成績が他校のそれに比して決して遜色なき迄につとめつゝある諸嬢の努力を感謝して批評を終ります。

一、池上先生

私も諸嬢の熱心努力によつて今回の良結果をあげ得た事を欣びます。展覽會の方も、他の諸事業と同じが様に大變好結果でありました。

習字について申しますれば、他校の成績と比較しても單に此の成績物だけを見ても、これだけ出来れば決して恥づる處はないと思ひます併し細部に亘つて短評を試みますならば

一年 通じて成績良好、ただ手本に不忠實なるもの二三ありしは遺憾。

二年 實一年、草書は概してよし、筆の緩急には注意不足せる感あり

三年 實二年、同材料なり大字はよろしかりしも書簡文の書方よろしからず、平素練習機會少きによるならん。

四年 甚だ良好、四年平素の學習狀態より推して此の結果を得るは當然。

他校の成績は、流石に其の學校の優良品だけあつて眞に結構なものが多くありました。縣下でも、德基、下關、豊浦、大津、縣外で、富山縣高岡、廣島縣世羅の各女學校の成績は、諸嬢も見られた通り大變よく出来て居りました。

而して今回の好成绩を收め得たことは、大なる愉快であります。將來一層の奮勵を望む。習字の成績を向上せんがためには、多く練習すること、書く時に精神を集中すること、即ち習字三昧に入ることが必要です。今現に諸嬢の行きつゝある傾向は大體いふと思ひますから、此の意氣込みを進めば、將來の進歩期して待つべきものがあると思ひます。

一、伊藤先生

單刀直入的に化學の方から申すと、場所の割合に聲が小さかつた事、話振りが書物を讀む様に單調であつた事、音に高低緩急のなかつた事は缺點だと思ひます。

鉄線の燃焼は極めて失敗し易い實驗であります。私はこれを生徒の自由にまかせてやらしました。果して最初は失敗いたしました、けれども其の失敗を意と

せず、遂に成功まで漕ぎつけた事は、実験の成功以上に意義があると思ひます。

物理の方は音聲といひ、態度といひ、前化学に於けるか如き缺點はなかつたと思ひます。其の落ちつきは寧ろ完全に近いものだといひ得ませう。

実験は化学と同様失敗いたしました。実験の失敗は多く不注意の結果でありますけれど、今回行った様な実験は初學者の中々成功するものではありません。併し一回二回三回と失敗に懲りず撓まず研究を續けて行く事に生命があるので、成功を見る迄決して挫折してはなりません。出演者は幾度の失敗に墜易せず、而も敬虔なる態度を以て遂に其の目的を達し得た事は、前同様非常に結構な事だと思ひます。

#### 一、柳原先生

最近圖書教育界の傾向が、各方面に亘つて著しく動搖して居るといふ事は、或意味からいふといふ事だと思ひます。女學校圖書擔任の先生から、圖書教育不振の聲をよく聞きますが、私共は與へられた範圍に最善の努力を盡さなければなりません。

今回の展覧會開催前私の希望した事は、眞の展覧會

併し將來のため、私の希望と注意を赤裸々に申しますならば、壇に立つ上は先づ相當の勇氣と自信とを持つてゐたいと思ひます。よし十分になし得る力量はあつても、自信をもつて立たなかつた方は、結果が思はずしくなかつた様です、今回は練習不足にもよります。石川さんのは、獨唱、會話、態度共に甚だよく出来ました。誰のよりも傑出して居たと思ひます。

唱歌では聲を大きくするよりも、先づ調子を整へなくてはなりません。調子が出来ないのであると大きく出さんとするは往々に失敗いたします。

物事皆そうであります。音樂に於ては尙更一時的に成功は希ふべからざる事でありませう。加之僅か一週一時間に於てをやです。故に此の時間を役立つ様に音階的進歩の度量を以て十分練習して貰ひたいと思ひます

#### 一、中村先生

英語の會話は困難であります、會話に伴ふ表情は更に困難であります。併し清須さんも、吉見さんも、よくそれをなし遂げました。吉見さんのは發音が少し重い氣味はありましたけれども、態度には落つきもあり

が開きたい、即ち在來のお祭氣分の、教師生徒合作の展覧會でなくして、生徒純美の努力になれる展覧會であらうといふ事でありました、幸にして此の希望の殆ど全部は達せられました事を私は諸嬢と共に喜びたいと思ひます。

自分の力でどこ迄もやつて見ようとする事と、與へられたる時間を空費しないといふ事は、圖書學習上だけの問題ではなく大切な事だと思ひます。

「自然と花」は生徒を通しての教師の意志の發表であつて、生徒自身に何等の創意も働いて居ません。出演前私が生徒に精神的打撃を與へた事は、非常に氣の毒で出演者に對して同情に堪へないところでした。

#### 一、安永先生

ピアノが豫定より甚だしく遅着いたしました。練習時間は僅に一週間しかなく、始めピアノの前立つて聲を出し得ない生徒があつた時、私ばどうして音樂會が出来たらうかと内心非常に心配して居ましたのが、あの通り相當の結果を得たのは、固より諸嬢の發奮勉勵によつた事でせうけれど、私としては寧ろ不思議な位に思つて居るのです。

表情もよくあらはれました。清須さんのば、發音も輕快に態度も表情もあれなら申分はありませぬ。

石津さんのは更によかつたと思ひます。全く感心させられました。發音もあれなら申分は御座いませぬが私は何よりもあの内容が嬉しかつたと思ひます。本當に私達英語を學ぶ女性には、石津さんが申します様な態度を持して、もつと眞剣に、もつと眞面目に學んで行き度いと思ひます。

木原さんの譯も、あゝいふ内容の話は、ともすれば人の反感をかひ易いものにも關らず、木原さんが非常な落つきと敬虔な態度で、而も言語は頗る明瞭に譯し出されたので、ちつともそんな心配がなく話の内容にも重みがついた事と思ひます。兎に角石津さんの英語も木原さんの譯も非常によく出来ました。

#### 一、關田先生

私は運動會についての氣付を申す、

1、今回の運動會は、平素の訓練如何を、社會公衆の批判にまかせるよい機會でありましたが、そこに隙があつたことは遺憾に思ひました。それは合同体操の時特に著しく見られました。多數であればあるだけ、



徒 生 及 卒 業 生 本																		
椿	山	三	明	川	佐	大	奈	宇	須	田	福	紫	吉	高	彌	福	小	生
村	田	見	上	々	井	古	郷	佐	高	川	福	部	侯	富	賀	川	雲	生
七	七	二	二	四	一	二	一	一	一	一	二	一						
二	五	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	三						
二	四	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	六	五	三	八	二	四	三	一	三	三	九	二	四	一	一	一	一	一
三	一	三	一	一	二	二	一	一	二	三	二	一	一	一	一	一	一	一
二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
九	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
九	六	七	一	八	三	四	八	〇	七	二	三	六	四	五	一	二	一	一
〇	七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六	〇	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

二七

在 現	學 年 別	本 年 入 學 狀 況		備 考	學 費				徒 習	
		實 計	本 科		舍 費	在 舍 費	宿 舍 費	寄 費		
椿東村	第一學年	一五〇	一〇〇	別に等曲を修むるものは月額貳拾錢を要す	三、七〇〇	一、五〇〇	七、〇〇〇	一〇、五〇〇	四、〇五〇	一、三〇〇
萩町	第二學年	四五〇	一〇〇		三、七〇〇	一、五〇〇	七、〇〇〇	一〇、五〇〇	四、〇五〇	一、三〇〇
	第三學年	二五〇	一〇〇		三、七〇〇	一、五〇〇	七、〇〇〇	一〇、五〇〇	四、〇五〇	一、三〇〇
	第四學年	三四七	一〇〇		三、七〇〇	一、五〇〇	七、〇〇〇	一〇、五〇〇	四、〇五〇	一、三〇〇
	計	四四二	四〇〇		一三、七〇〇	五、〇〇〇	二八、〇〇〇	三七、二〇〇	一六、二〇〇	五、二〇〇
	第一學年	二二二	一〇〇		一三、七〇〇	五、〇〇〇	二八、〇〇〇	三七、二〇〇	一六、二〇〇	五、二〇〇
	第二學年	二二七	一〇〇		一三、七〇〇	五、〇〇〇	二八、〇〇〇	三七、二〇〇	一六、二〇〇	五、二〇〇
	計	四四九	二〇〇		二七、四〇〇	一〇、〇〇〇	五六、〇〇〇	七四、四〇〇	三二、四〇〇	一〇、四〇〇
	習補科	二八	九		一三、七〇〇	五、〇〇〇	二八、〇〇〇	三七、二〇〇	一六、二〇〇	五、二〇〇
	合計	一九九	九		四一、一〇〇	一五、〇〇〇	八四、〇〇〇	一一一、六〇〇	四八、六〇〇	一五、六〇〇
	卒業生	五九	七		一三、七〇〇	五、〇〇〇	二八、〇〇〇	三七、二〇〇	一六、二〇〇	五、二〇〇

二六

卒業生 生況	家庭に 在る者	籍 別							
		計	他府縣	他郡市	見島村	六島村	嘉年村	徳佐村	地福村
三九四	二四九	九八	三	七	一	一	一	一	一
	結婚せし者	九八	二	五	一	一	一	一	一
	學校教員 奉職者	五一	三	三	一	一	一	一	一
	他學校在 學中の者	五三	二	一	一	一	一	一	一
	補習科在 學中の者	三〇	一	一	一	一	一	一	一
	其他の職業に 従事せる者	四八	一	五	一	一	一	一	一
	死亡者	五〇	一	五	一	一	一	一	一
	計	九八	二	〇	一	一	一	一	一
		二〇	一	二	一	一	一	一	一
		四一八	一	二	二	一	一	一	一
		七八六	一	〇	四	二	一	四	二
		七八六							

記念式諸催事項に寄せられたる  
來賓各位の批評

我が創立十周年記念音楽會、其  
他諸催事項に對して寄せられたる  
來賓各位の批評は、直接に間接に

何れも好意ある批評であつて、成  
功といふ一語にまどめて下さつた  
事は、我校の頗る光榮とする處で

近代教育の傾向を通して  
萩高女の音楽會を聴く

來の主智的教育觀から見たる學校  
の窮窶さ、困苦さが、漸次  
社會的に融け行く大勢に對しては  
或る種の論者に異議もあらうが、  
人間を造る機關としては結構なる  
傾向と云はなければならぬ、之の  
意味に於て吾人は目下教育と云へ  
ば直ちに男女を平等に取扱はんと  
する中性的方針から、更に世界の  
教育方針が脱却して性を尊重する  
新傾向を帯び來らんことを希望す  
るものである。萩高等女學校の開  
校記念音楽會なるものも、内容や  
形式は如何にもあれ、斯る見地か  
ら拜聴するならば決して一顧の價  
値なしとせぬ、先づ音楽會の組立  
から云ふならばオペラ化さんどす  
る音楽体操の近代傾向を縮寫した  
と云つてもよからう、ダンス、童  
謡、歌劇と分類すれば臆劫だがま

だ今日の音楽体操の方針が大に芝  
居じみて來たと云へば、十年前に  
死んだ漢學先生は驚死する程の氣  
分があり、と深よつて居た、之  
の氣分を彼の大講堂一杯に漲らし  
得たのは萩高女當日の成功と云は  
なければならぬ、加ふるに吾人の  
最も嬉しかつたのは、出演生徒の  
全部が談話と云はず、ダンスと云  
はず歌謡はもとより極めて眞面目  
に充分の自信を以て、而も如何に  
もウアでうい、しい氣分を以て  
終始したことである、情的教育の  
秘決は蓋し此所にある、樂の正な  
ると淫なるとも此所にある、傑女  
静御前も、鎌倉鶴ヶ岡社殿で舞袖  
を翻へしてこそ萬古不磨の權威者  
となり得たのである、身の窮困に  
斃れざらんとする熱鐵の情が極め  
て嚴肅に率直に鎌倉武士の肺肝に

徹しなかつたら静も唯の白拍子と  
して湮滅したに違はぬ情的教育か  
ら純眞の量を取り去つたならば其  
の餘の努力はセロだと云つても宜  
からう、その純眞味が最初エ風  
船から終ひまで一貫したのは殊  
に嬉しかつた、中にも歌劇藤公の  
母は、オペラとして劇以上の或る  
ものを吾人に投げ與へたと感した  
其で當日の短評を試れば、豫期以  
上の成功と云ふを以て蔽はれ、之  
の呼吸で教育界の新向に楫せば確  
かにまた成功すると信せしめたこ  
とを斷定する、唯だ歌唱が今一層  
の力ありピアノがもう少し響い  
たなら感興も一入であつたらうと  
思はれたは吾人の最負の慾耳慾目  
かも分らん、而し、ベースとソナ  
ラの聲に對しては平素から今少し  
熱心なる練習を積まれんことを希  
望する (下略)

あるが、其の批評の要点は、何れ  
も、大同小異であつたから、十一  
月四日長州新聞社説を左に再録  
して批評者各位に感謝の意を表は  
す。

教育の傾向が智情意の完成を目  
的とするに變り行く結果、自然從



### 開校十周年記念 南園文庫設置計劃

今回記念式に際し郡内町村より参列したる百數十名の卒業生は同日別室に同窓會を催し記念事業に就て協議したるが結局南園館に開校十周年記念南園文庫を設置することとなりぬ依て左の趣意書並に費金募集規程を卒業生及在校生父兄其他有志者に配布したるが願募者多くして本稿締切までに受理したる寄附金額は左の如く尙續々申込あり

#### 趣意書

拜啓 其の後益々御機嫌よくいらせられますこと、存じます、陳れば母校萩高等女學校も、本年開校十周年を迎へまして、愈々隆昌に向ひつゝありますことは、た互に此の上あく嬉しく思ふ所で御座います、就いては此の際記念事業を計劃したいと種々凝議致しました所、遂に開校十周年記念南園文庫を母校内南園館に設置し、之を母校々友會たる南園會に寄付することに話が纏りました。

既に御承知のことと存じますが、世界大戦後、各國とも競つて文化の建設、國力の充實に最善の努力を拂つ

又卒業生も此處にて思ふ様に、靜に修養することが出来るのであります、其の上一般婦人の方々も、此處でも勉強が出来るやうになりましたならば、非常にお仕合の事と存じます、此の記念文庫を南園館に設置するといふことは、女子教育の爲め、地方文化の爲め、眞に絶好の施設だと信じます。

右の次第でありますから、此の際皆様方の義侠心に訴へ、此の事業の成立を期したいと思ひます、何卒奮つて同情ある御援助を仰ぎたいと存じます、茲に南園文庫設立の趣意を述べ、設立費金募集規程を添へ御賛同を希ひます、時節柄何とぞ御自愛遊はしませ、かしこ

大正十一年十一月

#### 發起者 山口縣萩高等女學校卒業生

- |       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 高垣 清子 | 馬庭タマヨ | 山本 幸  |
| 有田 ミサ | 藤田 豊子 | 河野 千世 |
| 櫻井 由子 | 堀水フク子 | 松屋 ナヨ |
| 江原キクコ | 久保 容枝 | 高木 梅代 |
| 岡本 秀子 | 伊藤 芳子 | 白井 ナカ |
| 増山 静子 | 師井 アイ | 小野 サキ |
| 金子 錦  | 齊藤千代子 | 風 智世子 |
| 杉 登志惠 | 高洲英代子 | 堀上ヨシ子 |

てゐますが、それには男子ばかりでは無く、婦人の自覺努力に竣つことが大であることは申すまでもありません、眞の自覺努力は知識修養の向上による結果であります、近頃我が國婦人達の間に、讀書熱の盛になつたことは此の意味に於て誠に喜ぶべき傾向と存じます又教育上には、非常に自學自習が重んぜられることとなり、唯教師より授かるばかりでは知識の量も限定せられて居るのみならず、自ら進んで研究する所に、知識の確實も得られ、勉學の良習慣も得られ、眞の興味も得られるといふ事が盛に唱道せらるるやうになりました。

幸母校南園館は、歴史上深い由緒があつて修養する所としては、此の上ないよい場所でありますから、其の一部を利用して、此處に文庫を設置致し、主として婦人に適當なる圖書を備付けましたならば、場所としては誠に申分の無い所と存じます。右の趣學校にも相談いたしました所、學校に於ても、兼々多少の計劃もあつた折柄のことであるし、大に此の舉を賛成せられました、さていよいよ設置せられた暁には、在校生徒は此處にて参考圖書により十分勉強が出来るのみならず

- |       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 山内 ヒサ | 水村 サダ | 林 貞子  |
| 森田ミチ子 | 安田 清子 | 秋山 佳重 |
| 岸 緑   | 國重 淑子 | 兒玉 章子 |
| 後藤かつよ | 竹内 恒子 | 林 静子  |
| 山由 ミツ | 倉重フミ子 | 小枝千代子 |
| 堀 フミ  | 三好 マツ | 植村 マサ |
| 河村 綾子 | 宗業ヨシコ | 田口 雲枝 |
| 堀 コト  | 松浦ヒサコ | 阿武 菊子 |
| 宇佐川都子 | 大藤 アイ | 兼重 龜子 |
| 河村千代子 | 末若ヨシコ | 瀧口 静江 |
| 岩崎ムメノ | 國重 米子 | 末成 利子 |
| 林 菊香  | 山根 千勢 | 岡 イセコ |

#### 開校十周年記念南園文庫

##### 設立費金募集規程

- 一、費金は同窓會員其他篤志者の寄附に俟つものとす
- 二、費金の寄附金額は随意とす
- 三、寄附金は發起人に申込むか又は直接山口縣萩高等女學校内南園會に申込むものとす

但し遠隔地に在る人の送金は山口縣萩高等女學校(振替貯金口座番號福岡二六四)に拂込むを便とす  
此の場合には裏面通信欄に開校十周年記念南園文庫

設立費金寄附の旨を明記し尙第何回卒業生たること及び卒業後改姓したるものは舊姓をも併記せられたし

四、費金寄附者の氏名並に金額は開校十周年記念南園文庫設立費金寄附臺帳に登録し永く南園文庫内に藏し又南園會報に掲載するものとす

五、費金の保管支出は同窓會長に委嘱し之に關する細則は別に之を定むるものとす

南園文庫設立費寄附芳名録

金額	寄附者氏名	金額	寄附者氏名
七〇、〇〇〇	萩高等女學校職員一同	三、〇〇〇	藤野 トシ
二、〇〇〇	神原 幸子	二、〇〇〇	町原 シカ
二、〇〇〇	吉村 菊	五、〇〇〇	齋藤 文子
三、〇〇〇	馬來 京子	一、〇〇〇	三好シヅ子
三、〇〇〇	岸森 京子	二、〇〇〇	萩原千代子
二、〇〇〇	柴田タケコ	二、〇〇〇	中津井節子
二、〇〇〇	田村フキコ	五、〇〇〇	三輪 芳子
五、〇〇〇	津森富貴子	二、〇〇〇	中原 則子
五、〇〇〇	松崎 ちよ	三、〇〇〇	中原 則子

五、〇〇〇	阿武ツチ子	三、〇〇〇	北村 龜子
二、〇〇〇	須子美登里	一、〇〇〇	岩武 綾子
一、〇〇〇	藤井 三枝	一、〇〇〇	藤原 龜藏
五、〇〇〇	山内ハツエ	二、〇〇〇	大山千代子
一、〇〇〇	井本 捷子	二、〇〇〇	羽仁 タキ
三、〇〇〇	山田源治郎	五、〇〇〇	林 まつ子
三、〇〇〇	久保 一郎	五、〇〇〇	林 菊香
三、〇〇〇	江原キクヨ	二、〇〇〇	長谷さよ子
二、〇〇〇	岡本 秀子	二、〇〇〇	野村さく子
五、〇〇〇	久保 春枝	二、〇〇〇	品川 政子
三、〇〇〇	林 貞子	五、〇〇〇	水津 ヒデ
二、〇〇〇	山本 タキ	一、〇〇〇	山田 ミツ
五、〇〇〇	岩崎 貞子	三、〇〇〇	落合 敏子
二、〇〇〇	西山キク子	二、〇〇〇	佐々本仁子
一、〇〇〇	古川 慶藏	二、〇〇〇	岡 朝子
二、〇〇〇	松尾 治子	二、〇〇〇	松村 糸妣
二、〇〇〇	佐伯 宇一	二、〇〇〇	磯村 トミ
二、〇〇〇	土田 芳子	二、〇〇〇	藤川 清子
三、〇〇〇	中村アキコ	二、〇〇〇	有吉 富子
		二、〇〇〇	關屋 子代

二、〇〇〇	田羽百合助	一、〇〇〇	森屋 露子
二、〇〇〇	山田 治郎	二、〇〇〇	竹内 ツヤ
一、〇〇〇	永安 信一	一、五〇〇	早川 昭子
五、〇〇〇	島屋 ッサ	二、〇〇〇	山中 松子
五、〇〇〇	仲子 菊江	一、〇〇〇	村上 スエ
三、〇〇〇	金子 徳子	二、〇〇〇	山内 ヒサ
二、〇〇〇	高州 美代	三、〇〇〇	原田ハル子
二、〇〇〇	杉 トシエ	三、〇〇〇	三好治三郎
二、〇〇〇	堀上 ヨシ	三、〇〇〇	内藤 ミツ
二、〇〇〇	池田 トミ	二、〇〇〇	伊藤 芳子
一、〇〇〇	久保仙太郎	四、〇〇〇	厚東 佐世
五、〇〇〇	福田 文	三、〇〇〇	厚東 フミ
二、〇〇〇	大谷 波子	三、〇〇〇	厚東 美恵
一〇、〇〇〇	阿武 菊枝	二、〇〇〇	中村八千代
一、〇〇〇	町田 松子	五、〇〇〇	瀧口 静江
五、〇〇〇	領家マズ子	二、五〇〇	瀧口芳宜江
三、〇〇〇	半井 嘉子	三、〇〇〇	石川 利吉
一、〇〇〇	佐竹 昌子	三、〇〇〇	秋山 貞一
三、〇〇〇	永田 能生	三、〇〇〇	笹井 ヒナ
一、〇〇〇	神代 照子	二、〇〇〇	平田チエ子

一、〇〇〇	金子ヤヘ子	三、〇〇〇	宇佐川都子
一、〇〇〇	松浦 静子	五、〇〇〇	高木 梅代
一、〇〇〇	宮内 鶴子	二、〇〇〇	大藤 アイ
二、〇〇〇	中原 澄	二、〇〇〇	小田 花子
一、〇〇〇	佐伯フサコ	二、〇〇〇	金子 静子
三、〇〇〇	藤田トヨコ	二、〇〇〇	有田 シヅ
一、〇〇〇	中村 静子	二、〇〇〇	渡邊 ヨシ
二、〇〇〇	村木 勝子	二、〇〇〇	白井 チカ
二、〇〇〇	神田志都子	五、〇〇〇	石川 安吉
三、〇〇〇	宋成 利子	二、五〇〇	石川 久子
二、五〇〇	石川 梅尾	二、〇〇〇	吉村 キヨ

計 五二一、〇〇〇



藤公の母

中野貞介

登場人物

利助 (伊藤博文公の幼名)
母 (利助の母、琴子刀自)
養祖母 (利助の養祖母、伊藤彌右衛門氏の妻)

場 所
幕 本

時 代

徳川の末期

霞々たる一面の銀世界、吹雪時々轟ひ来る、利助の養家の養所、利助の母琴子、爐によりたる其の養母に乾餅をすまめながら對談して居る、やつれたる琴子、貴しきやうな輕卒の儀、何となくものあはれである。

(合唱)

飛雪紛々 柳絮舞ひ
枯林に咽ぶ 大吹雪、

(獨唱)

雪は鷺毛に似て飛んで散亂し

いつも口癖の様に申して居ます。(茶櫃に乾餅を入れ、湯を注ぎ養母にすすめる)

(合唱)

長の年月 住みなれし
東荷の村を 後にして、
來りし時は 西東、
何のよるべも なごさなる
あまの小舟の 浮沈み、
衆生界の ならはしか

(獨唱)

さほさりながらゆく末は、
伊藤の家の 暖き
意の露に うるほひて、
我が撫子の 花や咲く
我が撫子の 花や咲く

養祖母 (思案顔に) 今日はずい寒い。屋外に復々烈しい吹雪の聲がする。利助はとうして居るだらう。爺さんもあの子は見込のある子だ。先できつと偉い人になるだらうといつて居りなされるぞ。母 (稍々静しげに) それで復々憂の色たん／＼とまゝり行く。ありがたうございませう。そんならいつて下さいませう。何だか涙々しくなります。もし彼子が若露奉公して一年になりませう。朝夕氣にかか

人は鶴鶴をきて立つて徘徊す、

(合唱)

有爲轉變の 世の中や
鐵國山下の 松本の
殖生の小家の わび住居、

母 (養母に向ひ) 冬は申しながら、今年はとりわけお寒いことございませう。それに昨日今日は又風さへ加はつて、ひどいしげでございます。どうぞ爐によくおあたりになりまして、お感冒を御免なす。

(息たはり、薪をくべる。)

養祖母 (手を爐にかざしながら) ありがたう、熊毛の東荷村ごころが寒い。

母 (それはこちらがかんじが烈しいございませう。その上こちらが冬になるさ、寒風が大層きつうございませう、あちらではこんなにしげることばございませぬ。)

(屋外に烈しい吹雪の聲がする。)

養祖母 (寒さうに) あゝさうかね。あなた方が歌に來て何年やらになつたな。

母 (感慨に堪へぬ面持にて) も一三年になります。來た時はほんの着のみ着のまままで、此處の様子も分らず難儀して居ましたが、あなた方に親子三人共もらはれて、いつも氣をつけて下さるので、十歳さん (琴子の夫) も喜んで、此の御恩は忘れてはならぬぞ。

るはあれの身の上。あの子を立派な人にするのは、母なる私の身の務、たつた一人の利助をば、世の爲、お國の爲、何かのお役に立つ人になりたいのが私の一生の願でございます。そして是非あなた様方お二人の年ごろの御恩報じをさせなければなりません。

(獨唱)

黄金も玉も 何かせむ、
それにも勝る 利助をば、
思ふ心は ぬばたまの
闇にあらねど 親の身は
子故に迷ふ 夜の鶴。

養祖母、利助は今年で何歳やらになつたな。

母 かつて十二歳になります。

養祖母 (いたまじしげに) あゝさうかね、また年はも行かぬに若露奉公さうつらからうのう。

(合唱)

やがて世界の 英雄と
呼ばれし公も いどはしや、
皚々どつむ 大雪に
道だに見ぬす いやつのる
吹雪に裾を ひるがへし、
ふるひながらに己が家



さしてぞ歸る

雪中の中

利助 (如何にも寒げに、襦より下駄を少し出しかけて) あ、寒い、今日はほんごに寒い、一寸火にあたらしてお呉れ、一寸あたらしれて呉れ、あ、寒い、あたらしれてくれ。

母 (驚異の面持にて) どうしたの。

利助 (寒ければ、ごきれ〜) 今日な、旦那様が他所を訪問せられました、ところがこんな大しげ、大しげに、さりましたので、木履を借りて歸られたよ、私はな、その借りて歸られた木履、その木履を返して、も旦那様の穿いて行かれた下駄、此の下駄、懐の下に手をかく) を取りに行つて、今其の歸り送、あんまり寒いもんですから、今一寸寄つたのですよ、あ、寒い、寒い、一寸あたらしれて呉れ、あたらしれて呉れ、(ふるひながら母の顔を見る)

(獨唱)

言を聞くより

母親は

我が子を見れば

袖狭き

荒袴衣

身にまどひ

色青さめて

ふるひたる

おはれのさまに胸せまる。

母

(堅執れど底力あり) これ利助や、平生言つて歸かすのはここですよ。旦那様のお言附で使に行つたその者が、旦那様の御用も濟まぬに自分の宅に歸るのは、御用をたろそかにしたものでありませんか。普支那の風といふ人は、九年の御水を耐々爲に、外に居る事

(獨唱)

教へはしつれ

恩愛の

親の心は

皆同じ。

(合唱)

母の教を

胸にあり、

歸り行くなる

いとし子を

見送る母の

搖籃を

動かす手より

伊藤公、

やがては明治

大帝の

輔弼の臣に

ならせられ、

大和島根を

明らけく

治まる御代と

なし給ひ、

山より高き

たらちねの

母の心に

そはせらる。

處に子守歌の樂の音起る。

静に幕

十三年、家門を過ぐれども入らないで、一所懸命職務の爲に盡され其の結果遂に洪水を防ぎ、人望を得て大層立身せられ、後世から聖人さ仰がれる方ごなられたと申すではありませんか、あゝここだよ、ここが辛棒。これ、利助!。いくら寒いとて、ここが辛棒だよ、利助!

利助 (うふだれながら腹をして) ハイ……。

母 (愛情のこもりたる聲をあけて) いつもいふ様に、人は自分で、自分の運を開かなければふりませぬ。

利助 (キツとした聲にて) ハイ。母様の平生の教は忘れは致しませんけど、今日はあまり寒かつたので、つひ一寸立寄りました。あゝほんごに私が悪くありません、お免し下さい。母様!

母 (一層緊張した聲にて) 分りましたか、どうぞよく辛抱し、旦那様によくと任へ、立身出世して家を興し、わ天子様や、御國の爲に盡す立派な人になつてお呉れよ。

(合唱)

孟母斷機の

増したる母の

おはれなる哉

再び雪の

主家をさしてぞ立出づる。

養母 (いかに不便さうな面持にて獨語) ほんごに可哀想に。

母 (不便な姿を見兼ね、思はず立出でて獨語) お、利助や。これもみ

教にも

庭訓に、

利助殿、

降る中を

出づ。

(利助母にかかひて、靜に真心のこもりたる聲をなし、主家をさして立出づ。)



南園會報

第十號

第一號  
 第二號  
 第三號  
 第四號  
 第五號  
 第六號  
 第七號  
 第八號  
 第九號  
 第十號  
 第十一號  
 第十二號  
 第十三號  
 第十四號  
 第十五號  
 第十六號  
 第十七號  
 第十八號  
 第十九號  
 第二十號  
 第二十一號  
 第二十二號  
 第二十三號  
 第二十四號  
 第二十五號  
 第二十六號  
 第二十七號  
 第二十八號  
 第二十九號  
 第三十號  
 第三十一號  
 第三十二號  
 第三十三號  
 第三十四號  
 第三十五號  
 第三十六號  
 第三十七號  
 第三十八號  
 第三十九號  
 第四十號  
 第四十一號  
 第四十二號  
 第四十三號  
 第四十四號  
 第四十五號  
 第四十六號  
 第四十七號  
 第四十八號  
 第四十九號  
 第五十號  
 第五十一號  
 第五十二號  
 第五十三號  
 第五十四號  
 第五十五號  
 第五十六號  
 第五十七號  
 第五十八號  
 第五十九號  
 第六十號  
 第六十一號  
 第六十二號  
 第六十三號  
 第六十四號  
 第六十五號  
 第六十六號  
 第六十七號  
 第六十八號  
 第六十九號  
 第七十號  
 第七十一號  
 第七十二號  
 第七十三號  
 第七十四號  
 第七十五號  
 第七十六號  
 第七十七號  
 第七十八號  
 第七十九號  
 第八十號  
 第八十一號  
 第八十二號  
 第八十三號  
 第八十四號  
 第八十五號  
 第八十六號  
 第八十七號  
 第八十八號  
 第八十九號  
 第九十號  
 第九十一號  
 第九十二號  
 第九十三號  
 第九十四號  
 第九十五號  
 第九十六號  
 第九十七號  
 第九十八號  
 第九十九號  
 第一百號





ては女子は男子の前に出づべきものではなく、甚だしきは洗面器さへも別にすべきものであると言ふ程にして、女子に教育を禁じて居たものであります。

我國の女子教育は今後一段と進むべきものであります。學習科目についても平素それが實際の役に立つ様にしなければならぬ。良妻賢母主義は、我國にのみいふ事ではなく、各國何れも同じであります。何人か良妻を好まないものがあらう。何處に愚母を歓迎する國があらう。併し此の主義も實際の情況は如何であらうか。其の理想が婦女子によつて如何程社會に實行されて居るであらうか、其の程度は疑問であります。

圓滿なる知識、道徳、身體の方面について今日の時勢に適應せしむる事が、今日の女子教育に必要な事でありませぬ。殊に徳育と體育について、十分つとめなければなりません。皆さんが後日一家をなしたる時、良人が外で活動して歸つて見れば、妻が病床に臥して居る様では良人の活動力までも減するであります。圓滿なる知識と強壯なる身體と道徳とは、女子教育の三大要件であります。

今日、日本の家庭に於ける婦女子の缺点是、家庭生活に規律節制のない事と、經濟智識の足らない事でありませぬ。社會が進歩しつゝあるに拘らず、家庭生活は依然として舊套を脱せないものであります。即ち規律なく無節制で順序かないといふ事は、仕事に手間さり勞力を費して不經濟な事だと思ひます。一々實例をあげる迄もない事であるが、此の点は率先して改良しなくてはなりません。

一家の規律節制は一村の規律節制となり、一村の規律節制は一國の規律節制となります。實に一國の生命を負ふものは婦女子其者であります。皆さんは學習に於ても規律節制を重んじなければなりません。次に經濟の点が理想的に行はれない。我國多くの主婦は經濟に無頓着であります。不經濟とは無用なる費用を投じて、人前を作る事でありませぬ。これは女子のみならず男子にもあります。

或外國の紳商が日本に来て、先日焼けた帝國ホテルで觀迎をうけました。當時主人側も賓客側も多數あつて觀迎は頗る鄭重なものであります。外國紳商は其の厚意を謝するため、人別答禮に廻る中、さうしても或る人の家を見出す事が出来ないので、翌日改めて尋ね廻り、漸くにして其の家を見出した處、極めて貧弱な生活をして居たので、其の紳商は異様の感を抱いたといふ事であるが、これが人前を飾るので、實際の資力と生活の程度とが合はぬ例であります。

外國の婦人殊に佛國の婦人が贅澤な様に見えるが、實は甚だ質素に暮して居るのであります。佛國の諺に「臺所に食物を腐敗せしむるは主婦の恥」といふのがあります。此の心掛は今日の富を致し、戰時に於ては良人をして安心して戰に臨ましめたのである。これは主婦が専ら家の整理をして男子的の勞働までした結果で實に尊き精神から出たのであります。

一家内に於ては節制規律が極めて大切であります。生活改善の實は、一家の主婦が率先してなさなければなりません。社會の働の裏面には女のある事を忘れてはなりません。寧ろ六尺の男子を働かすよりは、婦女子の力による方が更に大なる力となる事があります。

我國の女子教育は充實したものでなくてはなりません。皆さんは此の意味で毎日勉強して居るであらう。故に社會に出て、實質ある家婦として其の責任を全うし得る人とならなくてはなりません。

x  
x  
x  
x  
x  
x  
x



## 玉木砲兵中佐講演

本年四月十二日 玉木砲兵中佐殿御來萩の際 校長の請により、特に來校の上生徒に對して講話せ

られたる要領なり (文責在記者)

私は國と母についてお話ししたいと思ひます。子供が大人になつて偉く立派な人になるのは、固より先生の教育の仕方にも依りませうが、それよりも家庭に於ける教育は更に大切であります。幼時母より受ける感化は實に大なるもので、昔の偉人傑士といはれる人は悉く其の母に依て育てられたといつてよいのであります。

吉田松陰先生の母も偉い人、乃木大將の母も偉い人、乃木大將のお母さんはこれは茨城縣の土浦藩の人であります。が、何れも、しつかりした偉い人でありました。孟子のお母さんが賢母であつたと云ふ事は、諸君は已に承知して居られる事でありませう。

現參謀總長上原元師が申されるのに自分の今日あるのは實に母の教訓の賜である。自分が手習より歸つた時、母が小暗き室で糸車を紡ぎつゝ、自分を育て下さる有様を見る度に、自分の心にはいひ知らぬ大なる感銘があつたのである。眞に親の感化といふものは、大なるものであります。

難苦缺乏に堪へるといふ事は大切な事でありませう。戦争は悪い事ではありますが、其の慘禍を實見せる人は、それが貴い經驗となつておまゐります。不幸にも日本は、日清、歐洲戰亂、青島、西比利亞、と澤山の戦争をいたしました。たが何れも國外で行はれた事として、戦争の慘禍を見せつけられた人は割合に少いのであります。今後の人は多くそれを知りませう。それを知らない人の家庭に生育せる人は、元祿時代の人の様な、文弱に流れた人となつてしまひはせぬかと、憂慮に堪へないのであります。

それに引きかへて歐洲の國々の事を考へると、歐洲にては何しろ五年に亘る大戰によつてあらゆる難苦をなめ、缺乏に堪へ、親死し、子死し、兄弟亦死し、取殘されたる人は種々の難義に打克つて、其打克つた心で子供を育

て、行くのでありますから、將來人物の出づる事は察するに難くはありませぬ。

然るに日本に於ては此事がありません。故に將來に於て日本と歐洲との距離は、次第に相遠かるだらうと思はれます。其の上米國に於て先頃開催された軍備制限會議により、日本に於ては軍艦も減じ陸軍も減少する事となりましたから、將來の戦争に對しては十分の覺悟がなくてはなりません。

今迄は日本は世界の五大強國否三大強國の一つになりましたが、若し同數の人數で同數の兵器で戦ふならば英米に比して決して負ける心配もない。英米兩國も實はそこを憂へて居りますが、併し非常に注意しなければ現在の地位より振ひ落される事となるでせう。國の強い弱いといふのは、金の多寡にはよりませぬ。兵力の多少にも依りませぬ。學問進歩の程度にもよりませぬ。現に學問に於ては日本は常に英米の後を進んで居るではありませんか。然るに日本が強いのは其の精神にあるのです。即ち國を愛するといふ義務心があるからであります。此の心は甚だ大切であります。修養しなければすたるものであります。男も女も同じであります。日本人は皇室に盡すの考を一日でも忘れてはなりません。

日本は實に結構なる國であります。其の結構な理由を語りませう。開關以來萬世一系であつて吾々臣氏は皆皇室より派生したもので即ち大なる一家となつて居る事と、二千五百有餘年皇統連綿たる事等はそれでありませう。外國に於ては選挙に依りて大統領を作り、強者自ら征服に依つて王となつた例は少くありません。けれども日本にはそれがありません。殊に我大日本帝國は國家が健全でありますから警察の手も行き届きて居りますので殺される事も傷けられる事もありませんが、文明國を以て自任して居る米國に於ては、白晝尙追刺が出て、短銃をつきつけ、手をあげよと命じてポケットにある金錢物品を強奪して去るやうなことがあります。又桑港に於ては支那人の經營する殺人請負會社がありまして、人を殺す商賣をして居ります。誠に危険ではありませんか、近い例は支那の状態は極めて不秩序で、露西亞は近時無政府の状態にあります。眞面目に働く者はありません。忠實なる人は獄に投せられ、盗人が役人をつとめて居る様な有様で實に恐るべき傾向があります。日本に於ても此の點に大に注意がいります。露獨共に歐洲戰亂に依りて國が破れましたけれどもこれは外敵に

依つて破られたのではなく、國內から破れたのであります。これは其の精神が腐れたからであります、將來國家を背負つて立つ人々は特に此の點に注意して精神修養を忽にしてはなりません。

尙講演後、乃木大將の遺墨十數点及び大將への思賜の金時計を示さる、金時計は、明治天皇ヨリ乃木大將へ御下賜相なりたるものを大將の遺言によりて、玉木氏が譲り受けられたる貴重品

x  
x  
x  
x  
x

### ◆ ラヂウムについて

山口高等學校講師 佛國理學博士 今津 明氏

本年三月二日 今津先生當地の親戚へ來られたる際特に繁忙中を差繰り本校生徒の爲めに講話せられたる要領なり (文責在記者)

此の頃世の人々が不思議に思ひつゝある所のラヂウムに付いてお話しを致します。先づそれに先立ちてX光線の説明をさせよう。X光線は明治二十八年十一月八日に獨人レントゲンにより發見されたのである。總べて光線といふものは波の形をなして進むものである。X光線の普通光線と異なる所は波長が極小であつて普通光線の波長の約數万分の一若しくは數十万分の一である。波長とは波の低い所より高い所より高い所までの長さをいふ。X光線は極めて波長の小さき爲に大部分の物はこれを透過し得るから、人体の内部をも見ることが出来るのである。ラヂウムの發見以前ベクレル線が發見せられた。それは佛國大學教授ベクレルと稱する人がウラニウムと云ふ鑛石は日光に當らせ次に暗い所に持行けば光を放つものである。其の光に付いて種々研究中

の雨天で研究も思ふまゝにならぬので彼はこれを寫真原板ごとにも机の抽匣に入れ置き、一週間を経て之を出して見たら原板に現像して居た。これに依つて始めてウラニウムは暗中にてX光を放つ事が見出された。これX光線の發見後三ヶ月即ち明治二十九年二月の事であつた。次に發見者の略歴を述べませう。ポーランド國ワルツに生れたるマリヤと言へる婦人が巴里の大學を二十五才で卒業し二十九の時キョリー家に嫁きマダムキョリーと呼ばれて居た。現時は五十六才にて巴里大學の教授をして居られる。夫人はビツチブレンドと稱する鑛石に付いて、いたく研究せられ遂に明治三十一年に二つの原素を發見せられた。一つはラヂウム一つはポロニウムにてラヂウムは放射素ポロニウムは夫人の生國がポーランドであるので其の名をとつて名づけたのである。ラヂウムは鑛石中僅かに一千万分の一余りしか含んで居ない。今鑛石を一里の長さに延長したならば其の内に含まれるラヂウムは僅かに一厘に過ぎない位である從來は原子説とて宇宙間の物質は多くの原子がより集つて出来る。一滴の水を地救大にすれば原子はテニスボール大故、如何なる顯微鏡にてもこれを見ることは出来ぬ。

そして原子八十三種あつてこれが離合集散の結果、物体が出来ると唱へられてゐたがラヂウム發見後は原子説は破壊されラヂウムの原子は集合して物体が出来ると、又原子説に反して分子が小さく分裂するのみか、猛烈なる勢力で飛び出すものである。其の速力は如何といふに地救より太陽までの四千万里の距離を特急の汽車では三百六十五年かゝり大砲の弾丸にて九年かゝり音の速力でも十五年もかゝるのに、分子の飛び出す速力は八分と十八秒に過ぎない。これより後は化學界革命で世の總べてのものは電子の離合集散して出来るものであることになり電子説は最も簡單にて我等の欲望を遺憾なく表したものである。電流は電子の運動にて光は電子の上下の踊、電氣は電子の集合である。ラヂウムの後の分裂は鉛なるがそれは一千七百五十萬年後であるといふのであるから心配するには及ばぬ。アルチミストと言ふ化學者は鉛を金に換へる事を研究し、又九州大學教授丸澤と言ふ人は木の葉を銀に換へる事を説いてゐる。ラヂウムの働きはエマナチオンの働にして、エマナチオンは多くのエネルギーを持つたものなれど、長く活動は續かず。四日毎に其の力を減退し一ヶ月余りにて全く其の力を失ふが故にラヂウム湯を飲むにしても日數を經る程其の効力は減する。ラヂウムの醫療上の効果はエ

マナチオンを直接皮膚にあてると火傷の如くなるが糖尿病など其の他の病氣によろしい。草木に與へれば其く成長せざれども人に與ふれば俗に不老の薬とまで稱せらるゝ程である。用途は醫療上の目的やダイヤモンドの眞偽を見分けることや寶石の色付けなどに用ひられる。ラヤユーム温泉はエマナチオン瓦斯を溶かしたるものにて其の療法は吸入療法飲用療法入浴療法などある。其の最も名高いのは鳥取縣の三朝にて東洋第一と稱せらる。朝鮮にては昔から巖石の間より湧出る水を薬水と言つて何時も入浴し又無上の良薬として飲んで居るのがある。病氣にかゝればこれを飲む、随分多く飲む甚だしきは十二三杯は難なく飲む、私は嘗てこれを調査した所計らずもこれはラヤユーム温泉であつた。朝鮮の李王殿下におかせられては一日も此の薬水がなくてはおすましにならぬこの事にて先年虎列刺病患者が此薬水を飲みに行つたので警察より使用を禁止せられると、王は私をおよびになつて王宮の庭中で薬水を見出して呉れどこのことであつた。私は仕方なく四十人余りの人夫を使つて彼處此處を探す内其の庭内に岩のあるのを見出し其處を掘り起せば案に違はずラヤユーム水が噴出して來た王は非常におよこびで妃殿下をはじめおつきの人々と共に私をも招かれ、晩餐會を催され皆の方が之をお飲みになつたが、四杯以下の人は一人もなかつた。其所に御親戚の方が虎列刺病て人の脊に負はれて來られ此薬水をお飲みになると、四五日の後全く快復したとの知らせが私の許に來た。水を濾すには砂が最もよろしく、菌及び塵を除く作用をするから殊に巖の間を流れる水は最も良水にして薬水は岩石の間を流、一つには四季温度が變らぬ特徴を有するものである。昔養老の瀧で孝行な子供が之を掬んで飲んで見たら酒であつたといふが、これは岩の間を流れる水で味がよくかつたから斯う云ふたのに過ぎないと思ふ。余り時間が長くなるからお話はこれで留め置きます。



### 信念の確立について

特別會員 池上 岩太郎

かくすればかくなることと知りながら  
やむにやまれぬ大和魂

これは松陰先生の詠まれたものである。彼の嘉永六年アメリカ水師提督ペルリが、俄然浦賀の沖に來つて、家光鎖國以來二百年間の太平の夢を覺醒してより、或は開國論に、或は攘夷論に、國內沸騰して喧嘩を極めし時、先生は非常に之を憂へられ、我身のことは忘れて一意國の爲に奔走せられた。又幕府の處置が、朝廷を蔑ろにし輿論を無視したるを憤慨し、猛然起つて之に反對せられた。之が爲終に幕府に囚はれて江戸小塚原刑場の露と消えられた。其際詠み出でられた歌であつて、國家の危難を救はんが爲には自分生命などは顧みる暇はない。我身は如何にならうと構ふことはない。大和魂は是非貫行しなければならぬ。この意である。大和魂に對する信念の、何んとした固いことであらう。かゝる信念あつてこそ、始めて自己の理想に向つて勇往邁進することが出来るものであると感ぜられる。それから又一期の際の詩に「我今爲國死。死す不背君親。悠悠天地事。感賞在神明。」といふのがある。我體國事を憂へて奔走した爲に今殺されるのであるが、省みるに忠君の道にも孝行の道にも背いては居ないと思ふ。幕府は自分を罪するけれども、神明は感賞して下さることと信ずる。この意であらう。先生はかゝる信念の下に泰然自若として死に就かれたのである。先生は神に對する深き信念(信仰)を有して居られた爲に、最後の時にも我行は神の意に協つて居るからとて安心して泰然として居られたのである。古來偉大な人格者は何れも皆確固たる信念を有つて居られた様である。

さて此の信念といふ語は種々に用ひられるが、私は信念とは自己の思ふ所に對して、之は是非斯くあるべきものである。せひ斯く爲すべきものである。といふ確固不動の自信を有すること、即ち自己の知情意の作用に對して確信を有することであると思ふ信念と信仰とは、よく同意味に用ひることがあるが、信念は信仰よりも範圍が廣い。信仰は信念の一種で自己以外に偉大なる神佛の如きものを認めて確信し、崇拜し、歸依するのであるが、信念は思想感情意志すべてにわたり自らの正しき判斷によつて、確信を有するものであると思ふ。併し吾人の道徳的信念に基く行爲も、宗教的信念(信仰)の力が添はれば一層強固になる様である、松陰先生の如きは廣に道徳的信念の固い上に一の宗教的信仰の厚かつた御方である。それであんな偉大な事が出来たのであらうと思はれる。又信念を得るには正確なる自己の判斷を要する道徳的信念よりも宗教的信仰より入る方が容易である様に思れる。故に早く正しき信仰に入り得る人は、本務遂行の上から見ても幸福な人であると思ふ。さりながら宗教に對しては各人それ／＼の好みもあるから強ゆる譯には行かぬが、道徳的信念は誰も是非持たなくてはならぬと思ふ。これから信念信仰の固いほど偉大なる行爲も出来得るのであると思ふ。

私は如何すれば強固なる信念が得られるであらうかと苦悶したことである。否今も尙苦悶しつゝある。自分の爲すことについて、斯うしたら人が何といはうかと心配したり、或は斯うしても人が知つてくれないから駄目であると思つたが、或は此仕事は報酬が少ないからとて勉強する氣になれなかつたりする様である。これは則ち行爲に對して道徳的信念がないからである。如何したら此様な詰らない心を去つて信念が起し得られるかと色々考へて、或は人の話を聞いたたり、或は書物を読んだりして思索した結果漸く私の氣に合つた一の理窟を見付かつた。これは十年許り前のことであるが、今以て之をしんじて修養に努むる者である。拙いことではありますけれども今其の概要を抽出して見ませう。

私の信念確立の方法は、幾分信仰も混じて居る。併し見方によれば窮極は全く信仰に歸するものかも知れぬ。けれどもマア哲學的でも言つた方が宜からうと思ふ。

曰く「先づ人生觀を確立すべし」といふのである。吾人々類は何故に生れたるが、此世に於て何を爲すべきか、死

しては如何なる境涯に入るか、此等の問題についての確信を得ることである。此等の問題は窮極は經驗し實驗し得られぬ假定の上にあるから、そこは既に信仰かも知れぬ。此の人生觀確立の根本義かと思はれる。

私の人生觀はエネルギーの不滅を出発点とする。エネルギーの不滅は、物質界のみならずして實に精神界にも通じたる法則である。此の宇宙間に於ける元素の元素の其のまた元々素たる量元は力即ちエネルギーである。此のエネルギーが活動性を有し、種々の形式によつて發現して或は精神界の働となり、或は物質界の働となる。宇宙間の万物は實に此のエネルギーの發現したものであるとの説を信するのである。

エネルギーの發現する形式は、向上發展の性を有つて居る。則ち精神界及び物質界の活動はエネルギーに沈動を起して以て活動を盛ならしめる。斯くてエネルギーの活動が向上發展すれば隨つて、其の發現たる精神界物質界の諸現象も發展する筈である。此等現象が向上發展すれば同時に其のエネルギーの向上發展となる。エネルギーと現象とは決して別物でないを見るのである。

吾人の住居せる此の世界は無限大なる宇宙の一部にして實にエネルギーの發現せる現象中の最も微妙なもの一つである。そして古來幾多の變遷を経て益々向上發展し來れるのである。人類は此のエネルギー活動の現象中で最も進化したるものであつて、其の活動は宇宙のエネルギーの向上發展に最も勢力を有するものである。而して吾人は此の宇宙發展の道行の中に於ける或る一部の時期を占めて居るものであつて、此の最進化者たるの位置は從來幾多の年月間に於ける祖先の活動によりてから得たるものである。故に吾人は祖先に對して感謝の念を有すると同時に其の遺志を繼承して、此の宇宙のエネルギー發展の理法を心得、大に將來の宇宙向上に盡さねばならぬ責任であることを思ひ、力の有らん限りを盡すべきである。さすれば人吾の活動は肉體上で爲した事でも、精神上で爲した事でも、悉く此の宇宙のエネルギーに波動を生起して、其の活動發展に影響を與へるのであらう、則ち善良なる活動をすれば善良なる波動を生じてエネルギーの向上を助け、邪惡なる活動をすれば惡しき波動を起してエネルギーの發を沮害するのであるといふのである。是の如くに考へて來ると、吾人の一舉手一投足と雖も決して苟且してはならない。そののみならず單に心の中で思ふのみに止ることも、毫も邪惡なこ



こが存して居てはならない理となるのである。

是に由て之を觀れば吾人の精神上若くは肉體上で活動した事は、直ちに宇宙間のエチルギーに波動を起し、此の波動はエチルギー活動に幾分かの變化を來さしめるであらう。此の變化を受けたエチルギー活動は次の活動の素因となるべきものであるから、吾人の活動は宇宙間のエチルギー活動となつて永久に存在することが出来るのである。これ私が修養の上よりエチルギー不滅の信念の下に人生觀を確立すべし。といふ所以の最も肝要な点である。斯かる理由により、自然の勢として私は一種の靈魂不滅を信するのである。此世で偉大な事を考へ、偉大な事を實行したはと靈魂は強く大きくエチルギー波動となつて此の宇宙間に殘存活躍するわけである、楠公や松陰先生たちは、其の肉體は死滅せられたけれども、其の心靈的活動は今尙此の精神界のエチルギー活動の中で雄飛して居らるれではないか。

斯かる信念の下に人生觀を確立する時は人の毀譽褒貶に心を奪はれず、人の知ること否とに關せず。報酬の多寡に目を着けず、位置の高下に心を焦らす、唯々力の有らん限り此の宇宙上の爲に誠意活動を爲して樂むことが出来る假令軼軻不遇に陥つても決して悲觀厭世の念を起すことは無いであらう。此の如き人生觀は、社會上の待遇の割合に非薄な職業者や婦人たちには特に必要であると思ふ。婦人の家庭内に於ける活動は外面に顯はれることは少いけれども大に潜勢力を有するものであつて、これやがて表面的に見榮るのある男子の活動の根底をなすものであるから、宇宙上の爲實に尊き活動と謂ふべきである。婦人たる者宜しく自重し慰安し、大に其の本勢力を費すべきである。

上來述べ來れる人生觀に於て注意すべきは、宇宙平等主義に偏して、爲に國家を無視してはならぬといふことである。私は宇宙の發展に盡すの階段として國家が最必要のものであると思ふ。抑々吾人が宇宙の向上發展に盡さうと欲する時は、各自に全力を盡して人一倍に有力なる波動エチルギーへ起さうと努めるであらうこれを自己擴張といひたい。此の自己擴張の競争に依つて以て全体の進歩を促進することが出来る。しかし此の自己擴張も單に孤立した力では他の大きな力の爲に壓倒せられ易いから茲に大團結の必要が生ずる。而して此の團結の最も

進歩せるものは國家である。宜しく一致團結して國家的大波動を此の宇宙間に生起せしむることを努むるがよい尙此の國家の方針と盾せざる限り世界的團結の大波動は尙更宜しいことである。

我國は 皇祖皇宗國を肇め給ひしより、以來、多くの臣民が之を中心として相團結し、彌益に向上發展して此の金甌無缺の國體を作り爲せる有様は、恰も吾人の肉體が生命の存する所に集りて次第に發達し來りたるが如く實に我が 天皇は我國家の根元的活力にして國家の生命である。生命の存する所に肉體は集團し、生命の去れる所に肉體は瓦解する。吾人は宜しく之に鑑みて、我國家の生命たる 皇室の爲に力を致して我が帝國の益々隆盛ならんことを圖るべきである。國家發展の爲には自己を犠牲にすることを惜んではならぬ。これは一時的の小我を滅して以て永久的の大我理想を實現するの道である。吾人は吾が帝國をして大發展を遂げしむることに依つて以て此の宇宙の向上發展に最多く貢獻することが出来るわけである。それで宇宙向上發展に貢獻することと國家の發展に盡すこととは毫も盾することなくして能く調和し得らるゝものであることを深く信するものがある。

以上述べた様な人生觀を信じて居れば吾人の生活に意味が感じられ、思想、行動に確信が得られる様に思ふ併し私は別に哲學も、倫理學も、宗教も研究して居ません。唯々僅に天人論や其他二三の本を讀んで見て、斯んなことを考へた次第である。說中迷妄誤謬の点は多々あるであらう。然れども私は之を深く學理的に説明するの能を有しない。唯修養上の一法として一種の信する所をまとめて見ただけである。讀者諸君、願はくは御批正を賜へ。然らば豈私一人の幸のみに止らず。波動は普く宇宙間に響き、餘波は永く後世に傳はることでありませう。



## 自然に感謝いたしませう

「若し空中に塵埃がなかつたとしたら、一面暗黒の天空に皎々と赤い太陽が燃えてゐる光景は、どれだけ恐ろしく、どれだけ氣味悪いものだらう。」と物理學者はいひました。特殊の人でない限り、顧みようともしない塵埃の中に、さうした囁きをかされた時、私共は私共の生のあり難さを思はないでは居られません。

静かな夜を微笑しげにまたたいて居る星が、千年か百年に一度しか見られないとしたら、私共は其の一夜に廻り、逢はん事をひたすらに願ひ、若し逢ひ得たらんには、感謝と驚異で、夜すがら天空を仰いて立ち明す事でありませう。

たゞに星だけではありません。私共を包む總てがさうだと思ひます。木の葉も、山も河も。さうした自然の恵に浴しながら、人間の仕事の忙がしさか、私共はそれを考へて見る時がないのでせう。

恵みが廣大であればあるだけ、無邊であればあるだけ淡薄く忘れ果てて行くのが人の常でありませうか。八年十年とはふくまれた親の恵は忘れても、飢ゑたる時の一片のパンの味は忘れられないと、いつた人があります。いやさういふ人は稀でせう。けれども多くの人はさういふ空氣の中にありがちであります、かたくな、心の儘で眞實に老い、又永久に死んで行く事が、恐ろしくはありませんか、私共はもつと大きく、もつと強く私共の生を見なくてはなりません。

純なつゝしまやかな態度で私達の道、私共の環境をながめた時、そこには自然の啓示が讚美の泉として、滾々と湧き出づるものがありませう。神も佛も人も、それ等一切のものを越えて、自然の前に歸依した時、ほんごうの人生の有りがたさが、露ひ輝く事でありませう。私共は其の時、生きて行ける日のわたかまらぬ有り難さを考へる事が出来る時だと思ひます。

あの慈愛に溢れて總てを容るゝ自然、あの清澄の氣満てる總てが正しき自然、私共はどうして其の前に駭かさないで居られませう。

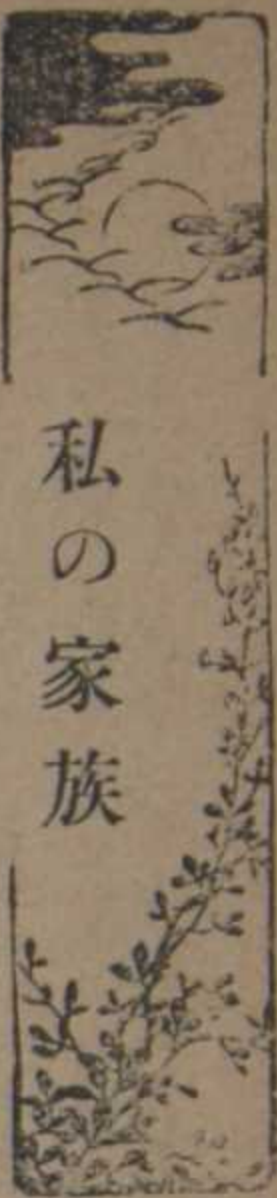
人はあまりに自分勝手な物の見方をします。「櫻は梅に色に於て優り、香に於て劣る」と、何といふ無情な比較でせう。あの人は、あの家は、私共は自分を見得ない其の眼で、自分の環境を見得ない其の眼で、もう人の心と人の働まで讀まうとするのですか、梅は梅として持つ長所を櫻の色で掩ふとするのですか。

私共は、身の憂を即つてはなりません。憂とは心の置處なものです、私共が搖籃の中で印象した宇宙のすべては、如何に美しく、如何にあり難いものでしたらう。私共はその美しさと有り難さを、同じ心で味ふ事が出来ぬ筈はありません。

富嶽の雲を凌いで立の崇高さと、秋霜の風を含んで野に置く強さと、岩かげに咲くもはにかむ百合のしとやかさとは女の生命です。つゝしまやかにあるべき女が男の規矩を越えたり、強くあるべき女が推勢に膝を枉げたり、そこに生の意義がありませうか。

女は——女だけに——もつと純に生きなくてはなりません。幸福なる生活は、黄金の香や、財の陰には潜みません。大自然の前に、我尊き雲の共鳴を得た時、さうです、ここに永久の幸福が展開されるのです。眞の人生が味ひ得られるのです。自然の有り難さが感謝されるのです。(大正一一、九、二五、柳原生)





### 私の家族

本一 原 ティ子

私の家族は皆で九人でございます。毎日毎日平和に愉快に暮して居ます。

お父様は美禰郡役所に出られ、御歳は四十五ですが目がくぼんで顔が細長くございますので、もう五十ぐらゐに見えます。お顔の様子と言ひ脊の高い事と言ひ一寸見ると恐しい様に見えますが、「人は見かけによらない。」とある様におやさしうございませう。郡役所から御歸りになつてお姿が玄間に見ると、一番末の弟が飛出て御迎へ致しますと、にこにこして坊の頭を大きな手で撫でておやりになります。とほんどうに御やさしうございませう。

お母様は色の白い顔の丸いほんどうにきれいです。いつも笑を含んで、ちつともこはい顔をなさつた事がありません。私共が何か悪い事をする時、涼しい目を見張つてやさしく御さとし下さいます。おひまの時はお花をいけたり、お茶を立てたりなさいませう。子供が多いが其の世話をよくなさるし、ほんどうに自分なから感心して居

ります。妹はお母様に生うつしでございませう。顔の白い事、丸い事、

### 寄宿舎の一夕

本一 石田 久子

お、静かなことよ、自習の鐘が疾うの鳴つたのだ、廣くして廣くして賑かな寄宿舎は何時になくシーンとしてしまつて、物音一つしないどうしたのか、私は眠氣を催したので、つい窓際に寄つた。すると清い清いまん丸の月は漸く上り始めた。中庭の木は葉はしつとりと露に濡れてゐる。螢が一匹淡い光を残して葉蔭にかくれた。「あら」と一と聲呼んだ。その聲が急に皆さんの眼を丸くした。何處か知らんが遠くの方から蛙の聲が風のたよりでしきりとする。此の時私は故郷の谷川の流になく、河鹿のこゝを思ひ出した。鈴の音をも欺く程の愛らしい聲です盛になつてゐるのであらう。あゝ、私は何んだか淋しくてたまらなくなつた。秋雨の注ぐ頃、木枯の咲く頃の寄宿舎は、嗚淋しいであらうと、一人涙ぐんで来た。月は一入冴えて、お部屋の中を覗き込んだ。

福岡大學病院へ入院中の友人にかくる文

本一 山本 照

只今御手紙有難くうれしう拜見致しました。御病氣も薄らぎましたさうで、御目出度うございます。薄らいだごかつしやる御言葉をきくまで、私はどんなにか心配致しましたわ。薄らいだといふ御言葉をきいて、魔法婆の手から逃げだしたかのやうにうれしうございましたの。又光線で見てもなれば大丈夫ですわ。今に退院なさいませうよ。名醫揃の病院ですもの、何も氣にかけず夜は退院なすつた時の夢でもごらん遊ばして、うんどおよろこびなさいませ。私もその夢の人になつてお會ひしませう。六月三十日の夜にね。夢の世界であひませう。私樂しみにして其日を待ちますわ。濱千鳥は淡路島がこいしひつて、照はツル子様がなつかしうございませうわ。さ様なら

### 青葉と私

本二 齋藤 春子

心からもとめる時の皐月よ、うれしい五月よ、四方の山々は青々として心の底迄生々させてくれる此の青葉、私はなんと云つて感謝の言葉を捧げませう。一年の間待ちこがれた此の五月、今私は高い女學校の二階の窓にも

たれかゝつて沈黙して居ます。いゝる清いあの緑の青葉が私に沈黙を與へるのですもの。

あゝ去年の五月は、丁度梅雨の初頃、私は私の机にもたれて、あの懐かしい菊野様の御手紙を、笑をた、へて読み続けました。過ぎ去つた頃を思ひ起して。一昨年の若葉の五月は家中揃つて楽しく誕生日をお祝ひしましたあの懐かしい懐かしいお母様と、其のお母様は今果敢ない御身の上でございませうすけれども、

不圖先生のせき聲に、我に歸つた私は、向ふの山に目を注ぎました。まあなんてあの歌の綺麗に見る事ですわ、目下に見る阿武川の川水迄、お山／＼の清い息を吸つてる様に、静かにゆるやかに／＼に流れて居ます。私の心もあの川の水の様に、静かに／＼時と共に移つて居ます。あゝ何時迄もこんな嬉しいこんな美しい若葉の頃が居てくれたなら！けれども時は待ちませせん。刻一刻若葉は大きくなつて行きませう。私の心もせはしくなります。

### 五月の窓より

本科第二學年 内田 恭子

萬葉を飾つた櫻花の時は夢の間に過ぎて、今は嫩緑の色が物靜かに胸に沁むやうになつた。窓にもたれて此の

美しいあたりの景色を眺めた。草木は春の女神の恵にふれてすく／＼と伸びて行くやうだ。毛氈を敷きつめたやうな緑の草叢、何んともなく心を爽やかにさせるやうな銀杏の若葉、沈黙を思はせるやうなこんもりとした樟の芽何處からともなく香ふ夏蜜柑の花の香、何一つとして私の心をそゝのかさぬものはない。

満開の花よりも一層淡緑の葉陰が好ましい、此れを眺めて居ると何だか口然に緑の御殿にでも行かれはすまいか緑葉の中に吸ひ込まれはしないだらかと、あやしう胸さわぎがする、げに瑞々しい社殿に映ゆる杜の若葉の色の美しさは、樹間もるゝ朱の鳥居に一際目立つて鎮守の森を引き立たせて居る。

### 稲

本二 松尾 豊子

(人) もう秋の虫が鳴き初めて参りました子。

(稻) そうです。私も秋と云ふものをやつと知りました私の老いたこの姿を見ますと子。

(人) はー！。どうして今まで御自分の老いたのを知りませんでしたの？

(稻) おゝ。それですか。私もよくわかりませんが今年は早く年を取りましたやうですよ。いつもの年よりか、

二倍も。三倍も、難儀をしましたからね。私の好きなお

水は、あたへられないし、やつと貰つた少しのお水は、一寸も私の所へ来ないで皆土のしめりになつてしまつて

それ直にあのち日様に吸ひ取られてしまひました子。然し貴女方は、お日様をうらまないと云ふ事が大切ですよ。私達も難儀はしましたものゝ、やつぱしお日様の公

平である、慈悲深いその恵みによつて、やつとこんな美しい黄金色の美しい色を 貴女方にお見せする事が出来たのですから子。でも人間の世界に私達は悲しい怖しい、

ピンをおあたへしなくてはならない身体ですわね。私達ももう少し意久地があり。そして水を神様がおあたへになりましたら。あの貧民窟に居る人達も労働に草臥

れて。夕に歸つて、淋しい膳に向つて、粗食にあまんじて居る人達も、そしてあの金をも鎔かさうとするやうな

夏の日田の中に入つて、草を取つては私達を育くんで下さる百姓の方々誰も皆幸福でせうに私はどうしてこの

苦しみを離るゝ事が出来ませう。私達が居らなくなつたら、まだ／＼人間は食を得る爲どんな惨酷な行を 強ひられる事ませうか、おゝ怖い！(人) おゝさうです。私も食に飢ゑた時は、貴女方を得る爲に、どんな勞苦にも堪えて働く事ませう、貴女方は所謂人間の神です、その

る。それはこれと云つて取り上げて云ふ程の好い處はちつともない、只殺風景にムツと立つて居るものだから自然皆からも忘れられた形だつた。すると今年になつて其の根本に誰も知らない、内にこつそり花が咲いた。なでしこの花！而もたつた一本………淋しくはないかしら。私はツツと話しかけた。

「可愛い、なでしこ！お前は寂しくはないの。たつた一人であたしはね、お前が大好きなんだよ。何故か知らない、何故か知らないけれど、只何とはなしに好きでならないのだよ。だがそう云ふ様に好きなのはお前ばかり

日向で、我物顔に枝葉を張り廻して居るのは、多分お前の姉妹なんだらうが、おれを見て居ると憎らしい様な氣持になつて来るの。それよりか木の蔭でお前見た様に淋し

う、そして涙ぐみ乍ら咲いて居る花が好きなんだよ。お前の顔は綺麗だ、だがはでやかな美しさぢやない。底深く澄んだ潤ひある可憐さだ、ねお前はさつとこの塵げられ

た生に満足してるのだらう。何故ならお前の顔に惱みの影や悔いの跡がない、お前は現在に満足し居るんだね、それでいゝ、それでいゝ、たつた一人でも満足して生きて行けるなら、それに越した幸福はない。ねなでしこ！

お前は幸福なんだよ、やがてお前がお前の根本に眠る時

### 私の好きな秋の花

本三 大田貞子

神様が又社會に悲しい事實を報告致しますねえ、貴女方を仲に置いて、百姓はもう地主側と争を初めようとして居ます、貴女方と云ふものゝ收穫の分らないすつと前か

ら、地主は小作人に貴女方を渡さない主張するし、小作人は地主側にはやる必要はないと云ひ合つて居ます。はんに結核はどんな事ませうね。かく虐げられて居ら

しても、いつも謙遜に、柔順に稻穂を垂れてゐらつしやる貴女方に對して、感謝致さなければなりません。おゝ

そして今貴女の貴いお口からもれた御慈悲深いお言葉に對しまして、はんに感謝致さなければなりません。

(稻) ふつゝかな身がそれ程までに貴女方をお喜ばせる事が出来ることは、私達のはんに嬉しう御座います。その御言葉を聞きましては、もつと／＼働いて人間の社

界に平和な時をおあたへ致したいのです。私は靜に神様にお祈り致しませう。貴女方の爲に。

(人) 有難ふ御座ひいす、私は社會のものゝ代表として今涙を以つて感謝致しますせう。

幾年前から置いたものか？ふ庭に大きな櫛の古木があ

が来やうともお前はそれで幸福なんだよ。」  
涼しく清い風が、顯れたものにも隠れたものにも、そ  
うして虐げられたものにも、總べて公平に吹いて來ると  
なでしてはほろ／＼と涙を地にまろがした。

### 尾花

本三 香川トヨ

あの水々しい青葉の鮮かな日は逝つて、草葉がくれに  
思いを吐く物淋しい秋が訪れました葛の葉裏を返してし  
のびやかに秋風の訪ふ野の葉には晝も虫の音が聞えます  
紺碧の空は高く澄んで白い雲のみが一つゆつたりと南  
さして流れて行く。秋が來たのです。憂ある人の涙を誘  
ふ時は來たのです。

短き宿命にすたく野面の虫は如何なる草をか己が巢に  
選ぶでせうか。

夏の晴々しい美しい花にひきかへて秋の花の囁きの淋  
しさ。露にそぼちながらすみ渡る御月様に守られた露多  
き夕べの野に立ちました時私の視線はいつれの花に走り  
ませうや。

噫！尾花……………尾花です。

あの淋しい野原を一人淋しうゆらぐ尾花です。

秋のしらべを語る虫は此の花に宿かりてゐます、  
久遠のちかひの様に……………僅に、淡く、  
尾花に囁いて居ります。

すみきつた御月様はます／＼牙へ渡つて葉末に輝く露  
の一つ／＼にも小さな影を投げて居ります

まはりの秋草よりも一入高く可弱い少女の様に青白い  
手をして彼は何處の友を呼ぶのでせう。

なびきつゝ野邊のすゝきのやさしさに

唯わけもなく涙ぐまれつ

月より受けし恵みの露に、彼はいつしか頭をうなだれ  
て便りない秋風にまかせて右へ左へゆらり／＼とゆらぐ  
袖の白さ、そこに本當の秋が宿るのでせう。

### コスモス

本三 元山初子

コスモス！名からして何だか氣高いやうなほんこによ  
い花である、あの小さな細つそりした葉、なよ／＼と高  
い其の丈、紅白とり／＼に咲く花、私はあの花を見る度  
に微笑が浮んで來る、何んていゝ花なんだらう、花園に  
植ゑて秋たつころから一つ二つと咲き出るのが待ち遠い  
ゝ、皆咲き揃へばあたり一面花の香に包まれて何んとも  
云ふに云はれなひ良い氣持である茫然として見入るやう

だ。其時秋風のためにひら／＼と花瓣の散る様、私は拾  
つてしかとふところに入れて納めてをきたいやうだ。又  
風に散る時、其の中に立つて思ふ存分花の香を吸つたら  
ぞんなにいゝ氣持だらう。

コスモスはほんとに大好きな花である。

### つゆ草

本三 岩武 千壽子

淋しい日、私は唯一人を祈つた。そうして、あてもな  
く野原を彷徨つた。ふと、足もとに氣附いた私は瞳を地  
上に投げつけた。おゝ！その時、其處にはあいつゆ草が  
!! 青い色をした露草が。香ひもなひ、そうして儂なげ  
に首をたげてゐた。摘み採るにはあまりに可哀さうな花  
その儘おきたい。山峽の野の隅に人に知られずに朽ちゆ  
く。その儘にいつまでもおきたい。机上に飾るにはあまり  
にいぢらしい。多くの花が一時に美を誇る時、彩も香も  
よそに、開いたやさしい誇らぬ花よ。

はこらぬ心、日本の女性にも似たる露草。花にして香  
ひのないつゆ草は、花としての價値を認められなくとも  
誇らぬ心、そのものは永久に稱へてやりたい。



### やさしき心

本三 齋藤 元子

晴れ渡つた初夏の空には一點の雲もなく若葉にゆらぐ  
風は何を囁いて居るのだらう。

夏が來た

夏が來た

こぼれかゝる

太陽をあびて。

恵の小鳥も飛で來た

日光と青葉を

我物として。

楽しい初夏の風の囁に包まれたる晝休のグラウンドは眩  
い日光が直射して居る。

A様一寸……………

ゑゝなにですの

あのねY様のあの事知つていらしゃいますか。

あのこつて……………此間のクラス會の時のことですよ  
いゝゑそんなことぢやないわはら全國女學生文壇に  
當選なされたことなのです。

あら！ 當選なすつた？

まあ 貴女まだあれを讀まれないの、長詩で一等を

取つていらつしやるですよ。

まあさう？ Y様か——

え、貴女まだ知らないのね私も今朝圖書室で讀んだばかりだけれど。

私ちつとも知らなかつたのですよ。

いや……………だこそそんなに大きな眼をしなくつたつて。

でも Y様は御目出度はね

教室の窓から淡い初夏の風がたへす水々しい新緑の間をぬつてゐる、今盛りと青く繁るクローバーの上に Yさんは三人の友人と一心に讀書にふけて居られた。

Y様匿名なの。それとも雅号ですよ

Y様小萩の露なのよ

Y様があの小萩の露まあ人つて解らないわ Y様ね毎月そしたら投書していらしやるのね小萩の露……………本當なの。

私はうそなんか申しません。たしかですよ。先刻ね K様がお聞になつたら Y様黙つて赤い顔をしていらしたの。

まあちつとも知らないわ Y様おどかしい方だからね 私嬉しいわ……………クラスからあんなるらい方が出

茄子の葉は青白く照つて、其の一枚々々にはしつとり露が置かれて光つてゐる。畑の中に唯一本植ゑられた柿は、少しの葉と二つ三つの實が仄明るく見ゆるばかりで他は暗い蜜柑畑に吸ひ込まれて、黒い異様な葉が墨繪の様にチロケ々々してゐる。

私は煌々たる月光を浴びながら静に歩んだ。黒い自分の影がゆら／＼揺れるやうに動く、とリーン／＼白金の鈴を振る様な鈴蟲の聲が、向ふのこんもりと茂つたゆすらの中から聞え始めた。すきこはつた少し響のある聲が—— あゝ。今夜は何て美しい夜だらう。そうして愁しい夜だらう。

高く聳ゑた木々をザワめかしながら、秋風が通り過ぎた。もう秋は来た。讀書の好時機!! 燈火親しむべしの候!! 私は咳きながら晴々とした、が併し緊張した心で葉をして置いた所を聞いて讀み始めた。鈴蟲の音は未だ止まない

## 雪の朝

本四 池上キク

チンチンチン……………柱時計の音に楽しい夢から覺めた直に床を離れて見れば、今日は何時もより寒いやうだ。と思つて居ると何處かで妹が雪た／＼と叫ぶ。おや、と思

られば——ねーあなたも同じでせう。

ぢあさうね Y様にお目にかゝつて來ませうか?

およしなさい……………あんな温和しい方だから反つて悪いわ。

それもさうね……………だけだか私嬉しくて、心強く思ふ。そう私もうれしいわ。だから貴女に教えて上げたのですよ。

まもなく午後授業の初まる鐘は鳴つた今までさわがしかつたクララも、なまぬるい風が南から北へと流れて太陽の出す光はあらゆる物のにキラキラと輝いた。

## 秋の夜

本四 田總ユキ

眠い目をこすりながら机に向つてゐた私は、また居眠りを始めた。これではいけない。私は思ひ切つて立ち上つた。庭下駄をはいて出ると、袂がすつとふくらんで、心地よい風が面を撫でた。其處此處の叢からは哀調を帯びた蟲の音が、邊りの寂寞を揺がして響いて來る。今までの眠氣は全く拭ひ取られて、頭腦は恰も秋の空のその如くに清く明晰になつた今しも、月は隣の高い校欄の木の上にかゝつて、白雲の一片が夜の大空に浮んでゐる星の瞬が重なり重なつた夏蜜柑の間からキラ／＼漏れる

つて椽側に出て見れば、嗚呼何時の間に降り積つたのだらう。屋根の上や庭の石などは、白砂を敷いたやうで大へん美しい。空からは白い雪がまだ頻りにすど／＼と降つて居る。時々烈しい沖の嵐がやつて來ると、其の度に廣い宇宙は雪の塵が紛々として飛び狂ふ。其の面白さは何とも喩方ない。見る／＼中に下界は唯一面の銀世界となつた。昨夜迄葉の一つもなかつた枯木の梢に、今朝は白色の香りない花を咲かせ、夕迄綠色であつた橙の樹は、今朝は白い木と變り、橙の實は白い枝の蔭から、時々チロ／＼と黄色な顔見せる。

裏に廻つて見れば、道路には最早可愛らしい小犬の足跡がついてゐる。又下駄や靴や自轉車などの跡が、どり／＼にばかり／＼と深くついて、色々な模様を織り出したやうで大へん面白い。

雪は霏々紛々として砂煙を卷くやうな中を、諸學校の生徒はマントや、頸巻に顔を埋め、喜び勇んで急ぐ。遠山は雪の上に雪を積んで、まるで永山でも出來たやうだ暫く見おれて居ると、商人らしい人が二人連れて「お、寒い、今日を喜ぶものは學校の生徒と犬だけだチー。」なんて言ひながと通つた

ほんとうに雪の景色は何に喩たらよひであらうか、殊

チンチンチン……………

柱時計の音に楽しい夢から覺めた直に床を離れて見れば、今日は何時もより寒いやうだ。と思つて居ると何處かで妹が雪た／＼と叫ぶ。おや、と思

今朝の其の美観は、私にはとてもいひ表すことは出来なひ。早く階上の教室の窓より雪の萩町を眺めよう、又皆さんと一所に雪投げもしようと思望に満ちて登校した。「あゝ雪、世界を清く變じてくれた雪、何時迄も消えないでくれよ。」かう獨語をいつた。

### 葡萄棚の下にて

本四 井上 ミッコ

コバルト色に澄み渡つた高い空に、力強く燃えてゐる初秋の陽が、青葉の隙間を通つて黒い土の上へ、かはり強い影を落して居る。

濃い緑の葉が重なり合つて居る繁みの裏には、つややかな葡萄が随分たくさんにぶら下つて居る。私は其の下まで叔母様と共に歩んだ、そして今更の様にその美事なのに驚かされた。午後の機に眩ゆく私の瞳を刺戟されながら、みづみづしい房を仰いで見た。

「この房を御覽なさい仰山なつとるでせう。」

叔母様はかう言ひながら其の白い手をのばせて、取り分け大きい一房二房をもぎ取られた。淡緑に熟した實が其の度にゆらくとして、三つ四つ五つころりと土の上

へ落ちて轉んだ。

「食べて御覽なさいおいしんですよ。」と私に下さる葡萄を持つた手と、親しみ深い顔半面に、さゝやかな葉漏れの光線がわたる。

「ほんとうに美しい。」

私は其の一つを房からちぎり取つた。

ふと側の葉蔭に蟋蟀が啼いた。高い空にはやはらかい雲のかたまりが一つ浮いたまゝ一寸も動かない。

### 月の沈むまで

本四 村橋 元子

サヤ／＼と庭の木立を通じて、涼しい風が吹いて來ました。月は青白う射して、一輪ざしの紫陽花が白う浮き室にあるすべての物を涼しげに見せました。

「お母様電燈をつけませうか。」昌子は淋しさに堪られない様になりました。

「今暫くこのまゝにしておいておくれ。月の光の方がいゝから。」

開け放した様から流れ込む月は、長い間病みつかれた母の枕元を青く照らしています。白いシーツの上に亂れ

た髪がこぼれました。

「お母様、ほんごにいゝ月夜で御座いますわね。」昌子はひそかに母の顔色を伺ひながらかう申しました。けれども母はうなづかうともしませんでした。そして獨語の様に

「あゝお父様は如何していらつしやるかしら。」

あふむむけになつて天井を凝視してゐた母の瞳には、小さい露の玉さへ宿つてゐました。昌子はわづかの間でも母に悲しい今の境遇を思はせまいと、随分苦勞いたしました。

噫、去年の財界變動で、事業に失敗した父は、妻子を殘して、いづこにか出奔しました。母は日夜それを思ひつづけ、遂に病床に呻吟する様になりました。母の爲、人知れず泣きくらした昌子……

けれども母の心は、かうした娘の心づかひを汲みとる事が出来ない程、悲しみにうるへてゐました。

「ねる昌子。目の下のはぐろは泣きはぐろどかいつて早く人に別れるさか、いろ／＼事情で一生を泣き暮すんだつて、ほんごうかね。」

「お母様、そんな事決してありませんわ。迷信ですよ政代さんだつて、目の下に大きいのがある。けれどもあ

んなに幸福ではありませんか。」

「さういへばさうだね。鎌倉の伯母様だつてあるけれどもんなに不幸でもないから……やつぱり氣のせいかも知れない……」

眼の下にある小さなほぐろを氣にして、遂にはそれにかこつけて身の不幸を歎く母を慰めるには、あまりに昌子は悲しみ多すぎた。

「お母様。少しお眠り、月もおき沈みませうもの。」

「あゝお前もお寝みなさいね。」さういつた母の聲をきながら昌子は様に出ました。月は早や、西の家の影にかくれて、様にも、庭にも、光は見えませんでした。母の爲にわづかばかり作つた花壇のアサギや、クラサオラスも、真黒い夜の色に包まれて、花の形もはつきりとわかりませんでした。母はいつの間にかスヤ／＼と寢息をたて、居りました。落ち窪んだ目も、色の褪せた唇もただならぬ衰弱を物語つてゐます。

「長くて九月いつばいでせう。」と云はれた醫者……

噫その事を思ふと、やり場のない悲しみにおそはれて知らず々々涙が冷たい頬を傳はるのでした。昌子は靜かに眼を閉じてうつふしてしまひました。

噫夜も更けた。彼の女の父様はいづこに。

## 趣味

本四 井上ミワコ

「趣味を持つ。」私は此のことを大變よい事であると思ひます。固より人間が萬能ではない以上、色々な事に對して才能は恵まれてゐません。そして世の中のすべてが分業的に出來てゐるので、何も萬事につけて、専門的の技術を養ふ必要はないと考へられます。併し此處に自分に與へられたる職業にさへ、趣味を持つことが出來ないで、唯機械的に生活の奴隷となる人があつたとしても、唯機械的に生活の奴隷となる人でありませう。人生と言ふものに何の意義もみとめ得ず、不満にみだされて働くのでしたら、此の世の中はほんどうにつまらなしいものになつてしまひます、もしそうした人がありましたら、其の人々の活くべき境地はあまりに狭く、あまりに不幸であると言はなければなりません。其の鬱憤は酒の香と變ることが多いでありませう。それで實に其の仕事に忠實であるばかりでなく、更に其の道に趣味と言ふ光明をあたへたいと思ふのであります。又此處に前と反對に或る人は政治にも軍事にも教育にも實業にも藝術にも運動にも、其の他ありとあらゆる見るもの聞くもの爲

らしむる様に、いろ／＼のものに趣味を持ち、純にのぼして行きたいと思ひます。趣味を持つことによつて、悦樂と慰安とはあたへられるのであります。あゝ私達は貧しく暮したくはありません。思想の低い、趣味のない、貧しい生活を棄て、平和に愉快を送りたうございます。幸福にかゝやく趣味によつて、より一層美しくはなるでありませうものを。

## 思出多き二月九日

本四 椋木 百合子

空は潤んで淋しうに輝いてゐた。立春から五日目にふと忘れた様に風も雨も止んで、町の人が初めて、はつとするやうな、ボカ／＼とした日和であつた。蜻蛉國の同胞、殊に長門、其の中でも萩地の人のとりわけ忘れてはならぬ國家の柱石、山縣公の國葬當日であつた町の中が憂の氣分に鎖されて、笑聲や高聲一つだに洩れる家もなく、誠に静かなしんみりとした朝の街道を禮装に身を包みながら、一歩一歩家を遠ざかつた。とある十字街道で、お友達に會ひ、追いつて登校の途についた。白襟紋附に折目正しき袴を纏ひし所の禮装には、嚴として犯す

すものに、趣味を持つてゐるものと考へて御覽なさい。其の人の生活と言ふものは、どんなにか豊富で面白いこととせう、たつた一枚の新聞を見るにも、どんなにか興味多く感じませうし、有効に讀む事が出来るでありませう、趣味を有し愉快に日々を過す人には、さゝやかな闇が來ましても、直に一變するだけの力がわいて來るでありませう、いろ／＼それ程たくさんもの趣味を持ち得なくとも、自分の務に趣味を持つ以外に、尙文學の一端、和歌だけにでも趣味をのばせ得て行く事が出來たら、精神的方面は自由であります、若き悲しみ又は人生幾多の煩悶も、たつた三十一文字の中に、無限の友を見出し得て、一人慰められるのであります、優にやさしい女性のあわれをよせた道の邊の名もなき小草、又は秋の夜にすだく虫の音などの歌は、聞く人々に言ひ知れぬ感情をおさせ、貴い人格をしのばしむるものと考へられます、かうして自分に授つた職業に趣味を持つのは勿論、自分を樂しませるもの、一つであります、尙いろ／＼なことに趣味を持つことは、人生と言ふ一つの曲線を複雑にし、美しくするものであります、私は此の許されたる心の自由を感謝すると共に、出來る丈自分の一生を意義ある様に、貴からしむる様に、この人生と言ふ鎖を美しか

べからざる威厳がある。春はすでに川邊の梅を訪れ、過ぎ行く者に幽香を送つてゐる。麥は作日の雨に濡れていよ／＼青く、遠くの山は紫にこめられ朝日かけ長閑である。

いつしかもう學校の門前に來てゐた。隅々まで響き渡る鐘に控所にならび、黙想も静けさの内に過した。後講堂に參集した、校長先生より公の生前に於ける勳功についてお話があつた。公は位人臣の榮を極められた方である。公は名家の人ではなく、淋しい川島の地に、産聲を上げられ、二十歳の若盛りより奇兵隊に身を投せられ其の時には今の參謀の如き任を以て、山口に本陣を設けて參加された。その舊跡に接すれば今尙昔が忍ばれる。後勅命を帯びて獨佛を觀察に行かれ、廢藩置縣自治制の事などあらゆる事に心を盡された。日清戦争には司令長官として、朝鮮より上陸されたが、不幸にして病床に臥せられた。天皇はいたく御心配遊ばして、歸國せよとお言葉が下つたがしたがはれず、私利を捨て、君命の重きを思はれた爲に、病氣は日一日と募り、遂に擔架にて艦上につれ歸り、海上にて保養されることゝなつた。かくまで公は國の爲には身を犠牲にしてまで盡すといふ堅き御心を持つて居られた。實に寶石の如き美しいお心で



ある。

内閣を組織され七年の久しきに渡りてその職務を全うされ、樞密院議長となられ、これより後は家にありて國家の大事にたづさはられ、身心を勞せられしこと口を以て盡し難し。斯の如き元勳も古稀庵に於て八十五歳を一期として不歸の旅人となられた。攝政の宮も亡骸の安置してある所に御目ら行啓になり、玉串を御手づから捧げられ、哀悼の意を述べられた。又公は武を以て一生を終はられたばかりでなく、文はまた非常に長けて居られ、文武両道を兼備されしは、實に公でありませう。國事にあづかりて大いに力がある。」と申された。後しばし休息して、一同公の生誕地に向つた。長蛇の如き我等一隊は八丁通りを東に向つて進んだ。ほどなく目的地に達した道幅狭き公の銅像の前は學生を以て埋められた。銅像の前には七五三の繩が張られてゐた。しばらくして銅像の前に立ちし時、一種言ふべからざる感にうたれ、自然頭の前に垂れるをおぼえた。

堤づたひに歸る。阿武川が暖い日に照されながら注意しなくては、見られぬや様な水蒸氣がほのかに立ちのぼつてゐる。橋の袂で一同解散し、親しき友どうちくつろいで歸途についた。小川の水面にかぶさるやうに斜に生

彼女は十四の春、町の小學校を優等で卒業したのであつた。そして女學校にも續いて優等の成績で入學した。彼女の家は華やかな街を一町ばかり隔つた郊外にあつた。かなり豊かな資産家の一子として、両親の間に何不足なく、ありたけの愛をそゝがれてゐた。彼女はすべての人から愛されてゐた。彼女の美しさこそすなはな若々しい心は人々の愛を求めに充分であつた。けれども彼女が二年生から三年生に進級して、青葉蔭の涼しい頃、彼女の母はふとしたことから、床につかねばならぬ様になつた、母思ひの彼女は夜も寢ずに看病した。しかし母の病は重かつた。彼女の全身の心づくしや、醫藥の甲斐もなく醫師も匙を投げてしまつた。暑い／＼夏の日もいつしか過ぎてしまつて野末にすなく蟲の聲の哀れさも一入身に沁む頃、母の容態は日に増し險惡にをもむいた。それは吹く風も身にしむ静かな夜であつた、母は若い世話盛りを一期に彼女の手を堅く／＼握つたまゝ、永遠の眠りについた。嗚呼あの愛の瞳の持主の母は静かに／＼黄泉の國に旅立つたのであつた。

彼女は最愛の母を失ひ、一日としても母の顔を忘れることが出来なかつた。そしてとつと自分の部屋に一日中入つて亡き母の寫眞をひとつと抱擁しては泣くこともあつ

へた柳の芽は大分膨んだ、頭の上に往來してゐた雲が今それらの雲の魂から小さく薄つべらな小雲がしきりにちぎれてふつ／＼一足毎に逃げ去るやうに親雲からはなれて行く、小雲は心地よげにばうと擴つたりゆるやかに渦をまいたりして青空の中に入る。「碎けて遠く青に入る」といふいつか講讀で習つた句を思ひ出した。眞晝の太陽を背に沿びながら家に歸つた、慎み深く静かに靜かに半日を過した。公の亡骸は護國寺の墓地にやすらかに眠らるゝとも名は末代に於て輝を上げ人口に膾炙され、將來に於て少年達の美望の的となるであらう。

嗚呼記念すべき日よ

## 悲しい運命に生きる女

本四 石川 ッル

彼女の姿は時々町外れの極めて小さな工場に見えた。彼女は去年の春から工女として、その工場に勤めなければならなかつた。けれどもそれはうまれつき病身の彼女にはあまりにつらい仕事であつた彼女がやせ細つた手に小さな風呂敷包を持つて、とぼ／＼と暗くなつた工場門を出る彼女、二年前の彼女、私は今更運命の怖しさに身ふるいしなしいではゐられなかつた。

た。そうした家にはまた怖しい悪魔の影が襲つて来た彼女の父は此の頃から相場に手を出して、急に祖先代々からの家財を殆ど賣つてしまふまで失敗してしまつた。庭の美しい萩の花が秋の色を粧つて、肌を吹く風も冷やかにこぼれ散る露も何となく哀れをさそふ頃、少しばかりの家財を持つて現在の淋しい狭い家に移つた。同時に彼女の第一の希望ある女學校生活を抛たなければならなかつた。彼女にはY子といふ親友があつた。彼女が小學校の時代から楽しいことは語り合ひ、悲しいことは嘆き合つて來たのであつた。女學校でも同級だつた二人、スカートの色も鮮やかに靴の音も軽く通學するのであつた。しかしこの様にしたY子も彼女の家の家財のかたむくと共に、彼女から遠ざかるやうになつて新しい友を選んだ。N濱で「信じて下さい」「ゑ、きつと信じます」と誓ひ合つた友は、新しく得た友と楽しさうに校庭の中で、午後のうららかな日さしをうけながら話合つてゐるのを見る時、彼女の心はやるせない悲しさを抱きながら獨々クロイバの上で涙するのであつた。彼女は思つた。

今までの人々の内で自分を眞に愛し、自分を眞に理解するものはやつぱり「分だけであつた。人々が互に眞の愛をそゝぎ合つて、よりよい生活に入つたならば、人々は

どんなに幸福が得らるであらう？けれども、自分はやつぱり一人である。孤獨である。ひとりぼつちで、この廣い世界に生を求めてゐるのだ。

彼女は學生生活から俄に世の風波の中に飛び込んだのであつた。彼女の父は失敗を回復するために、凡ての手段をめぐらして成功の道を求めやうとした。しかし彼の一企一畫はたゞ借金を生むばかりであつた。父はやけになつて鬱を酒によつて晴さうとした、此の様にして、彼女の家は日一日と暗い生活の中に、進んで行くのであつた。父は遂に見も知らない女を連れて歸つた、そして彼女に母と呼べと云つた。二度目の母が來てからはいよ々々生活の困難を感じた。遂に父母は相談の上彼女を小さな工場に通はせることにした。親思ひの彼女は父の前で確と否定することは出来ないで出勤することにした。

彼女は毎朝朝飯の仕度をして、自分は一人食べないで出勤した。午後五時の汽笛がなると、彼女は會社を辭して、貧しい哀れな家に歸るのであつた。歸るとまた他所からの洗濯物を引受けて働いた。母は少しのことにも彼女をひどく叱り虐待するのであつた。その間彼女の父は自分の毎日よい職業口はないかと探し歩いたが、夜になると失望して歸るのであつた。そして酒をやけに飲み彼

女が汗を流していただいたお金も全部酒のために費されるのであつた。彼女と義母との間には絶えず冷い溝があつた。彼女が朝早くから毎日亡き母の墓にお参りするのが何よりの義母の氣障りらしかつた。母は何かにつけ口積く叱り散らした。そして彼女の可憐な心を片づ端から踏みにつけて行つた。少女としての楽しい希望も、みんな裏切られてしまふのであつたかの女の心は暗い谷底に葬られて少女の誇りとするプライドも遠くに去つてしまつたしかしかの女は一生懸命になつて深い谷底から一道の光明を見出さうとつとめた。



一實 有吉榮子

今日までわがしかりし蟬の聲はいつしかやんで心持よき秋が來ました。日々に虫の音は増して秋の團の夜半はことさら淋しさをおほえます。昔より月は詩や歌につく

たこそ。朝夕學校に通ふ汽車の窓より眺めると秋の紅葉の美しき事或時歌の會で

立川の秋の紅葉する頃は 龍田にまざる眺めなりけり

と、詠また歌が一等であつた事を思ひ出す。川邊の屏風の岩のつた葉の、毎日一葉二葉錦を織る様にてりはゑて行く面白さも目の前にうかみ出る。裏の山で茸狩をして其の時寫した寫眞を取出して見る。裁地では望んでも出來ない事である。嗚呼なつかしい。小學では先生やお友達とむにむつことをしたりテニスをしたり楽しく學んだ事何時までもわすれる事が出來ない。先生の上に共に學んだ友達の上に住友鑛業所の上に幸あれ。新居濱の益々發展する様に。なつかしき四國の思出はそれからそれへくりひろげられる。

### 母校の思ひ出

實科一年 藤山松枝

私は電燈の下でなれた机の抽斗の整頓をした。抽斗の中からは色々な物が出た、書方、圖書の成績、友人からの葉書、雜記帳、それから高等二年の時の夏休みの日記も出た私はこれ等を前にして、八年間學んだ母校をそれか

られてゐますが、秋の空は天高く月はよほと綺麗でございます。山の栗は追々はじけて飛び、柿の實も追々赤くなり、野には千草八千草咲き亂れ、秋の七草も又宜敷でございます。千町田には黄金の波が穏やかです、私共にとつて楽しい運動會なども追々來るのであります。これからが郊外散歩の好時節であります。私共にとつて大切な勉強も秋にまざる時はなく、秋夜讀書はことふさはしいものでございます。

### なつかしき四國の思出

實科一年 池内登美子

なつかしい澤山の人に送られて、四國を後にして故郷に歸つた事は、私はどんなに悲しかつたかわからない。私の生地は神戸であるが父が長らく縣廳に勤めて居られたのが四國の住友鑛業所にかわられたので家内一同四國にうつた。其の時兄弟は姉と私であつた。長らく四國に居た。第二人も彼地で生れて住友小學校で御世話になつた。皆なつかしい親友達の事を語り合ひ、手紙の來る度出す度に飛んで行きたい思ひをする。夏の水泳をする毎に、立川の家の前の清き流れに幾人もの友達と飛びこんで遊んだ事、比の川の名物のかじかのなく聲にあこがれ

らそれと思ひ浮べた。

一年二年の頃は思ひ出も淡いものである。五六年殊に高等二年の卒業間際の思ひでは、どんなに楽しいものであつたらう。四月から六月にかけて若葉の萌え立つ頃から、元氣よく學びの道にいそしんだ、長い／＼四十日間の夏休みも過ぎて、なつかしい友と顔を見合す二学期の初めは、未だ残暑が厳しい日であるが、十月ともなつて秋風が立つと、誰の心も引きしまつて来て、學校は一層面白くなつて来る。丁度此の頃例年の通り運動會が催される。萬國旗の下で歡喜の聲の中に二千數百人の全生徒は狂ふばかりに浮き立つのである。三学期は寒さによるへながら、おとなしく勉強した。けれども雪の朝の雪合戦には、思ひ切つて元氣よく飛び廻つた。冬もやがて去り、校庭の桃が開く頃、私等六十八名は、高等小學を卒へてなつかしい母校を去つた。

あゝ此の卒業どんなに嬉しく又悲しくもあつたらう。ふと氣が付いて見ると、太鼓灣の松琴の調いと淋しく月影いづこにもなく外は闇夜である。私は再び二階の校舎を思ひ千秋園の樹々を偲び、更に同窓の友をなつみながら恩師を慕ひ忍んで見た。  
嗚呼思ひ出し多き我が母校よ

### 故里と思ひひ

實科一年 福住ミチ子

彼の美しい花の王、櫻の花がそよ吹く風に誘はれて、一ひら二ひらと散つて居る春尚淺き四月の上旬に、故國の山を霞にまかせて、この地に參つて、早や半ヶ年の月日を過ぎた、實に「流るゝ月日は、水のやうで、あるが私は片時も、なつかしい、あの故里を、忘るる事は出来な、照るにつけ曇るにつけて思ふかな。

故里したし忘る暇なし

椽に出て、庭を眺むれば、今我が家の庭木も、彼様に生々として、居るだらうか、しど／＼と五月雨の、いとしげく降る様を見れば、私も一ヶ月前には若々しい、希望を抱いて、居り乍ら、田植の手傳をした時の愉快さを、思ひ出す薄暗い電燈の下で明日の日課をしらべて居る。文机に鳴きよる、虫の聲の淋しさに、嗚呼今父母は、我が友は、假令身は他郷に居ながらも、心は常に我故郷へとんで行く

僧月尚は、男子立志郷關、學若不成死歸

と言はれたが、男子でなくとも、女子にても一度決心して、學窓に臨めば、目的を達する迄は、歸らぬと思つて

### 秋の一夜

實二 大石ツヤ

昨夜の月に引きかへて、今宵はあるかないかわからないうすあかりにすかして見れば、雲の動くのが、かすかに見える。ほんどにゆるやかに動いているけれどもそれに風は烈しい。

秋になつたばかりなのに、もう何となく秋らしい氣持になつた。日頃から沈み勝ちの私は殊更に今宵はそんな感がある。

書物を手にしてそつと窓ぎはによつて手あたり二三頁繰りひろげて読んで見たけれど、どうした事か讀む氣になれない。そのまゝ、傍において体を横たへて暫く休んだ嗚呼なんと言ふ淋しい月だらうか。私は思はず獨言をいつた。それからしばしは物も言はないで暗い月夜に心なく見入いた。

### 休暇中の一

實二 小島秀子

榮しき暑中休暇は来た。休暇中は思ふ様に遊び暮さうと思ふ。されどみだりに遊び徒らに睡り暮してはならぬ私は海邊で遊ぶことがすきた。或る一日親族の兄弟妹と



は居るけれ共言行も一致せず、いつも故里の事が、思ひ出される。しかし之も克己心が足らぬ爲だらう。

### 結婚と祝ふ手紙

實二 堀野ふみ子

一筆申上げます。よし子様、とう／＼貴女の待つて居られました青葉の時節となりました。人傳にて承りますれば、過ぐる二十日貴女様には目出度田中家に御入嫁遊ばされた由。眞に御目度存じます。

よし子様貴女は常に平和な家庭の人となりたいたと申して居りましたが、今や平和なる田中家の人となられてさぞ御満足のこと存じます。そうして今正に踏み出されようとする結婚生活の第一歩、それは如何に意義のある又如何ばかり希望に輝いて居ること御座います。

よし子様、申すまでもないことで御座います。何卒貴女のみやさしい御心も、御舅姑様御良人様に御事へ遊ばされ、理想の御家庭をおつくり遊ばせ。終りに臨みまして御家門のいやましに榮行かれますことを祈ります。先づは御祝ひまで。かしこ

連れ立ちて清き海邊へ歩を遡んだ。道は焼くが如くに暑い。それでも清く涼しい木蔭の岩に、波の漂ふのを想像しながらやつと海邊へと辿り着いた。海邊へ来た時にはもうよい心持はなかつた。海神のあらゆる珍奇を網羅して私共を待つ心盡しに私はいつの間にか海の人となつてゐた。私はもうすがすがしい氣持でいつぱいになつた。こんな空氣のよい海邊に一生を送つたならば如何に面白き事だらう。憂さも淋しさもわすれて愉快に暮す事が出来ずまいかと一人考へて見た。

數里の砂濱遠く霞みて靜かに波の洗ふに任する處にはアサリ、ニラ、蛤等名も知らぬ奇珍殼列をなして、我等を迎へて居るのである。拾ひて標本とするも、又我が友に送るも樂しみの一つである。こんな事を思へば思ふだけ海濱がなつかしい。涼しい道が来た時よりも足の重さを感じながら我が家に向つた。

### 晩夏の夕

實二 岸 ステ

夏も早半ばを過ぎた

晝中かんと照りつけて随分こまらせたあの太陽も今は西に歿しかつた。眞赤な色で木も草も壁も同じが様に

馬は靜かに草を食うてゐる。たくましい兵士の數人は傍にわらをして食事をしたためてゐた。青竹の曲つた箸も興味深く兵士のつかれた腰を下した其のわらを、馬がおどなく食べてゐるのが又なんぞなく嬉しかつた。

禿山の夕日が赤く射した薄紫の星が山の端に光をなげたもう山にも夜が来た。夜の氣にたちまち身のまはりを含んだ、廊下の板に素足でつめたかつた。山は黒く目の前に魔物の様にそそり立つて沈黙してゐる、星は降る様に光つてゐる、月無き山は冷たい、死人の様に冷めたい。一面に眞黒な山の半ばに赤い提灯の火が一つゆれて進むのが心細い、絶えずひびく川の流が旅のゆかしい情趣を誘うて、今宵の旅寢の夢を破りはしまいかと小さい不安が浮んで来た、家から洩れる灯の火が暗がりにも赤く線となしてうつゝ居る。

### 短文 二篇

實二 森重ハツ子

秋は来た

大好なく秋は訪れて来た。愈々活動する秋は来た。すいひし、まつひしも千草八千草に宿かり、いと聲高く小女諸君よ。いたづらに此のソーゾンを費さず若き血潮

彩つて居る。蟬は何を云ふのか、一心にシャー／＼／＼とかしましく鳴いて居る。湯上りに浴衣を着て縁側に腰をおろした。日中の暑さに引きくらべ今の氣持のよさ。御庭の方から涼しい風が時々肌を通す。島の草木も今宵の露を身につけて、生生とした様かどこなくうれしげに見ゆる。

### 山の宿にて

實二 井上芳子

道は急になつて来た。左には山、右には早川の流が石を噛んで足元に吼えて居る。老木の立ち並んだ山からは、時折身にしみる様な風が頬をうつ。つく息は白かつた、切崖のもとには眞紫のりんどうがつ／＼しまやかに可愛らしい面をかしげてゐる。透き通る水が小さい音を立て、落ちる、石垣にはつたがまひはつてはんのりと顔をそめてなつかしい、其の石垣の下につなかれた二三頭の熱ゆるまゝに、精いつはいつとめませう。体に心にさうして前途の幸運の鍵をもとめませう。

### 再後の一瞬間

實二 森重ハツ子

あら………今までの雨はやんでしまひました。前庭の木々は一層緑を増しましたやう。緑葉は露で銀色に光つて居ます。どこから来たのかたつむりが、心地よげに露の玉縫ひつゝゆるやかに居ます。私は此のきれいな景色に恍惚して居ますと、あやにく又雨は降り出し降つてはやみ、やんでは降り、今は一寸先も見えませぬ。——私はびつくりしました、私はもう六時かどつぷやきました。それと同時に雨もおどろいたのか、早や名残なくやんで、向ふの方では、子供がやんやどはやし出しました。物ずきな私はお椀側まで飛び出しました、見ればさながら天女の嬌かとも思はれるサンエヤルリをちりばめたやうな七色の虹、向の山よりこちらの山端へかゝつて居るではありませんか。道はたにある小石までもしつとりぬれてさも趣味あるやうに輝いて居るではありませんか。

## 秋の夜

實二 都野美代子

日はもう西に没して、淋しきあたりを包んだ、遠山の鐘のひびきをくざりに、鳥も獸も皆聲をひそめて、秋の夜を語りあふ虫の聲のみ数ふる。床に入つてもねむられない。ふと枕もとで虫の聲がする。いちらしい虫、私は其の蟲に守をしてもらつてやすんだ。いつのばんもかうして蟲がくればよい、と思ひながら。

## 謎の瞳

本四 石津存子

「葉子！お前もつと髪が多かつた様に思つてたに……」  
ボンと軽く煙管をたきながら彼女の母は無難作に束ねられた葉子の髪を見やりながら云ひました。

「ゑ、此頃妙にぬけますの。」葉子はそんな事をきかれるのが、非常につらかつたのです。そつと反對の、誰もゐない方に向ひて眸をぬぐひました、青白い頬は骨が高く出はつてゐました。瞳は神經質らしい鋭い光を見せてゐました。それら總てからおしはかつてみて、此頃彼女の女が確かに悶えてゐると云ふ事は、學友の誰もが心づいてゐる事なのでした。

然し無口でかどなしの葉子は、誰にも心の悶えを語り

いのでわりました。

葉子はまた魚焼く事も忘れて、考へる様な風をして立ちつくしてゐました。葉子の視線もやつぱり地におちてゐました。そしてあのけはしい父の瞳を思つてゐました。急に瞳をどちました、果てしなくおそつて來る心よわさに……。

一分！二分！どうも夢中で、暗い戸口に走り出ました。小さい芋畑の小徑をはしりぬけて、いつか河畔の並木道にかゝつた時苦しさにはたへられなくなつて、両手をつかり胸にくみ合せながら、倒れる様にもたせました。近くの森で梟がホーホーと淋しい聲をたてゝゐます。ちつと耳をたて、聞いてゐました葉子はすつかり感傷的な氣分になつて、了ひました。それから可なり長い間闇に包まれて、幾万年か昔の響が地の底から洩れて來る様な幽な蟲の音をきいてみました。するど。

今まで——今までヒ——どこらへてゐた涙が瀧の様に彼女の頬をつたひました。葉子はどうする事も出來ませんでした。細かい旋律に新しい匂ひを盛つた様な冷い夜風がこゝろよく頬をなでました。月ない紺青の空には星屑がこぼれて白くきらめいてゐました。近い町の燈火はほんのりと紅くうるんで、やはらかい趣を湛えてゐま

ませんでした。随つてあまり親しい友とでもありませんでした、只淺い表面的な交りだつたのです。お友達の誰かれは妙に憂鬱な此頃の葉子が木蔭で吐息してゐるのを見ても、すべて疑問として葬つてゐました。

先刻母から聞かされた髪が葉子にはどうしたものか、氣になつてなりませんでした。葉子は此夕方さめしいお臺所で、青いお魚を焼きながら、白いエプロンのはしで涙を拭ひました。そしてそつと盗み見るかの様に父と母とを等分にくらべました。

父は葉子のそうしつ態度に氣がついたのでせう。太い眉毛の間に、可なりけはしそうな表情が表れてゐました。そしてさもいら／＼しさうでしたけれども、其の瞳は伏せられてありました。何時も葉子の事が氣にくわぬ時何時もさういふ態度を見せるのでした。

葉子は「しまつた」と心でつぶやきました。父が何かにつけて、葉子丈にはつらくあたつたり、意地ばつたり、妙に荒々しい聲を出したりするのかわ例でありました。其癖二つ違ひの葉子の妹の純子には、やつぱり、父親らしい、慈愛の眼をさへおくるのです、そうした時も僅か一分の後でも葉子の方を凝視する時の瞳はけはしく物凄くものでした。優しいをとして孝行者の葉子には堪へられな

した。葉子はは／＼落ちる涙をぬぐはうともせず、じつとみ入つてゐました。ふと葉子は自分といふものに氣がつかまりました。尊い様な不思議なものにふれた様な氣がしました。

彼女は今はもう祈りたい様な氣持になりながらも、ほんとに敬虔な心になりながら、何故か父の瞳を思ひ出すと、悲しくなりました。

「何しにこんな處に來たのだらう？」こつとつぶやきながら、もと來た道をす／＼とひきかへしました。

狭い臺所には、葉子の焼きさしておいたお魚の煙が充満してゐました。母は出かけて行つたらしく下駄も見えませんでした。

父は茶の間で幽かな電燈の光で新聞を讀んでゐるらしくありました。

「あら！どうしよう」とびつくりしてつぶやいたのを聞いてはじめて老眼鏡越しに、臺所に立つてゐる葉子の頭から足の先まで見下して、氣づいた様にむづかしい表情をみせました。眉がヒリヒリと動いたのを葉子はみのがしませんでした。瞳は愛も許しもないほん／＼に冷い光りで一つばいでした、そして親と子の間には今にも突破しそうな沈黙がつかまりました。

## 修學旅行の記

本科第四學年

田總 ユキ

五月三十一日

朝雨、後晴

母の聲に夢破られて目覺めた私は、戸外の騒音に耳を  
 欬てた。雨だ！とまだ覺めきらない目を擦りながら叫ん  
 だ。歡びに満ち、希望に満ちた修學旅行の第一日が雨天  
 とは、あまりに無情な天の仕業。暫しは茫然として雨戸  
 を明けたま、暗黒の中を無心に降り灑いでゐる雨を恨  
 らめしく眺めた。雨の爲に冷やされた旅行熱、今日一日  
 を如何にして過すか、など、想像して見たり、それから  
 それへと考へ煩つてゐる矢先、晴れるかも知れないこの  
 母の言葉に驚き、且元氣附けられて、出發の用意にと取  
 りかゝつた。時間は思はず経過して、四時半までには、  
 數十分餘りしかなく、勸められる朝飯もそこ／＼に済ま  
 せた。心配した雨は夜の明け放れると共に降り止んで、  
 空には少しの青空さへ認めめる事が出来た。此の時の私の  
 歡び！父母姉妹に暫くの別を告げて、いそ／＼我家を出  
 た。けれども數日は起居を共にする事が出来ないと思へ  
 ば、道に名残悔しまれて、幾度か細くなり行く母の姿を  
 振り返り見た事であらう。

船へと乗りうつられようとして、その志を果たされず、  
 萩より江戸へ行かれる途中、佗しい駕の中から、「かへら  
 じ」と詠まれた其の涙松が、雨に濕うしてその當時を  
 語るかの様な餘滴が、微風に漏れた時、如何に私共の心  
 を惹いた事であらう。暗く無氣味なが、又面白い隧道を  
 出て茶屋で憩うた。此の時は全く晴れ渡り、日影はま  
 はゆく射し出して、絶好の旅行日和となつた。舊道路と  
 がいふ急な坂道を下りると、早くも眼界が開けて、一段  
 々々色彩られてゐる山々の緑は、恰も萬國地圖の様に  
 も見える。清流の邊に初夏を語る卯の花は、萬緑叢中白一  
 點とても云ひたい様な氣がする。

明木を過ぎて、豫ねてから困難だと聞いてゐる一升谷  
 へ来た。始めの内は左程でもなかつたが、登つて行くう  
 ち、坂は次第に傾斜を増し、いよ／＼險惡になり、剩へ  
 躊躇なく照りつける日光に少からず閉口したが、これに  
 引き換へて、風景は益々佳くなつた。その昔を偲ばせる  
 大樹の、半ば朽ちた切り株が、蹲つてゐるかと思へば、  
 切り立てた天狗岩が威丈高に構へて人を驚かし、縁瀕る  
 はかりの中を、清流が迸つてゐるのは、又すて難い景物  
 の一である。坂途は實に長く續いた。やつと八合目とも  
 覺えらるゝ所で、休憩の事、木蔭に足なげ出して流れ

しつとり濡れた道を守るやうにして、井上さんを誘つ  
 た。連れ立つて行く二人の心からは、丁度黒雲が青空に  
 吸ひ込まれて行く様に、不安が次第／＼に剣がれて行つ  
 た。學校の控所で待つてをられる皆様の顔には、若々し  
 い初旅の喜びが溢へられてあつた。何分にも雨の爲に皆  
 の集合が豫定時間より遅れて来て、玄關前に整列したの  
 は六時頃だつた。校長先生の御訓を嬉しく心に銘打つて  
 懐しい學び舎を後にしたのは早六時半で、雨後のクロー  
 ーは一入色増して、私共旅行團の心いよ／＼暖つた。  
 門前で見送りて下さる寄宿舎の方々の好意を謝すると共  
 に、お氣の毒に堪へないのは安永先生である折角の旅行  
 にお伴の出来ぬばかりか、御病床に呻吟遊はす先生の御  
 胸の悼はしさ。私共は只管に御快愉の程を祈るのであつ  
 た引率せられたのは、中野、池上、五十崎、世良の四先生  
 であつた。

旅行の第一歩を踏み出した本科第四學年實科第二學年  
 の九十名に近い少女の面は、元氣に輝いて八里の險路を  
 踏破するには十分であつた。大谷で人員點呼をし、涙松  
 の遺址に出た。此處までも見送つて下さつたお友達と、  
 涙ながらに別れたのは、悲しい思ひ出の一であつた。  
 あゝ思へば偉大な松蔭先生が、憂國のあまりに、米國

る汗を拭いた。時間はまだ早やいけれども、荷物も軽く  
 なる事とて、持參したお辨當をおいしく戴き、すつかり  
 元氣を恢復した。これより頂まで僅で、間もなく平坦な  
 道路に出た。道の側に標してある里數の、次第に少くな  
 り行くを楽しみに、行かない先の旅路など愉快に語りな  
 がら、谷にせ、らぐ清水に合せて歌など吟んだ。かうし  
 た私共を迎へてくれるものは、唯緑の山と、田圃と、そ  
 うして苗田に鳴く蛙と、田畑を培ふ農夫とはかりだ。實  
 に刺戟少ないゆつたりして平和な場面である。こんな所  
 で生活して見たいとは誰しも望んだ事であらう。

佐々並の林旅館に着いたのは丁度正午だつた。先づ父  
 母の許に無事の由を報じ、残りのお辨當を載いたが、満  
 を非常に覺え、冷たい水を飲んで醫し、御飯は少し口に  
 したのみであつた。宿を立つてから、山口への道に明る  
 い原さんを頼みに、私共數人はすん／＼急いで、一番  
 先頭になつて歩んだ。人並以上に早くしようとするのだ  
 から、其の苦痛は一通りでな、適る人毎に「此處から  
 一の坂までいくら位ありますか。」など尋ねて五町三町二  
 町と近くなつて行くのが、せめてもの慰めであつた。後  
 を振り返つて見れば、次と間が、一町近くにもなつてゐ  
 るのを嬉しと思ひながら、やつと一の坂の麓に、辿りつ

いたが、餘りに急いだ爲か、足は疲れ、呼吸ははづんで休みたいとは思つたけれども、折角此處まで来たものを、今追ひつかれては、水の泡と、汗が珠数の様に頬を傳つて落ちるのも關らず、苦痛を堪へ忍んで急いだ。登れば登るほど、石の多い險阻な坂になつて、体はいよ／＼なる疲れた。氣ばかり先に立つて、一向拂らない足を引摺りながら、悪戦苦闘した。今は人の語も、鳥の鳴く音も耳には入らない。唯自分一身を支配するのさへ非常な困難であるが、これがいつまでもは續かなかつた。登りつめて下りになつてからは至極樂で、山口町の全景を見下した時は手を拍ち、飛び上つて喜んだ。そして今までの苦しかつたこと、佐々並から少しも休まずに、一の坂を越ると元氣を語り合ひながら山口の地を踏んだ。實に一升谷と、一の坂の二つは山口へ越すに大なる難所だ。無茶苦茶に毀れた下駄を捨て、服装を整へて中川旅館についたのは午後四時頃であつた。卒業生の方や、舊友などが出迎へて下つて嬉しく感謝した。

お湯に入つて、すつかり疲勞を癒した。夕飯の後、三十分ばかりの自由外出に、打ち連れ立つて、町の一部を見て歩んだ。流石に学校の多い所だけあつて學生が頗る多い。夜は又池上先生に引率せられて、夜景を見るべ

く停車場に行つた。そして色黒く鄙びた私共に、異様な眼をもつて注がれた時、私は萩の高女が如何に健脚であつて、忍耐強いかといふ事が言ひたかつた。やがて漁笛一聲プラットホームに汽車が軋りつゝ入つた時、私共はバネ仕掛の様に一齊に見た。けれども漁車に對しあまりに想像の大であつた私は、驚く程のものでもなく、寧ろ貧弱なものだと思つた、時間の制限もある事とて、これを見て歸ることにした。晝の暑さは全く洗ひ流されて、み空に輝く星は薄寒く震へてゐるかの様に見えた。宿に歸つて直ぐ床に就いた。床の中でペンを走らせてゐたが、朝早くからの疲れで、いつか楽しい眠りに誘ひ込まれた

六月一日

晴天

静な空氣を破つて階下から響いて來る金盞の音が、たまらなく私共の心を躍らせる。午前六時半宿に別れを告げて、静な紺碧の空から流れて來る清い朝風に吹かれながら、先づ八坂神社へと歩を運んだ。此の邊はもと大内氏が極盛時代に、別業を構へた所で、それが如何に結構宏壯であつたかは、宗祇の「池は海、梢は夏の深山かな」で容易に知られる。一禮して此處から僅かな野田神社、豊榮神社に參詣した。廣い境内には塵一つも無く掃き清められて、朝露は未だ乾き切らない。こゝに毛利家中興

の祖たる元就公及び忠正公の英靈がましますと思へば、頭は自然に低くなるのであつた。次は山口兵營で外から門内を覗いて見たばかりで、直ぐ香山園へと更に歩を運んだ。ヒリ／＼照りつける日光を編編傘一つに避けて、汗を滲ませながら階を上つた。と境内一面とは芝が青々と敷き詰められて茂つた木蔭からは涼風がすうと吹いて來る。小高い處には忠正公の御徳を表す勅撰銅碑があり側の躑躅が紅に咲き誇つて、首夏の景色を一層添へる。此處を後にして、山口縣廳、公會堂に就き先生の説明を聴き、博物館へと足に御苦勞を願つたが、生憎大掃除で閉館との事であつたが、先生の御心配と館の特別な好意とで、觀覽する事が出來たのは何よりだつた。靴を脱いで静肅に觀よ。この事に先づ右側の階下から順次に觀た今しも掃除の終つたばかりと見えて、床を拭いた跡もすが／＼しく、足に沁む冷氣に心締められた。育児と玩具と記されたガラス戸の中には、桃太郎が鬼ヶ島で凱施して、犬、猿等と寶物を積んで歸る所や、可愛い人形などを陳列してあつた。其の他廢物利用、台所の整理など、私共に取つて有益なものも許多あつたが、時間の都合上細密に見る事が出來なかつた。防長の模型地圖は殊に感多かつた。あの阿武川の三角洲になつてゐるオレンヨの

里から遙々山坂越えて、今は早こんな山々に圍まれた縣廳の所在地にまで來たと思へば、夢の様にもあり、又初旅の嬉しさが胸に迫る。階上には虎、雌雄の獅子、猿、孔雀などの刺製、海の生物などがあつたが、さつと見たばかりで臆氣にしか記憶してない。此處を辭して龜山公園へ行く。かなり急な石段に、一段々々と苦痛を感じながら登つて行く内、思ひかけずも廣い平地になつて、毛利忠正公、忠愛公を始め、毛利元藩、元岡、元純、吉川經幹の六巨像が目前に現はれた。此處からは山口の全景は一瞬の中に入り、其の中で殊に目立つのは、數多の學校のある事であつた。目の直ぐ下には諸學校の共同運動場であつて、体操をしてゐる生徒が子供の様に小さく見えた。未だ發車時刻までに間があるので、池の岩邊に座して休んだ。青くむした苔が水分をたつぷり含んで、見るからにすが／＼しく、木の間から漏れて來た蟬の音はさながら森の音楽かとも聞えた。平かな水面に躑躅が映つて、風の吹く度に碎けるのを餘念もなく愛でゐる内、「集まれ」の合圖に再び階段を下りて停車場へと行進したやがて待つてゐる内、瀛車は來た。心躍らせながら飛び乗つた。山も木も冴も引力にひきつけられた様に走つて行く遠方近の景色に、赤毛布連は興じ入つた。間もなく

小郡に着き、本線に乗り替へた。尙も轉じ展けて行く異郷の地を珍しく眺めてゐる内、胸元が苦しうなつて来た。けれども昨日以来の疲労と、睡眠不足で眠い事夥しい。苦しさをぐつと堪へて、腰掛にすがつて寝込んだが幾度か揺られて頭が滑り落ちた。これを隣の安藤さんは氣の毒に思はれたか、親切にも席を譲つて下さつた。濟まないとは思ひながら、苦しさに堪へかねて御好意を受けた。それからしばらくつと寝て、「隧道ですよ。」の聲も唯一度、微に聞いたばかり、後は何も記憶してない。揺り起された私は邊をまばゆく眺めて、下關に來たのに驚いた。と同時に酔か覺めてゐるのは意外だつた。

汽車を下りて、直ぐ連絡船に乗つた。對岸の門司が淡く浮んで。いくつもの橋が夢の如くに立ち並んでいる。何時の間にか、船は動き出したと見えて、九州の山々が少しづつ近づいて來る。嘉永六年此處を黒船が通つた時は、誰も驚異の眼をみはり且怖れたのが、今はそれ以上に發達した船に私共が乗り込んで渡るとは、何んぞ文明進歩の早い御代だらうなぞ考へながら微笑んでゐる内、船は早くも門司に着いた。九州の地を一寸踏んだと思ふ間もなく、すぐ又車中の人とならなければならなかつた驛に着く毎に、窓の下を牛乳——牛乳——又

はお辨當——お茶——と一禮節をつけながら賣

つて歩く聲が面白い。お晝も過ぎたので、汽車の中でも辨當を開いたが、酔うた爲か少しも食欲がない。それを強いて數口戴いたのが、やはり悪かつた。さあ暫くすると胸は悪くなるし、汗は無暗に出た。けれども前の經驗から良策を覺えた私は、直ぐ目をこぢたが、前の様にぐつすり寝る事は出來ず、只管早く博多に着きたいと思はかりだつた。もう窓からの眺にも飽き大里、小倉、戸畑、八幡等の驛を黙々のうちに過す。やがてハカ——の聲に急ぎ下りた。長い間腰をかけた詰めたので、よろめきを感じながらも、驛から程近い高島屋旅館に急いだ。宿は三階もある廣大堅固な家で、私共は二階に充てられたが、面白く感ずるのは、到る處に鏡か飾りつけである事だつた。休んでゐると間もなく膳部は運はれた繁華な所だけに野菜なども進歩した甘藍などのあつたのは嬉しかつたが、宿の女中達の不遜な態度で、すつかり私共の希望は挫かれた。質朴な服装をした田舎者と見做したのか、女中の立居振舞は實に粗野であつた様に感じらる。或はこれも此の地方の風俗かも知れないが、ごにか私共には、好感情を與へなかつた。近所の湯屋に行き心氣頓に爽快になり夕風に誘はれて宿を出た。先づ第一

に足を止めさせたのは、高尚優美な博多人形であつた。すらりと棚に飾られた人形は、千姿萬容どれとして私共の心を惹き目を歡ばせないものはないが、哀れ！貧乏學生とて心に任せず數個を購つて店を出た。電車道に沿うて歩んだが、道の幅の廣い割台には人通り少なく淋しかつた。子供達が道ばたで方言を使ひながら、早口で語り合つてゐるのが、ちつとも聞き取れなかつた。夜の帳も全く下りたので、又同じ道を歸つた。

今日一日疲れを眠によつて治すべく床に就いたか、直ぐには寢につかれず、靜に目をこぢて今日までの私を反省して見た。何時か軽い眠を催して、博多の一旅館に一夜を明かした。

六月二日 晴 天

起きたのは午前五時頃だつた。宿には荷物を置いたまま市中及近傍の見學にと出かけた。先づ管崎神社參拜の爲始めて電車に乗つた。釣草に掴まつても、狹い程の鈴なりの盛況である。終點で下りて、其處から歩めば、割合に人家少なく畑の野菜が元氣よく植ゑられてゐるのを見て、萩に歸たんぢやないかしらと思はれた。管崎八幡宮は管崎町にあつて、鳥居から拜殿までには、神の御寵愛を一身に集めた鳩が、心地よげに遊んでゐるのは

まことに可愛い、拜殿には醍醐帝御宸筆の敵國降伏の四字が氣高く掲げられ、側の皇太子殿下御手植の松と共に感慨無量であつた。此處から多々良濱までの筋道は、名にし負ふ千代の松原で、限り知れない松影は鬱蒼として畫向暗く、千態萬狀の老幹、海風に響く松の韻、皆實の究意の歌枕である。此の松原終れば煙波渺茫たる多々良濱である。元寇の襲來した當時の悲惨も忘れたかのやうに波靜である。濱邊づたひに水族館へ行く。魚類は總べて大きいガラスの中に入れられて、海で見る岩石が形よく入れられてゐる、白い泡がア——上つてゐるのは、小さい管から塩水でも供給せられるのであらう。足長章魚が屈托げにゆらりゆらり泳ぐ様や、鱈が一つの岩穴から澤山頭を並べて出してゐるなどは、殊に興味多かつた。又兒蟹が嚴めしい體軀を伏せて、じつとしてゐるのや、鰐が死んだ様に元氣なく日光を浴びてゐるのはいづれも不恰好であつた。其の他鸚鵡、鶴、鶯などの鳥類、狐、狸、猿など皆面白く心惹かれながら、此處を出立して日連上人の巨像に詣でた。三丈五尺もあると聞く。人の御丈は、何物よりも超越して其の人格の偉大を語りながら大空に聳え、その遺芳は尙多くの人々をして、渴仰隨喜せしむるに充分だつた。八角の臺石の側面にけ蒙古襲來



の圖があつて。圖中日蓮上人の面のみ光り輝いてゐるのは、上人の徳を慕ふ信者の熱誠を籠めた手によつて摩撫せられたものとか、次は傍に建てられた元寇記念館を見る。正面には長くも御村上天皇の祈禱といふ御勅額が掲げられ、左右には分捕品の蒙古の戎衣、天覺の兜、轡や金覆輪の鞍、其の他寶遺物など陳列してあつた。案内者の熱心な説明をきき、終り、次は龜山上皇の銅像に参拝した、尊き御身を以て國難に代らんと祈らせ給うた上皇の御像を拜しては、誰しも感涙を漉がずに居られようか、暑さを冒して九州帝國大學へと行く、校内頗る廣く、數多に分れた室内、先づ研究室、解剖室、標本室など見學した解剖。せられたものは總べて硝子櫃の中に藏しられ。係の方から親切な御説明があつた。炭坑に入る人の肺臓の黒色になつてゐるのには驚いた。又肺の解剖したものは大變多く、特に結核に侵されたもので、穴が明き、或潰れてゐるのは、見るからに恐ろしく眉を蹙めずには居られない。其の他内臟機關、畸形兒などもあつた研究室では肺の顯微鏡にかけたものを見た。圖が畫ける人は畫いて見なさいといはれたので、拙い圖を畫いて、置き土産とし、此處を辭した。次に西公園。電車の中から見れば、大廈高樓が軒を並べ、殊に、福岡は繁華である

西公園は石段を登つた高地にあり、此處からは博多、福岡の全景を眼下に見下す事が出来る。日蓮上人の銅像が重なつた甍の中から目立つて見え、両市の境をする那珂川が靜に流れている。茂つた藤棚の下に、腰を下して博多より持参のお饗當を載いた。暫くにして櫻樹多き西公園を後にした。これより又電車で物産陳列場に行く。此處には博多、福岡市より産する礦物、織物、其の他雜貨物を並べてあつた。發車の時迫ると急ぎ立てられて再び高島屋旅館へと歸り、荷物を持つて汽車を待つた。もう此の博多の地を後にして、二日市に行くのだと思へば嬉しい。二日市驛につくと、宿の物は荷物を託し、直ぐ太宰府行き軌道の汽車にも乗つた。誰か「小さい汽車だ」と言はれたので、乗り合してゐた人は皆笑つた。窓の左右を見れば、何れも廣漠たる野で、これが二日市から少し離れた所とは思はれない。薄暗い汚らしい所で下りて歩いた。間もなく太宰府町に出た。町といへば町、ほんとに淋しい質素な町である。けれども長くも此の春、國母陛下には遙々下り給うて、親しく此處に行啓させ給うた事を思へば、恐懼おく所を知らず。藁屋を交へた淋しい一市街とはいへ、如何にゆかしく、且千載永劫に残す光榮名譽は如何ばかりであらう。

かねてから生活寫真で、皇后陛下御参拜の映寫を拜觀した所を通る。心身はあやしきまでに緊張して、奥ゆかしい空氣が漲つてゐる。幾百千年も此の世に生を營んでゐるかと思はれる大きな楠が、空を蔽つて巨大な根の横はつた間を行けば、高雅莊麗な社殿に出づ。手を清めて拜めば、憂き事の多かつた管公の偲ばれて、漫に悲しい拜殿の左側には皇后陛下奉納の梅があり、右側にはゑにし多き飛梅がある。拜殿をまはれば、管公の愛で給ひし梅樹が植ゑ附けられてゐる。又四時参詣人絶えざる爲、所々に客を呼ぶ店もあつて面白い。歸りは徒歩で、各自自由に語りひ、打ち群れて野路を辿つた。折しも太暢は西に傾き疲勞を覺え、觀世音寺邊では一層増した。多くの方は下で休まれたけれども、「行つて見られる人は馳けつこうこをして登りませう。」との先生のお言葉に元氣づけられ先登した。そして先生と共に勇氣をしばらく出して、萬歳を三唱したのは實に愉快であり、旅行の笑種となつた。此の寺は今古びてはゐるが、太宰府の繁盛な頃は支院四十九もあつて、隆盛を極めたものださうで國寶になつてゐる佛像は今尚あるとの事だ。又この西にある戒壇院も窺いて見た。皆と一緒になつて太宰府址へ行く。此處はもと天智天皇が大野城を設けられた所で、所々に

存する大きな礎石は、その昔柱の立て、あつた址の事で、如何に廣大堅固であつたかは想像に餘りある。中央には二つの大きな碑が建て、ある。先生の言はれるまゝに見れば、管公が天に無實の罪を訴へられたと言ひ傳へられる天拜山が、紫色にかすんで哀愁を醸す。これより二日市の宿へと急ぐ。行けども、宿に着かれの悲しさ日は早山の端に沈んで、暮色蒼然として迫り、我が行く先の野も山も淡うなつて、そゝろに故郷戀しくなつて来る。今は早疲れたゆんで元氣さへ失せたけれども、黄昏は容赦なく迫る。重い足を引摺り、やつと宿についた。宿の主人の親切に出迎へて呉れたのは嬉しいが、一々よく入らしやいました。お疲れさまで御座いませう。と言はれて却つて挨拶に閉口する。女中達もよくもてなしてくれた。博多より遙に淋しいけれども人情が暖い。宿の地下にある温泉風呂にと入つた。温泉とて礦物性の臭氣は一寸するけれども心地が甚だよい。夕食をすまして茶話會を開いた。池上先生から、電報で「旅行の安全を祈る」との打電があつたと聞いたが、それは桑原さんのおとさんからであつた。色々御注意やら雜談やらに耽つたが、夜も遅くなるので閉會した。夜具など綺麗で氣持がよかつた。二日市の居心地よい

のをお互に語り合つてゐたが、何時かモスの蒲團の快い誘ひに楽しい夢路を辿つた。

六月三日

晴天

遅く目が覺めた。誰も皆朝の仕度忙しい。朝風呂を浴びて爽やかになり、朝風に頬のはてりを吹かれながら残り惜しい二日市の旅館を後にした。發車時刻までには時間が僅かしか無いとの事、懸命に走つて踏み切りの所に差しかゝると、番人が早く〜といふので夢中になつて通り、停車場に飛び入つて一呼吸する間もなく、汽車は一抹の煙を残して發車した。もう五分間早く来ればよかつた、今にまつて残念かつても無益だつた、次の列車まで、大分待つて乗車した。

香椎驛に下りて、徒歩で暫くは、右手の高い所に立札かして、皇后陛下御叱望所と書いてある。此の様な處に登り給うたかと思へは實に長い。此處から三町ばかりも行けば、香椎宮に着く、泉中で手を清めて拜んだ。皇后陛下に献上の黄金の燈籠は實に立派なものだつた。邊りの老樹鬱蒼たる中に、結構壯麗な廟があるのは奥ゆかしい。境内には綾杉が植ゑられて、側に

千早振る香椎の宮の綾杉は

神のみとぎに立てるなりけり

と書いてある。又同じ道を通つて行けば、随分暑く辛いが、汽車に乗つてからは楽みだつた。殊に小倉に住んで居られるとか言ふおばあさんと一緒に腰をかけ、色々此方の状況を聞き、又萩地方の事を話したりして、退屈な汽車もちつとも飽かなかつた。八幡の製鐵所は其の規模大きく、煙突は林立し、騒音絶えず、實に繁劇で、そうして或る一方より見れば實に惨憺たるものである。何でおばあさんの話によれば夜などは一體に明るくなつてゐて、殊に摩擦で火花が起り恐ろしい感があることであつた。けれどもまた思へば、我が國鉄鋼の大部分は此處から製出されるのである。この林立した煙突から生ずるのである。

海水浴場ではもう大分泳いでゐた。遠淺の海には波一つなく穏である。小倉でお友達となつたおばあさんと別れた。門司で汽車から下りた。此の長い間歩つてゐたのに、酔はなかつたのは、汽車に馴れたのと、おばあさんのお話のお蔭であらう。門司から下關までの連絡船はもつと長くあれはよいと思つた。下關市に上つて、直ぐ山陽ホテルを見させて戴いた。これは五十崎先生のお父様の御心配によつてとの事であつた、机の上其の他所々に、青々と茂つた鉢植が置かれて、夏には特に相應い、

各室何れも清楚で、設備よく整ひ、特に貴賓室などは善美を盡してゐた。此處を辭して龜山八幡宮に詣つた。高い階段を登れば、洋々たる青海原も、立ち並んだ家々も一陣の中に入る。引接寺、春帆樓など、右手に見て赤間宮へと行く。これは安徳天皇を奉祀したもので、境内の隣には安徳天皇の御陵あり、又平家一門の墓がある。昔は青々と生へ「香花をたむける者もなく、昔の榮華は何處にかある。あゝ平家の最後の哀れさよ。

停車場にて暫く發車を待つ。うと〜と眠りに誘はれてゐる内、揺ぶられて急ぎ汽車に乗る。今日は未だ他に團體旅行があり、車中は混雑した。歸りでもせめてと思つて、下關から小郡までは眠らずに苦心したが、それでも隧道は二つ位しか覺えずに寝た。湯田では復同窓生の方が出迎へて下さつた。忍びやかに野面を伺つて来る黄昏が、次第に近づいて郊外の景色はいよ〜愛でられた今夜の宿は驛から近くであるか狭いので困つた。

六月四日

晴天

朝早くからツツ〜いふ笑ひ聲に、目を開いて見ると、皆の視線が私に注がれてゐる。何だかきまり悪くなつて、よく見れば押入の中に寝てゐる。自分ながら可笑しうなつてそこ〜の體で逃げ出した。

停車場で師範学校の興水先生は態々見送つて下さつた又それに菓子も一人〜にと下さつたので感謝して戴いた。發車の合圖と共に汽車が動き出した時。先生に「さうなら有難う御座いました」とお別れしたのと一緒に一歩〜山口の地にさらばした。長門峽驛から下りて、絶勝を探つた。首歌の青葉若葉が、音たて、流れる清水に映つて美しい。瀑布となり、或は色瀬となり、或は深淵となり、鋭く緩く岩のなすまゝになる水は可愛い。

斷崖絶壁の岩が根が、突き立つてゐる様は勇敢であるが、又團子を集めた岩も、一趣あつて捨て難い。湯の瀬までは此の様な景色を繰返した。しかし湯の瀬の手前は全く長門峽の特色を持たず、殆んど他と違ふ所はなかつた。補習科、本科第四學のお留守番の方も、昨日から来て居られるとの事を出迎へて下さつて嬉しかつた。湯の瀬で空腹を持參のお辨當て満した。此處で暫く休憩した上、再び長門峽の絶壁奇峰を賞した。猿溪の瀑布は實に峽中の一大絶景である。清流に足を洗ひ、水の調を聞くとは何と愉快な事ではないか。空は縁に輝き、地は眞白に私語く。

切籠切窓の壯絶な景も又逸すべからざるものであらうこれより數里、巨岩怪石水中に横はり、青潭所々に湛へ

て、風景亦捨て難い所を右手に見て、困難な道を行けば  
 しばらくにして高瀬に出る。此處で待ち合せ十一隻の舟  
 で、阿武川下りをした。後になりつ、前になりつして、  
 歌吟することの楽しさ嬉しさ。舟山に衝きあたつては開  
 け、回轉しては行く。暮色天地を蔽へば、三ヶ月出で、  
 微笑み、汀には螢火飛び交ふ。かくして膏を流したる如  
 き橋本川に舟を止め、上陸してなつかしい故郷の地を踏  
 んだ。出迎へて下さつた先生方に感謝し、母や妹達と打  
 ち連れ立つた家路に急いだ。

あゝ待ちに待つた修學旅行も無事に済んだ。願はは四  
 泊五日間、常に日和であつた事は第一に喜ぶべき事であ  
 つた。次に博多と二日市と山口とを比較して一番繁華で  
 あつたのは博多であつたが。人情から言へば二日市が頗  
 る人情美に富み山口はこれに似た。私共學生として得  
 る事が多かつたのは山口、博多の九州帝國大學、水族館  
 などであらう。又興味多かつたのは阿武川下りが一番で  
 又一の坂を越えた時は言ひ得ぬ嬉しさがあつた。總じて  
 今度の旅行は、短時日に澤山收得する事が出来たのはよ  
 るこびとする處である。

新

詩

### 血色の星

本三 岩武千壽子

はの淡き湯氣の香ひ  
 夏の夕闇にただよふ  
 高き白楊の窓  
 湯にひたりて見入りけり  
 血色の星……

白楊の葉のさら／＼とざわめく  
 もゆる様な……瞳の淺な……  
 彼の血色の星よ  
 せめて亡き君の在所を  
 こそ告げてよ……  
 亡き君のみ魂のしづまる所を  
 彼の血色の星よ



### 親子鳥

本三 藤井藤江

淋しきは我わが性よ

奇しく淋しき我が生よ

優しき母を持つ我は

たゞ一人の母の手に

十五となりぬこの春に

樂しかるべき家庭にも

折ふしきしつ暗き影

思ひ出の糸ひもどけば

悲しき記憶は我が胸に

淋しき涙わが頬に

十と三年のその昔

我の二才の時なりき

杜鵑血になく初夏の頃

父は逝きたり淋しくも

いとしき母と幼き我

老いたる祖母を残しおき

燃ゆる青春空しくも

草葉の露となられけり

やさしき母はその時に

二十四才のうら若き

花も末ある年なりき

若きやさしの母上は

われを頼りに十四年

松の緑の色變へず

守り來られしその操

あゝ貴しや我が母よ

されど無情に吹く風は

尙も呪をやめざりき。

吹きまく風に委せしと

必死にかばふ親子の

かよわき胸くぐりぬけ

呪の毒矢あゝ遂に

祖母の心臓貫きぬ。

残りし我等親子鳥

淋しく泣きぬ抱き合ひて

涙も涸れよ果てとまで

あゝそれすらも數ふれば  
 四年の昔となりけり。  
 されど淋しき冬枯の  
 巡りて來るや憧憬の  
 何も運命と悲しくも  
 折にはふれて母上の  
 露の涙の宿る時

四度の春秋めぐりたる  
 春音づれば花は咲く  
 野邊にも似たる我が家に  
 樂しき春はとも何時ぞ。  
 世のなりゆきに委せども  
 両の險に悲しみの  
 我の心もいつ暗し

浮世の涙は荒れれど  
 翼は折れし親子鳥

浮世の風は強けれど  
 心はぬれし親子鳥。

### 一一題

本科四年

井上ミッコ

蚊やり火の煙  
 暮れ行く夕べの静けさ  
 うるみたる  
 蚊やり火の畑き煙は  
 静やかに  
 眠れる夕顔の花

棕櫚の木の根に沈めたり  
 煙の中にきこゆるは  
 いとゆかしき玉琴の音  
 つかれたる袖乞の唄.....  
 はのかなる雲の夕映るは  
 刻々に消え行きて  
 農家の窓に夜をみつむる  
 つめたき灯はまたきこめぬ  
 暮れ行く夕べの静けさ  
 蚊やり火の煙の香は  
 寂しくも又なつかしく  
 少女の胸にしみ込みむ

じいじいせみ (童謡)

實二 下井 志都子

じいじいじいじい  
 お庭の大きな青桐の  
 日がな日ねもす  
 なにが悲しか  
 じいじいじいじい  
 親がないのか  
 じい蟬  
 ひーろいお家で只一人  
 鳴きあかす  
 じい蟬  
 じい蟬  
 子がないか

色も香もうすき野いばらいとほしみ  
 立ち去りかねつ夕ぐれの丘  
 好みます花にはあれと枕邊に  
 あまりさびしき白ばらの花  
 無邪氣なる妹と二人窓により  
 葩蕉にそとく雨をみるかな  
 うら若きおどめの姿そのまゝに  
 咲きいでにけり 姫百合の花  
 黄なる花夕べの野路にただひとつ  
 月をまらつゝ ゆれて 咲きけり  
 君いはす我も語らず川の邊に  
 夕べ 淋びしく 鐘の音をきく  
 よひくにつばみをやぶる月見とさ  
 つきの出ぬ夜をあはれふかしや  
 空想の世界にまさる美しく  
 偉大をみよと 夏のくも湧く  
 いましたがた日は山の端に入りけり  
 志都岐の山に夕榮のして  
 さざ波のあやなる度にかげゆらぐ  
 阿武の川瀬にうかぶ月かな

日がな日ねもす  
 お前の名の様  
 なつて悲しか  
 鳴きあかす  
 ぢいさんに  
 じい蟬



和歌

手帳の中より

本二 齋藤貞子

山里をまばらにめぐるさこの灯の  
 夕霧たてば淡くにじみぬ  
 いつまでも瞳とさして降る雨の  
 青葉にそとく音をきくかな  
 夕暮はさびしかりけりガラッ戸に  
 あめにぬれたる道のうつれる  
 いきすれば若葉のみどり胸にしむ  
 心地よきかな 初夏のあさ  
 うるはしき物語などしのばせて  
 森の夕べをはたるとふかな

やすらげく眠りし妹のおもかげを  
 まどよりさすや 夏の夜の月  
 黙しつゝ小石けりつゝみち行けは  
 心さびしきひぐらしのこゑ  
 露しげき野の細路をさまよへば  
 涙ぐましき夕空のいろ  
 みちの邊に小さき花の咲きてあり  
 つむはいとほしふとゆすりみぬ  
 青じろきあかり静かにゆらめきぬ  
 なみだくみつゝ 祈るひとみに  
 國のためつくせし御霊まつりたる  
 長添山をなつかしみ見る  
 いもうとと二人たざれり野のみちを  
 悲しき笛の音をはたづねて  
 夕ぐれの沈み行くのいたすめは  
 たゞわけもなく涙ながれき  
 夢のぞうすき灯かげのながれけり  
 雨ふる夜の人絶るしまち





杵の音やらするじやろう  
可愛そうな白兔

### 一つ星

本三

藤本 マサ子

曇つた御空の一つ星  
たつた一人で淋しかる  
あらく星が泣いてます  
たつた一人で泣いてます  
わたしは星にさゝやいた  
友もない星唯一つ  
私度も一度問ひました  
私はこうして何時までも  
私は一人で泣いてます  
次第々々すれゆく

東の端の一つ星  
誰が忘れた瞳でしよ  
白銀の涙こぼしつゝ  
星に歎があるでしよか  
星よ何なげく  
深い憂に沈んでゆく  
すると星の申すやう  
私の生のある限り  
星は其の後答へ得ず

### 萩のお舟

お庭の隅の白萩の  
萩をお舟と思つてか  
かいかじもないお舟  
すると東の御空から

上に乗つてゐる白露は  
静に〜乗つてゐる  
お舟はちつとも動かない  
赤い太陽が顔出した

お舟に乗つてる白露は  
そつと上つて行きました  
余りお舟がおそいから  
お舟をおいて行きました

### ざくろの木

實二

横山 アヤ

いれつく暑さも知らぬ様  
裏の小庭のざくろの木  
みどりのおべっちゃんを着て  
わかいお顔で笑つてます

### 人形のお舟

本四

羽仁 素子

散つた〜木蓮の花が  
此の花一つ取つて行き

散つた〜木蓮の花が  
大きな白い花びらよ  
人形のお船にしませうよ

散つた〜木蓮の花が  
大きな白い天鵝絨の

散つた〜木蓮の花が  
島から渡つてこの人形  
お船に乗せてやりませう  
さあ〜乗せてあげませう

散つた〜木蓮の花が  
上手に船を動かして

お庭のお池でお遊びよ  
おべっを濡らさずお遊びよ

### 雨の夜

シヨボ〜〜と  
空は黒くて

雨が降る  
何も見えない

圓いお月さんも  
今夜は一つも  
お星さんも  
見えない

きつと今夜の雨で  
雨よやめ〜  
濡れたのよ  
早くやめよ

作夕のまんまるい  
も一度見たいな  
お月さんを  
お星さんも

### しづ〜

本四 小茅 マキ

雨が降る〜ポタポタと  
大きな粒で豆のやう  
お池をちたそなたまは  
段々大きな輪となつて

どう〜岸につきした

### 風鈴

實二

坂本 勝子

チリン〜チリン。  
なせにいつも〜鳴いて居る。  
涼しい風が吹いてから。  
私を、かうしてチリン〜。  
それに爺さん婆さんは。  
見てよるこんで笑つて居る。  
それで、わたしはチリン々々。

### 雷

ピカ〜ゴロ〜なにがなる。  
雲が怒つて火を出した。  
真赤な火の玉いくたひも。  
山へ響くがゴロ〜と  
水の子がハラ々降つて来て。  
農夫や子供に飛んで行く  
犬まで後から走つて行く。  
ゴロ々々ガチャ々々。  
耳をつむして恐れる子供。

### 校外會員文壇

▲折にふかれて 田中 靜子(舊姓桂)

大聲に何か叫びて立動く

漁夫の面にかゝり火の映ゆ

榮しげに若き男女の盈廬

風も涼しき望月の宵

### 追憶

椿 ます子

山深き森の彼方に一しきり

ひぐらしなき夕べ淋しも

終日を都の便り待ちわひて

今日も淋しき夕べとなりぬ

月を見つ星を眺めてありし日の

寮のくらしを忍ぶ我が身よ

泣くなよと慰め給ふ母上の

眼にも涙の露はありけり

(祖父のみまり給ひし日)

▼校外會員文壇を設けますから、どうぞ多数

御寄稿下さいませ希望いたします

### 本校記事

大正十年九月より十一年八月まで

大正十年九月一日第二學期始業式を舉行す。

九月三日 皇太子殿下には歐洲御見學を終り給ひ、本日

御歸朝あらせられるにより、午前八時より講堂に於て

奉迎に關する講話を行ひ、全九時校庭に於て遙拜式を

舉行し、尙全十一時十五分東宮御所御着の時刻を見計

らひ、春日神社に參拜す。

九月十三日 乃木大將夫妻殉死の當日に付、終業後講堂

に於て記念會を行ひ、生徒の所感を話さす。

十月四日 鐵道大臣元田肇氏來萩せられ、翌五日出發歸

京せられるので、五日には職員生徒一同椿町に至りて之

十一月十五日 堀江先生、神奈川縣横須賀高等女學校へ

轉任に付告別式を行ふ。

十一月二十一日 松陰神社秋祭に付職員生徒參拜す。

十一月二十二日 筒井本縣視學、山本本縣技手來校し、

本校施設狀況に關して調査をせられた。

十一月二十四日 堀上ヨシ先生の就任式を行ふ。

十一月二十八日 天皇陛下の御病氣久しく御平癒になら

せられざるため 皇太子殿下には帝國憲法第十七條皇

室典範第十九條の規定により二十五日の皇族會議及樞

密顧問の議を経て攝政に御立遊ばされたことについて

齋藤校長講話をせられた。

十二月二十四日 第二學期終業式を舉行す。

十二月二十五日より翌年一月七日まで冬季休業

大正十一年一月一日 新年拜賀式を舉行す。

一月九日 第三學期始業式を舉行す。

一月二十一日 臨時郡會出席中の郡會議員一同は郡長及

郡書記數名と共に來校視察せられる。本校に於ては生

徒の手に成れる晝食を差上げた。

二月三日 公爵元帥山縣有朋閣下 本月一日午後一時三

十分薨去せられしに付て、本校よりは 同公爵家へ弔

電を送つた。

を見送りす。

十月六日 春日神社秋祭に付職員生徒一同參拜す。

十月十四日 午後一時より鐵道開通五十年記念講話會を

開き齋藤校長より鐵道開通及其後の沿革、鐵道事務等

に關する話をせられた。

十月十五日 志都岐神社秋祭に付職員生徒參拜す。

十月十七日 第八回同窓會を開催す。

十月十九日 業後食堂に於て、本年度養蠶當番を勤めた

る本科四年實科三年の生徒に對して慰勞會を開く。

十月二十三日 第五回運動會を開催す。

十月三十一日 天長節祝日拜賀式を舉行す。

十一月三日 開校記念式を舉行し、記念菊花會を催した

十一月五日 齋藤校長は京都市に於て開催の全國高等女

學校長會議へ出張の爲め、本日出發し、十二日歸校

十一月七日 農商務省技師山中省三氏東京家庭製作品獎

勵會事務田村松枝氏其他同會の柴田、田村兩氏及本縣

技手宮崎宗十氏來校せられ山中田村兩氏の家藝手藝に

關する講話、田村、柴田、田村三氏の實技演示等があ

つた。

十一月十一日 公爵毛利元照閣下は南園館にて開催の懷

恩會へ臨席の爲め來校せられた。

二月九日 本日は故山縣有明公の國葬當日に付普通授業を廢し、午前九時より講堂に於て齋藤校長より、公の生前の勳功につきて講話をせられた。

二月十一日 紀元節拜賀式を舉行す。

二月十六日 郡會議員峠内町村長新聞記者、郡長、郡會參與員及書記の方々來校せられた、本校に於ては午後二時生徒の手に成れる洋食の饗應を出した。

三月二日 山口高等學校講師ドクトル今津明氏の來校を機とし、ラヂオに關する講話をしてもらつた。

三月十日 陸軍記念日に付き記念講話會を開く。

三月十九日 卒業生一同は作法室に謝恩會開催。

三月二十日 本科第二回、實科第十回卒業證書補習科第九回修了證書授與式を舉行す。

卒業生數

本科卒業生

四十八人

實科卒業生

四十九人

補習科修了生

一〇人

受賞者

知事より表彰を受けたるもの

操行善良學力優秀 本科 大和 直子

郡長より表彰を受けたるもの

操行善良學力優等

本科 山縣 カツ

全 實科 窪田 ヨシ子

學校長より表彰を受けたるもの

操行善良學力優等 補習科 田坂 クリ

全 實科 岡 イセコ

操行善良 本科 笹井 ヒナ

成績優良 本科 大藤 アイ

全 全 齊藤 貞子

全 全 大田 克子

全 全 鈴木 フツ子

全 實科 平田 タキコ

全 全 井上千代子

成績の進歩顯著なるもの

三ヶ年皆勤者 二三名

一ヶ年皆勤者 四名

級長及副級長 八名

本日 中川知事閣下より賜はりし訓辭は左の通り

諸子並ニ本校定ムル所ノ課程ヲ了ヘ卒業證書ヲ受ク

ルノ榮ヲ荷フ、諸子ノ喜悅察スヘク本官亦深ク欣快

トスル所ナリ

抑々國民風教ノ振興社會道義ノ維持ハ是ヲ婦人ノ健

全ナル思想ト崇高ナル信念トニ俟タサル可ラス殊ニ

方今社會萬般ノ情勢著シク變化シ來リ爲ニ文化生活

上益々婦人ノ力ヲ要望スルコト多キヲ加フ 隨テ國

家社會カ教養アル婦人ニ期待スル所寔ニ大ナルモノ

アリ此ノ秋ニ方リ諸子多年螢雪ノ功成リ茲ニ其ノ業

ヲ卒フ諸子前途ノ任ヤ重シト謂フヘン凡ソ婦人ノ特

性ハ優麗温雅家庭ノ人トシテ崇高ナル情操ノ所有者

タルニアリト雖亦一面堅忍強固萬難ニ耐フルノ意志

ト實力トヲ備ヘサルヘカラス諸子宜シク本校ニ修得

セル所ヲ根幹トシ虚榮ヲ忌ミ浮華ヲ戒メ更ニ品性ノ

修養智能ノ練磨ニ易メ尙特ニ身體ノ健康ニ留意シ以

テ邦家社會ノ希望ニ副ハンコトヲ望ム

大正十一年三月二十日

山口縣知事從四位勳三等 橋 本 正 治

三月二十三日 石橋先生東京美術學校彫刻科入學のため

退職せられるので告別式を舉行す。

三月二十四日 修業式を舉行す。

三月二十五日より四月七日まで春季休業

三月二十七日より全三十日まで四日間入學試験を行ふ。

三月三十一日 堀上先生退職せらる。

四月八日 新學年始業式を舉行す。

四月八日五十崎和先生、西村キヨ先生の就任式を擧げた

四月十日 入學式を舉行す。式後新人生に對して生徒心

得を説明し、父兄保證人に對して種々の打合せをした

四月十一日 柳原良助先生の就任式を舉行す。

四月十二日 陸軍砲兵中佐玉木正之氏の講話があつた。

講話の後大將の遺墨記念品を見せて下さつた。

四月二十二日 本校創立記念式を舉行した。式後生徒學

藝會を催した。

四月二十七日 本縣知事橋本正治閣下來校視察せられ、

生徒に對しても訓話があつた。

四月二十九日 關東廳長官公曾山縣伊三郎閣下來校せら

れた。

五月三十一日 本科四年、實科二年の生徒七十九名は中

野、池上、世良三教員に引率せられて、午前六時出發修

學旅行の途に上る。午後四時半山口町に着して宿泊す

翌六月一日は山口町見學後汽車にて下關に至り、五十

崎教員に率ゐられ、汽船にて來關せる補習科本科生六

名と相會し、福岡市に到りて宿泊す。翌二日は福岡市

箱崎町を見學し、汽車にて二日市に至り、それより太

宰府を見學し、二日市湯町に宿泊す、翌三日は汽車に

て歸途に着き途中香椎宮參拜、門司下關見學、山口町



に歸り宿泊す。翌四日は汽車にて長門峽驛に至り、それより長門峽の探勝をした。此峽中に出迎かたぐ探勝に來られた齋藤校長、伊藤荒川兩先生及び補習科、本科四年の生徒二十名と相會し、高瀬より川舟に分乘して午後七時に無事橋本に歸着し此處で解散した、よはは有益な旅行であつたが、精しきことは本誌の文の圖に 旅行記参照

六月一日 本科二年及一年の生徒二百名は關田、荒川、柳原森脇西村藤田の諸先生に引率せられて萩町及近郊の史蹟、工場等を見學した。

六月二日 本科三年實科一年の生徒百名は伊藤、關田、安野三先生に引率せられて越ヶ濱へ修學の遠足をした六月十日 時の記念日に付齋藤校長より時間尊重に關する訓話があつた。

六月二十日 本縣視學熊野隆治氏來校して本校の體操を視察し尙全生徒に向つて一場の挨拶をせられた。

五月一日 春蠶日本種蠶量一匁、日歐交配種一匁を掃立て、安野教員指導の下に上級生之を飼育す、六月八日頃上簇を了る收購九匁目、萩市場にて最優等品の成績を得た、尙昨年九月一日秋蠶一匁を掃立てたが、これも好成績であつた、桑葉は本校桑園のものにて餘る

### 本會記事

大正十年 九月 より

大正十一年 八月 まで

#### 一、第八回同窓會

大正十年十月十七日第八回同窓會を開催した。左に一會員のものせし記事を掲げませう。

神嘗の佳辰にあたり我同窓會は會催せられぬ。この日なつかしき同窓生諸姉は漲る歡喜と希望とにみちて集はる、時は好し十月十七日秋の中つ方、清々しき朝の空氣に吹かれつ、校庭に集り、我等の精神は神聖化されたるの感ともよはず。定刻の午前九時となりたれば理科室に於て開會せられぬ。この日母校の先生十餘名も御臨席下され我等は溢るゝばかり感謝の念にみちぬ校長先生より本會に對する希望を述べさせられ、終りて一同君が代を合唱して式を終る。やゝありて幹事師井さんの會務報告あり。これより本校の母とも仰ぐべき故久原文子刀白及び逝ける先輩學友諸姉の靈壇に對して焼香禮拜すその昔共に手を取りて學びしことを回想して感涙にむせびぬ。其の後伊藤先生の「日常生活

程である

七月十四日より全二十日まで菊が濱に於て水泳教授を開設した、毎日午後一時より二時間之を行ひ、講師として神戸市學務課在勤の荒川蕨龜氏を招聘す、本年は成績殊によるしく、二三間位泳げないふものは一人もない程で五町以上十町を泳いだものが二十餘名も出來た

七月二十日 第一學期終業式を舉行した  
七月二十一日より八月三十一日まで夏季休業  
學科受持(括弧内は科外)

修身	校長先生 (茶儀生花) 上利先生
國語	中野先生 (筆曲但寄宿舎に限る)
國語習字	池上先生
歴史教育	伊藤先生
理科	關田先生
體操	荒川先生
圖畫	柳原先生
裁縫	森脇先生
家事	上野先生
手藝	西村先生
國語、數學、農業	平崎先生
體操、歴史	安野先生
裁縫家事作法(按摩)	長澄先生
歴史、地理	世良先生
國語、音樂、作法	藤田先生
英語	安永先生
	中村先生

と微菌」と題する御講話あり。醸造業諸般に互りて須要なる事項及び微菌必ずしも恐るべきにあらざること醸造工業に於ける各種微菌の貴重なることより進んで微菌の人生に對する益と害と及び微菌繁殖消滅の話等我々婦人の生活の上に密接の關係ある有益の智識を得せしめられたり。次いで中野先生壇上の人となりたれば「最近の思潮に關する考察」なる題下に御講話の勞を取らせらる。これは時代の要求上婦人と雖も複雑なる現代の思潮に對して正確なる見識を有すべきことにつきいて有益なる御論なりき。時恰も正午となりたれば一同緊張の眸より團樂の眸と變り、打くつろぎて中食を待つ。この間余興係の心配に係る蓄音機の發聲あり間もなく津田さんの周到なる心配によりて晝食準備も整ひ、各々お辨當を携へて或は幾年ぶり或は幾月ぶりに共に共々お辨當の中食をなす。中食後暫く休憩。すこの間適宜の地に集ひて相語るものあり、三々五々打連れて散歩するものあり、各々思ひ思ひに過去の追懐にふけりて時の移るも知らざりしが、いつしか二時とはなり午後の豫定の第一歩として協議に入る。先づ本會を開催すべき時期より始まり、各自意見發表の結果同しく秋季と定まりぬ。次に服裝問題に入る、

とかく華美虚榮に流れ易き若き婦人の會合なれども同窓會は服装會にあらキ精神肉の會なり、この意を各自ら解すれば決して服装制限は難きにあらキ。眞摯なる一同の意見によりて纏る。次に十周年紀念事業に移りぬ。こはもごより多額の命力を要する事なれば短時間にては協議難らず、後日の問題として殘されぬ。それより紀念撮影ありて余興に入り、同時に會より茶菓の饗應あり、諸先生よりも澤山の柿の御馳走あり。先づ補習科生の活人畫ソープレンあり、その思ひ付きの巧妙にして變裝の美妙なる、思はず賞讃の聲を禁せざらしむ。次に福引あり、考案奇抜にして一同興じ合へり。それより、にわか茶目子の誕生等續々と出演ありいづれも上出来にして喝采を博せり。かくて興味は津々としてつくるを知らず、いつまでもかくてありなると思へど、いつか訪るゝ夕暮の風に又來ん年の樂しき日をば契りつゝ名残りの袂西東、飽かぬ別れを告げにけり——實に樂しき會合にてぞありたりける。



二、運動會  
大正十年十月二十三日第五回運動會を開催せられた。午前八時開會式を挙げ直ちに左記番組の通りの運動競技にうつつた。午前十一時既に番組半をすましたから暫く休憩して晝食をなし、午後〇時十分頃より、また運動を開始したが豫定以上に進捗し、間々、双葉幼稚園の遊戯を三回も交へ、他學校生徒の競技も加へなごせしも、午後四時には滞りなく開會式を挙げた。本日は秋晴の好天氣で來觀者も四千人に達し頗盛會であつた。

第五回運動會順番

- 一、開會式 全校生徒
- 二、體操 本一梅
- 三、二百米突競走 本一菊
- 四、福拾ヒ 本二
- 五、陸上ホーリレー 本一
- 六、栗拾ヒ 實一
- 七、二人三脚 本四
- 八、啞者ト盲者 實三
- 九、二百米突競走 本一菊
- 一〇、メキシコボール 補本四
- 一一、綱越ボール 實三

- 一一、糸巻キ競争 本三
- 一二、二百米突競走 本二
- 一三、福拾ヒ 本一梅
- 一四、地球送り 本一菊
- 一五、二人三脚 本二
- 一六、頭上玉送り 實一
- 一七、體操 實三
- 一八、ハードルリレー 本四
- 一九、二百米突競走 實一
- 二〇、潮干狩 本一菊
- 二一、ボール突キ 本一梅
- 二二、地方別リレー 地方別選手
- 二三、對列フットボール 本三
- 二四、二百米突競走 本四
- 二五、シャーマン式啞鈴體操 本二、實一
- 二六、チェボガー(ダンス) 本一、菊、梅
- 二七、啞鈴轉ガシ 實一
- 二八、バスケットボール 補本四
- 二九、旗體操 本一、梅、菊
- 三〇、抽籤競争 本二
- 三一、潮干狩 本一梅

- 三三、一分間競走 本四
- 三四、三拍子行進 本二實一實三
- 三五、ボールショットイングリレー 本一菊
- 三六、二百米突競走 本三
- 三七、體操 本四
- 三八、千鳥競争 實一
- 三九、障礙物競争 實三
- 四〇、肩越ボール 本二
- 四一、半輪體操 實三
- 四二、オール、アツプリレー 本一梅
- 四三、リーアザフラックス(ダンス) 本三本四補
- 四四、二百米突競走 實三
- 四五、難所巡リ 本三
- 四六、來賓職員競争 本三本四
- 四七、體操及ダンス 本四補
- 四八、同窓會員競争 本四補
- 四九、體操(薙刀) 實三
- 五〇、キャプティボール 本三
- 五一、珠竿玉突キ 本三
- 五二、スルウエンドキアツチリレー 本四補
- 五三、他學校生徒競争 本四補

- 五四、級別リレー 級別選手
- 五五、體操 全校生徒
- 五六、閉會式

三、卒業生送別會

大正十一年三月二十日、卒業式後午後二時より食堂に於て卒業生の送別會を催した。先づ在校生總代の送別の辭につづいて卒業生總代の謝辭があつた。それから在校生の餘興十數種及教員の詩吟、謠曲、唱歌等があつて午後五時閉會した

四、學藝會

本年四月二十二日、本校創立記念式後午前九時より左の組によつて、學藝會を開いた。

- 一、開會の辭 補 窪田ヨシコ
- 二、習字(大字) 本四 池上キク 本三 藤井藤江
- 三、朗讀(豫習に就いて) 本二 藤屋ハル子
- 四、音樂(子守歌春の曲) 本二 椿シヅ子 石川ナツ子
- 五、圖畫(橙躑躅の寫生) 本三 河村信子 長井アヤ子
- 六、音樂(露花の春) 本三 惠美須屋ツル 河村ユキ子
- 七、音樂(春潮) 本二 椿シヅ子 石川ナツ子  
本三 惠美須屋ツル 河村ユキ子

五、賀田氏葬儀會葬

七月十二日 本校へ育英資金として多大の金を寄附せられたる賀田金三郎氏の葬儀を萩町海潮寺に於て營まれる齋藤會長は之に會葬した。

六、故久原文子刀自法會に就て

七月十三日昧内各宗寺院の發起によつて萩町別院で故久原文子刀自の七回忌法會を營まれるによつて、齋藤會長中野副會長之に參列し、尙補習科生徒も參拜した。同日我校から兵庫縣武庫郡本山村の久原家へ宛て、左の電報を打つた。

至厚院様七回忌に當り謹んで敬意を表す  
これに對して久原家より左の返電が参りました。

電拜謝ス

七、同窓會基金募集

大正九年八月 第七回同窓會の決議の基いて、左記の通りの基金募集趣意書と募集規則とを會員に配りましたら續々と宿附のあつたことは前号に掲載しましたが、其後もだん／＼と寄附がありました。次に其金員及氏名を掲げませう、尙續々寄附をして下さいませす様に望みます。

- 八、朗讀(自作英文日記) 本四 石津存子
- 九、談話(鳥類の形態と習性) 本二内藤靜江 堀見由久代
- 十、圖畫(黑板畫ひさかり) 本二竹内芳子 久志アヤ子  
松尾豐子

圖畫(黑板畫 獸類) 本二 羽仁敏子 高橋ミチ子  
神代照子

- 一一、理科實驗(蓄音機に就て) 補 大藤アイ
  - 一二、圖畫(沒骨法柳、菊、竹) 本四 鈴木美代子 田總ユキ  
井上ミツコ
  - 一三、理科實驗(綿布と毛織物との化學的鑑別法)
  - 一四、箏曲(千鳥) 本四 安藤クリ 實二石井喜美子
  - 一五、談話(品性の修養) 本四 中村春子
  - 一六、講評 齋藤 校長
  - 一七、閉會の辭 本四 小川ミツ子
- 生徒の自動的に任せてやらせたが聊かの淀みもなく進捗し、出演者の成績も良好で、よほど上出来の會であつた。

同窓會基金趣意書

同窓相親しみ、目睦むは自然の人情である。一樹の蔭に宿り、一河の流を汲むさへ他生の縁といふに、數年窓を同じうした者が、舊を懐ひ、新を語りて喜ぶは萬人共通で、而も人生に於ける暖味である。たゞひ身は異境にあつても、一片の音信を得た時、誰しもいひ得ぬ靈感にうたれるであらう我等同窓會は、總會の開催せられること既に七回會員亦既に六百有名餘。校運と共に此會も年々隆昌となつてゆきつゝあるは、眞に慶賀に堪へない所である。今や此會は會員相互の舊情を温める機關たらしめると共に、心身の修養を圖るべき所まで生立つて來た多量なりとも社會の爲に貢獻する機關たらしめようといふ積極的な計畫を立てるべき域まで進んできた。のみならず日新の世は吾等の油断をゆるさぬ。少しでも怠つて居ると時勢に遅れることを免れない。是を以て總會當日又は夏季休業の際などに、本會主催の講習會の開催若しくは有益な圖書を巡廻せしめて會員相互の堅實な修養を圖り、日新の知見を廣めると共に、一般の婦人もなるべく之に加はることを得しめたならば、此會も益有意義なものとなるべきである。加之老いたる人を慰めること

や、世のあはれなものを助けることは、婦人のなすべき  
行の中で、最も尊くて奥床しいものであれば、此會の事業  
として甚だ適當なことである。年々一回催す總會も會費  
の爲に出席に影響するやうなことがあつては誠に残念で  
ある

以上述べたことに對する經費の外、會員の近況調査や、  
通信などにも多少の經費を要する、將來同窓會をして益  
々發展せしめるは、相當の經費を支出することはやみが  
たい事情である。此會の進展と時務とは我等の奮起を促  
してやまぬ、今の時は躊躇逡巡して居るべき時でない。  
これが本會に基金を蓄積して其活動を大ならしめやうと  
する唯一の動機である。近時會員中既に此議を提起する  
ものあり、依つて本年八月の總會に於て、之を會員に圖  
りしに、萬場一致を以て可決せられる所となつた。乃が  
當日出席せられぬ同窓會員諸姉や、江湖の諸彦の同情に  
訴へて、其賛同を乞ふ所以である。

大正九年八月

山口縣萩高等女學校同窓會

同窓會基金募集規則

- 一、基金ハ其利子ヲ以テ同窓會ノ事業ヲ助ケ其發展ヲ圖ルモノトス
- 二、基金ハ同窓會員並ニ一般篤志者ノ寄附ニ俟ツモノトス
- 三、基金ノ寄附ハ五拾錢以上トス  
但、幾回ニ分納スルモ妨ケナシ
- 四、基金ノ寄附ハ直接萩高等女學校ニ申込ムカ又ハ各區支部幹事ニ申込ムモノトス  
但、遠隔地ニ在ル人ハ山口縣萩高等女學校（振替貯金口座番號福岡一一八一四）ニ拂込ムヲ便トス此場合ニ於テハ裏面通信欄ニ同窓會基金寄附ノ旨記載ヲ要ス
- 五、基金寄附者ノ氏名並ニ金額ハ南園會報ニ掲載スル外同窓會基金寄附臺帳ニ登録シ永ク其芳名ヲ留ムルモノトス
- 六、基金ノ利子ハ同窓會ニ使用スル外毎年利子ノ十分ノ一ヲ元金ニ繰入レ其増殖ヲ圖ルモノトス
- 七、基金ノ保管ハ同窓會長之ニ當リ之ニ關スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

金拾圓宛

倉田 靜子

小池 壽子

椿 マス子

金五圓宛

藤野 カネ

松浦 クラ

齋藤 文子

金參圓宛

福永 フサ

阿武 八重子

伊藤 芳子

金六圓七拾八錢

伊藤 雪江

伊藤 通利 外二名

山田 ミツ

金貳圓宛

片山 三知子

堀上 ヨシ

小野 時代

金壹圓五拾錢宛

山中 松子

三上 文子

田村 良子

金壹圓宛

古川 末子

兼重 龜子

藤田 綾子

金七拾五錢

金子 喜勢子

河野 千世

小川 ッチ

金七拾五錢

堀 文子

早川 ハツ

椋木 アサ子

金七拾五錢

江口 辰二

有馬 淑子

高洲 美代子

金七拾五錢

石川 文子

落合 敏子

山崎 貞

金五拾錢宛

田坂 文子

田坂 クリ

累計金參百貳拾四圓八拾八錢也

附記 本基本金は卒業の際南園會校外會員寄附金壹圓の分とは別途のものです

八、南園會基金

八月末南園會基金高貳千壹百四拾壹圓七拾六錢也

九、大正十年南園會

歳入歳出決算

歳入ノ部

七〇四、一〇〇

會費收入

九三、三八〇

財産收入(預金利子)

二七三、八〇〇

寄附金

三一、一七八

前年度繰越金

一、一〇二、四五八

合計

一、一〇二、四五八

歳出ノ部

南園會費

一三八、四六〇

學藝部

二二四、〇九五

運動部

二二六、二二〇

會報部

二四一、〇三〇

庶務部

一〇、三九〇

會計部

本校開校十周年紀念

祝賀費積立

南園會基金戻入

南園會基金編入

合計

差引金五圓拾八錢三厘  
以上

四、〇〇〇  
二〇、〇〇〇  
一九七、〇八〇  
一〇九七、二七五  
大正十一年度へ繰越

一〇 會 告

一、會報印刷費送付について

拜啓昨年發行の會報に於て申上候通り近年諸物價騰貴のため會報印刷費も壹冊約貳拾五錢を要する程に候處校外會員會費(卒業の際一人)の利息は僅に一八一ヶ年分約五錢餘に過ぎず候に付其不足額は他より之を補はざるべからず。然るに校外會員逐年増加し會誌發行の費金隨て膨大致様に付本會現時の經濟狀態にては到底未く支へ得べき處に無之候間本會の將來を顧慮して止むを得ず本年發行の分より校外會員會費金壹圓完納者にして會報配布を希望せらるゝ人には實費金貳拾五錢を以て配布することとし其の希望なき方へは本會記事のみを配布する

篤志者芳名

大正十年九月より大正十一年八月まで

一 本校へ篤志を以て寄贈せられし  
金品並に御芳名

- 金壹萬圓 育英資金トシテ 東京 賀田金三郎氏
- 鏝 剝製標本 壹個 萩町江向(現住馬來半島) 能美 猛氏
- 電氣銅 壹個 萩町御許町 平島 公平氏
- 大木耳剝製標本 壹個 朝鮮京元線東豆川 野田 秀輔氏
- 山口照會史三冊 地方經營小鑑一冊 長門公教史一冊 岡村 勇二氏
- 大原幽學 一冊 都濃郡長 山口屋シナ氏
- 南洋産大蠟錫剝製標本 壹個 萩町熊谷町(現住馬來半島) 山下 山口屋シナ氏

ことゝ致し候

尙次号會誌希望の方は印刷費として金貳拾五錢を大正十二年四月末迄に御送附相成度右御希望なき方へは本會記事のみを配布致すべき豫定に御座候御送金は成るべく振替貯金にて御願申上候

振替貯金口座 福岡一八一四番  
如入者氏名 山口縣萩高等女學校  
以上

大正十一年十月

山口縣萩高等女學校南園會誌發行部  
南園會校外會員各位

二、卒業生名簿整理について

卒業生名簿を正確に致したいと存じますから御手数ながら添付の「はがき」にそれ〴〵御記入の上明年二月末迄に御發送下さいませ

いかりをしづむる時は世の海の  
浪風とてもいとはざりけり  
心には怒りよるこびありとても  
ふかくたしなみ色に出だすな

二 南園會へ篤志を以て寄贈せられし  
金品並に御芳名

- 債券(農工銀行農工債券額面五拾圓) 壹枚 萩町 竹原安治郎氏
- 金壹百圓 阿武郡奈古村(本校卒業生) 末若ヨシヨ氏
- 金五圓 長崎縣佐世保市 石橋 孟氏
- 金拾圓 補習科修了者 上田 タネ氏 植村マサ氏 大山千代子氏
- 河村クキヨ氏 佐伯清子氏 田坂 クリ氏
- 藤山於菟子氏 椿マス子氏 三好 まつ氏
- 溝部 勝子氏 萩町 江向 堀上 ヨシ氏
- 金五圓 萩町 江向 (舊始中原) 光野 俊子氏
- 金拾貳圓 本科第二回卒業生 口羽龜古氏 鈴木ヒナ子氏
- 金壹圓五拾錢 山縣カツ氏
- 金五圓 阿武郡佐世保村(舊姓中原) 田中 千代氏
- 日本戰史及寫真帳 九冊 東京 河内 信修氏



### 校外會員消息

一月六日朝鮮新義州より(舊姓近藤)

田村 良子

寒さ今尚はげしく存じ候折柄其後誠に申譯もなき御無沙汰に打ち過ぎ何んども御詫の申し様もこれなく候

先々會長様始め會員御一同様にも御揃ひ遊ばしいよ〜賑はしく御榮えさせ給ふらむと嬉しく存じまゐらせ候

扱て先日は御なつかしき會報御送り下され誠に有り難く厚く御禮申上候 早速時の過ぐるも打ち忘れ漏れなく拜見致し候 日に月に御發展の御様子承り誠に御芽出度き御事と御喜び申上候 降て私事も何より心嬉しく喜び居り候私事昨年朝鮮新義州守備隊官舎内に轉住致し申候早速御報知申上ぐべき筈に候ひしも何かと家事に逐はれ

今日まで失禮致もうし候幾重にも御詫もうし上げ候當地は非常に寒さはげしく今朝なと零下二十度といふ内地にては夢にも見られぬ事と一入感じ入候 然し防寒の設備よく室内は却つて凌ぎよく朝鮮のオンドルも斯くやとばかり味ひ申し候支那と朝鮮の境の鴨綠江も只今にてはく

まなく結氷致しとて〜内地にては珍らしき眺と存じ候見るもの聞くもの珍らしく支那人朝鮮人の人情風俗を細々と知る事を得候て誠に面白く感じ申候 先づは亂筆にて御禮を兼ね近況もうし上候 尙南園會印刷費及び同窓會基金として心ばかり振替貯金にて御送り申候間御受取り下され度願上候 乍末筆皆々様御健康を祈り上げまゐらせ候 あら々々かしこ

一月十五日朝鮮釜山より(舊姓渡邊)

野尻 幸代

新春の御慶目出度申し参らせ候 會長様始め會員御一同様には益々御機嫌麗はしく渡らせ候事と遠く南鮮の空より推し上候降つて私も恙なく日を過し居り候へば憚ながら御放念下され度候其の後心ならぬ御無沙汰致し何分悪しからず思召し下され度候私事昨年十一月中旬頃當地へ出稼きの主婦として渡鮮致し候が今迄もなくお伺ひ致し申さねばならじとは存し居り候へども何かと遂に不禮致し候段深くお詫び申し上げ候何卒〜悪しからずお願ひ申し上げ候此度は會報御送り下されお懐かしく拜見致し有難く御禮申し上げ候日日の母校の發展を嬉しく存じ居り候甚だおそれ入り候へども私表記の處へ住居致し居

り候へば御面倒様ながら御變更なし下され度お頼み申し上げ候當地は氣候も風俗も御地とあまり大差なく、たゞ鮮人の習慣として高貴の人の輿で歩くのを今も尙見ること有之候が他は繪や寫真にて見ると變りは之なく候内地人も年に加はり殊に山口縣人最多きとかに候が山口縣と聞けば懐しく存せられ候先は御伺ひ迄時節柄申すも愚かに候へども御身御大切に遊ばされ度候 には南園會の御發展を祈り上げ候

一月廿九日福川村より(舊姓山川)

阿部 八重子

光陰矢の如く高山叢に包まれてねむるが如き春三月をなつかしき母校と別れ候てより早三歳とは相成申候其後は皆々様御恙なう日々御精勵の御事とはるかによろこびまゐらせ候これまでもなう御便りいたさんものと考へをり候へども兼不精の私心ならずも御無禮いたし候事悪しからず御許し下されたく候御なつかしき師の君の御膝下を離れ候て實社會に入れば實に世は大荒波にて進退谷まれし事も多々あり候幸にしてさしたる過もなう日を送り居り候私は母なき家に嫁ぎ始めのほどは家内の模様も判らざは〜困り候へども今は人様の御援助により主

婦として平凡ながら家政を整へをり候間他事御安心下されたく候今後とも精神の修養に心を盡し人様に對してやましき行なき機心に誓ひをり候 幸にして目的を達せば御報恩の一つにこそ考へ居申候 尙又同窓會の基金として平常私の儉約して貯蓄せるものの中より少しばかり振替貯金にて御送附いたし候間御納め下され候はば有難き仕合せ存じ候 先は走り書の亂筆悪しからず思召し下されたく乍末筆ながら皆々様の御健勝と校運の御隆昌を祈り上げ候 かしこ

二月四日大阪府箕面より(舊姓國弘)

有馬 淑子

隆行く駒の足早く、早如月も四日と相成候御寒さいとさびしう存せられ候 其の後は申譯もなき御無沙汰致し何んども御詫の言の葉も御座無候御なつかしき諸先生様には相變らず御健にゐらせられ候由何よりお喜び申上候降つて私事も皆々様のおかげにて當地へまゐり相變らず元氣にて日々家事の手傳ひ致し居候間他事ながら御心安う思召し下され度候先日は又おなつかしき會報おき〜御送り被下誠に厚く御禮申上候早速隔から隔まで一語もあまさず拜見致し日に發展の御様子誠に嬉しく存じ候會報

拜見致し候ては去年のありし事共思ひ出され讀む内に諸先生様やち反迷のお顔或は校舎の有様目前にある心地致しかく認めつゝも學び舎の机にて書く様に存せられ候實に〳〵日月の早きに今更ながら驚き申候 同窓會基金募集の由些少なから小爲替封入致置申候間御受取被下度候何卒お寒さの折柄御皆々様御身おいとひ遊ばされ度願ひ上候 末筆ながら益々母校の御繁榮祈り上げ候 先は延引ながら御禮まで かしこ

一月十八日松江市より (舊姓和田)

山崎 貞

寒中とは申ながら昨今の寒さは一きは身にしみ申候折柄會長様始め會員御一同様にはお變りもあらせられず候や 御伺ひ申上候いつもながらおなつかしくは存じながら筆無性の事とて日々忙しさに〳〵御無沙汰に打過ぎ申譯も御座なく候何卒御許し下され度御願ひ申上候 先日は南園會報御恵み下され誠に有難く厚く御禮申上候 其後ともおなつかしき南の園も日に月に榮る行き、誠に々々御めで度存じ上候かく遠く相隔りながらおなつかしき母校の御様子承るも皆々様厚き御情と有難く拜見致し候次に私事實は昨春秋より當地に参り候當地は山紫水明

にてさながら天然の公園の如く景色よろしく又私の小さき頃居りしなつかしき地にて日々楽しく暮し居候かし山陰の事とて此頃は毎日雨や雪にて半日の天氣もまれにて寒さも甚しき様存せられ候御地も御同様御寒い御事と推し上候先づは平素の御無沙汰の御詫びかた々々御禮まで申上候時節柄御身御大切に遊され度御祈り申上候 かしこ

會誌印刷費と心ばかりの同窓會基金を振替貯金にて御送り申候へばよろしく願ひ申上候

二月十八日 徳山より (舊姓富士見)

福根 ふさ子

厳しき寒さもやう〳〵去りてうららかなる春の空に相成り申候其の後打絶えて御伺ひだに申さず今更何ともおあびの申しやう之無く何とぞ悪しからず御許容なし下され度候さて先日は御親切にも會報御發送下され誠に有難く厚く御禮申上候直ちに拜讀致し日に増し御發展の御様子承り候て此上なき御目出度き御事とひたすら御喜び申上まゐらせ候降て私事過る年の春當家に入籍致しおかげ様にてことなう相過し居候間はばかりながら御心安う思召し下され度候當地には米原校長先生もおはしまし候へ

ばいと嬉しく時々御伺ひ致し候ては御校のおうわさ承りおなつかしく存じ居り候先は日頃の御無音も打忘れ乱れし筆もて御禮にそへ近況御報まで 末筆ながら會長様はじめ皆々様の御健康と南の園の御隆盛とを一重に祈り上げまいらせ候

尚々同窓會の基金として心許り振替貯金にて御送り致し置き候間御受納なし下され度候また 其の際會誌印刷費もついでにて納め申候故會報御發行の際は御發送の程御願ひ申候

二月三日 岡山縣高梁より

(舊姓大賀) 玉木 千代子

寒中とは申しながら今年の御寒さは別してのやうに存せられ申候諸先生始め皆々様方にはおさはりもあらせられず候や御伺ひ申上候降つて私事も當地にまゐり候てより早くも四ヶ月を夢の間に過し申候身体も至つて健やかに土地の様子にも 分なれ候まゝ御安心上に下され度候扱昨年未だに南園會報御めぐみ下されまことに嬉しう幾度となく返し拜見致し申候

有益なるお話をなつかしき同窓の皆様の御様子など承りいと嬉しう存じ申候早速御禮申上べき筈の處つい思ひ

もよらぬ御無沙汰に打過ぎ今更御わびの申上様も御座なく候何卒あしからず御思召しの程念じ上げまらせ候南園會も益々隆盛に相成り候事偏に皆々様の御盡力の賜と深く感謝致し居り候かへり見れば思出多き南の園を後にして御情ふかき師の君やなつかしき皆々様〳〵秋を分ちまゐらせしより花を迎へ月を送りて早や七とせを重ね申候世路の旅路に分け入りてより幾多の變化を重ねられし皆々様には何かと御修養もあそばされしこと、存じ候へども私日一日と退歩するのみにて誠に御恥づかしう存じ候只今はふつゝかなながら一家をさへ居り申候今更ながら身の變化と責任の重大とを感し申候皆様の御發展を伺ふにつけても思出さるゝは逝きし妹にて去年は同じく異郷に會報を得て嬉しかりしと文かき送りし妹も今は永久に歸らぬ旅の人と相成申候ありし日をしのべ又しても亡き母迄思ひ出され申候ことに同窓にて親しかりし満壽子様の御筆には思はず涙にむせび申候今は徒らに悲しむも甲斐なき事にて候へばせめて残るものゝ身体を健康にし意義ある生活致し候はゞ母も妹も喜び候はんかごあきらめ難きことをあきらめ居り候人生朝露の如しごは申しながら母に逝かれ思明けぬ其内妹を失ひてあきらめんとする下より又も悲しう相成候いろいと申上たう候へ

ども今日は之にて筆止め申すべく候御禮の一言申上むとて筆とり様ひしに思はずかへらぬち言と相成候失禮の程何卒御ゆるし下され度候皆々様の御健康と母校の發展を偏に祈り上げまいらせ候  
かしこ

二月十九日 福岡市より

(舊姓倉田) 赤 司 尊 子

やうやう春めき申候折柄會長様はじめ御一統様にはますます御機嫌うるはしくぬらせらるる御事とはるかに賀し奉り候先日は南園會報を御送り下され有がたく受取り申候妹への分を母が先に持参いたし候へば引張合にて會報も間にありて大に迷惑いたし候として今更の如く學生時代がなつかしく夜の更くるも忘れて妹と語り申し候其後學校も改良に改良を加へられていやましに榮行く様を承知いたし之皆一偏に諸先生の御奮闘になるものと感謝に堪へざる次第に御座候今後ますます發展せられん事を祈り上げ候扱南園會報編纂について云々の記を拜見いたし候て誠に仰せの通りと存せられ申し候

さては金五拾錢妹と二人分を御送附申上げ候間次号を御面倒乍ら御惠み下さる様願ひ上げ候又私事都合上左の處に轉居いたし候間左御様承知下され度候福岡市地行東町

木いと多く到る所に見受けられ申し候また果物や野菜の珍らしき物類多く有之候には驚き申し候其の美味なる事格別に御座候城内處々の店頭にすらりと山の如く並べられ候様相眺め候へば食指の動くを禁んじ難く御座候寒中と申し候ても胡瓜茄子豆等珍らしき物も見受けられ申し候私事當地に來り候て未だあまり見廻り申さず候故詳しき事はお話し致し難く候へども少々申し述べ候當臺地には昔城ありし由にて今は只其の當時の城門のみ残り居り候城内には種々なる建物を始め内地人の經營したる商店軒を運ね居り候市街の美事なる事も豫想以上にて官舎は皆木造に候へども會社銀行役所商店皆煉瓦造りのみにて台北市もなか／＼廣きものに御座候稍町外れに一大建築物なる總督府有之構へからして何となく威嚴あり候て心中誠に嬉しく御座候博物館へも一度参り申し候主として地理歴史理科に關する珍らしき物のみにて私又驚き申し候邊りに大なる公園運動場も有之候臺北病院臺灣銀行等大なる物の一に御座候

御正月には汽車にて少し離れし山の上に鎮座し給ふ台灣神社にも参拜し候山の麓には動物園も御座候故其處にていろ／＼珍らしき熱帯地産の動物も見物致し益する所多大に候ひきまた／＼申し上たき事數限りもなく御座候

五番丁一三七何もかも早々御報知申上ぐべきの處産褥にありて心ならずも延引いたし候何卒あしからず御思召し下され度候子供の泣かぬ内と筆もみだれ文も後や先何卒御判讀願ひ上げ申候愚妹よりもくれ／＼よろしく申出で候

二月十日附 臺北市より

野 田 喜代子

御寒さの折折御變りも御座なく候や其の後は御無沙汰のみに打過ぎ候何卒悪しからず御ゆるし下されたく候御伺ひいたし申さねばいづれ心には相掛け居り候へども勝手のみ構へて遂のび／＼に相成り候次第に御座候

私事も御蔭様にて當地に参り候てよりいさ／＼元氣に相暮らし居り候間憚ながら御心安う御思召し給はり度候昨今御地は暖かし御寒さ御事ならんご在萩中の冬季の様を思ひ出し候あの清い美しい雪景色も懐かしう覺え申し候當地は最寒中と申し候ても内地の十一月位かと存じ候程に有之候昨今にては晴天の日など福祥に給を着し申候へば丁度宜しく羽織なんどあまり用ひ申さず寒中は實に凌ぎよく御座候當地に來り候へば見る物聞く物皆珍らしく殊に熱帯植物多く地理の時間に教はりし燦樹エムの

へども小き事は除き申し候臺灣人の言葉はさつぱりわかり申さすべし／＼しやべり申し候時はなかなかやかましき程に候男女共に洋服の如き物着し居り候

男子は内地人とあまり異なり申さず候へども女子はよく／＼目立ち候足を白布にてくる／＼こしはり小さく致し幼な子が用ゆる程の小なる美し靴を穿きヨツチヨツチと歩む様實に面白く耳には耳輪を致し髪は貼り付け候如くベタリと綺麗にかきつけ皆美事なる飾りを付け候中には年老ひし人が赤毛の髪飾り致し居り候實に臺灣人のよく働き申す事には感心致し候朝早くより夜は就床前頃迄物賣り歩き居り候内地人は臺灣人の男子をニイヤと呼び居り候鐵道部工場等の職工は始て本島人にて會社役所銀行郵便局等にも本島人數多勤務致し居り候とにかく便利よく生活致し易く御座候好き折りにも御座候節は是非一度當地に御越し遊ばされ候様御勧め致し申し候私事去月二十四日より總督府鐵道部の方に通勤致し始め申し候故官舎配給致され二十八日其の官舎に引越し申し候私等の如き女子も五六十人ばかり通勤致し居り申し候私も一旦業務相成る身と相成り申し候へば學校に勉強致す如き態度にて一心勉勵致す考へに御ざ候叔父の住所とはあまり遠く離れ居り申さず只今は母と二人にて淋しく相暮し



居り申し候附近は皆鐵道部官舎のみにて驚く程に御座候  
亂筆にて誠に恐れ入り申し候先は右近況御報迄に御座候  
尙々時節柄皆々様御身御大切に遊ばされ度蔭ながら祈り  
上げ候母よりも宜しく申上げ候様申し付け候

三月一日 支那福州より

倉 田 静 子

あまりの御無沙汰に手紙も出しはぐれて今日はくど  
思ふ内に、つい二年あまりの月日を過し申候。其の後校  
長先生様始め諸先生様方會員皆々様御變りも御さなく候  
や御伺ひ申上候下つて私事は御蔭様にて異郷の空にて誠  
に楽しく家事にいそしみ居り候へば他事乍ら御安心下さ  
れ度候昨日は里の母より小包参り候て其中になつかしい  
なつかしい南園會報を發見致し取る手遅しと取あへず始  
めより終りまで拜見仕り會員名簿を見ては皆様に御逢致  
したる様にうれしくあらゆる充實した記事を見ては母校  
の御發展ふりを見てまるで元の女學生氣分になり嬉しう  
く存じ候思へば十年一昔の四月に假校舎時代から不完  
全な學校に於て學びし時の事が走馬燈の様到目前に浮び  
日に月にいや榮る行く母校の様子を見嬉し涙のこぼれる  
はさ皆々様の御幸福をよろこびこの上とも母校の隆盛を

遠方より祈り申上げ候時代の要求に従ひ女も今迄の女學  
生式では、とても相濟まぬこと存じ候折柄御校が高等  
女學校に組織を變更せられたるを會報にて承り自分の肩  
身の廣くなりし心地致しうれしく存じ御よろこび申上げ  
候私は女學校を卒業致したのは名のみにて英語を一字も  
知らず只補習科にてローマ字を習ひ候のみにて甚だしく  
不自由を感じ申候殊に外國に暮す身の西洋婦人と交際す  
る事もあり其度毎に如何にも不便にて英語を知らぬなさ  
けなさをしみく感じ申候も少しをそく生れて居たら  
ばと、そののみ思ひ居り候ぞうぞ皆様學校に於て御勉強  
時代英語計りてなく諸學科もより以上御勉強遊ばし御修  
得の程祈り申上候親に先立たれて始めて親の恩か分る如  
く學夜を出て家庭を持ち時々難事にあつて始めて學校の  
恩相わかり候今少しあれもこれも勉強しておけばよかり  
しにと思ふ事のみ候今更何とも仕方なく残念に御さ候  
扱て當地は福建省の首府にして大都會には候へども主と  
して支那町にて不潔な町の狭い道低い家ばかりにて人通  
り多く候へども外國人の住む私等の住宅のある所は西洋  
館計りの高い建物にて山の平の開闢な所にて氣持ちよる  
しく候  
日本人は僅三百人位にて町を歩いてても日本人に逢ふ事は

稀に御座候

氣候は一年中温和に候て冬季と言へどもさして寒さを  
感じたる事なく今頃の御地の事を思ひ強い北海の風に六  
つの花に肌身をつんざく様なことは逆も此地にては想像  
も出來ざる程に候夏にても大した暑さにては之無くたゞ  
お日計りが長い位の事に御座候一年の内十月頃より翌六  
月頃までがテニスの時季にて此の頃は私等も毎土曜日曜  
日には銀行員のお仲間入りにて運動をこゝろみその都度學  
生時代の氣分に相成り申候御寒さの折柄体育として薙刀  
の寒稽古遊ばす様を思ひ今迄のあまりに弱い日本婦人に  
比してこれからは日本婦人のよりよき体格の必要を思ひ  
あらゆる方面に行き届きし御教育ふりに感じひたすらよ  
ろこび居り申候御寒さの折柄會長始め會員の皆様御身  
御大切に遊ばされたく増すく會の御發展をかげながら  
祈り申候同封拾圓は誠に僅かにて御座候へども同窓會基  
金として御送付申上候まゝ御受取り下され度別に貳拾五  
錢は會報代として御送付申上候間何卒當方へ來年分御送  
付下され度願ひ上げ候 先づは會報の御禮にかけて近況  
御知らせまで あまりの亂筆にてながく誠に失禮申  
し上げ候會報を見てあまりのなつかしさについ筆の走り  
候へば御許し下され度候

あら／＼かしこ

四月二十日 鹿兒島縣より

(舊姓松岡) 橋 口 静 子

世の春は花散り行きて後淋しくそる晩春の思浮ぶ折  
柄其の後は打ち絶えて御無沙汰のみに打ち過ぎ何んとも  
お詫びの申上げ様も御座なく候諸先生始め皆々様には御  
變りも御座なく候や御伺ひ申上候降つて私事も無事消光  
いたし居り候間他事乍ら御放念下され度候扱て昨年の暮  
なつかしき母校よりの會報御送り下され何んよりうれし  
く拜見致し候色々都合の有り且つは我身の氣永き爲と  
人の子の母となりてよりは日々に用事のみには追はれ  
して中々にふみかくひまへ見出せず實に心にもなき失  
禮致し候今春は歸郷する心にて居り候へば其の時御拜眉  
致し篤と御詫び申上ぐる心積りにて居り候も主人の務の  
都合で萩へ立寄るだけの日數なく甚だ残念とは存じ候も  
如何とも致し方なく去る四月十日主人の郷里なる鹿兒島  
へ歸り申候なつかしき我が故郷をはなれて遊き第二の故  
郷にあり又いついつの土地にかわるか果てし知れざる  
身の何より楽しく慰めとなる會報も我身の氣永より今年  
は御送付も願へぬかと思へば我から時々種子なるも残念  
至極と存じ居り候甚だ勝手なお願ひには御座候へ共心中  
の程御察し下され候て私の罪御許しの上會報御送付下さ

るわけには行き候はずやと日夜そのみ案じ居り候三錢切手封入致し置き候間何分の御返事承り更御送付下さる様なれば早速會費御送り申上ぐべく候又私事も當地鹿兒島へしばらくは在住する事と相成り居候

本籍も當鹿兒島へ入籍相成居候間御届申候先づは御詫び旁々住所變更の御報知まで其の中御身御大切に遊ばされ度候終に在校生御一同様には新學期をむかへられて益々御勉學あらん事を祈り上候

かしこ

七月三日朝鮮城津より

中原 春江

梅雨晴の暑さ一入強く覺えますが先生方には皆々御變はございませんか御伺申上ます次に私も恙なく毎日平凡な日を送つて居りますから憚ながら御安心下さいませ。さて昨日は卒業記念寫眞帳お送り下さいましてまことに有難う御座いました久々にておなつかしき先生や皆々様のお顔を拜見して目のあたりお目に懸つたやうな氣が致しましたはんどうにうれしうございまして昨日は早くもお別れ致しまして三月を経ました私も今は當地に参りまして鮮人を相手に日を送つて居りますが内地とは土地風物悉く異つて居りますのでよほど不自由を感じます言葉等

も全くわかりませんので嘔も同様で御さいましたでも此頃は多少はわかる様になりました當地は山口縣の方が随分お出でになりますのは私共もよほど力強く思つて居ります日本入全體で凡そ六百八人居るさうで御座います當地には守備隊もございまして安全では御さいませけれど何だか支那入等が澤山居りますので油斷がならない様な氣が致します鮮人等はまた、正直な者でございませ男でも髪を結つて冠を被りましたのをみますと日本なら神代の人を見るやうな氣がします神代の方は多分こんなではなかつたであらうかと思はれますでも鮮人の中にも少し開けたのは頭を散髪にして居るのが次第に多くなつて来るやうで御さいませさて御地は今年梅雨に入つても雨が降らないさうでございませが當地は私共が参りましてからはよほど雨の日が續きました當地は降雨は少いさうでございませのに今年はどうして雨が多いのかと心配致して居りました此頃漸くお日和が續きました次第に暑さも加る事で御座いませう其内御身御大切になさいませ 先は御禮旁々御報申上ます

かしこ

八月十日 大阪府玉出町より

(舊姓桂) 田中 靜子

立秋とは名のみにてお暑さは暑中にもまして厳しく相覺へ申候折柄諸先生はじめまゐらせ會員御一同様には御變りもあらせられずや御伺申せむらせ候おなつかしき御校も皆々様の御盡力にて益々御發展の御事と誠に嬉しく御よろこび申上候次に私事御蔭様にて無事消光致居候ま、他事乍ら御放神遊ばされ度候私打絶えて御無沙汰何とも御詫びの申上やうもなく何とぞ、悪しからず御許しの程願上候何時も心にはかけつゝも家事の雜用に追はれ今日は明日はと思ふうち月日のたちて余りの御無音に今更筆執るも心恥しと存じ失禮のみ致し居候當地へまゐり早や三年と相成候いまにては煤烟にも馴れ近所の地理も多少わかる様に相成候嫌なりし大阪も住み馴れば又云ひがたきよき處に御座候郊外電車多く候へば京都奈良、和歌山、神戸など、日歸りの旅も出来樂しみ居り候當地には同窓の方も多しとか承り候へども廣き所故何處にお出でか分からず只陶村様と始終往來致しては御校の御噂のみ致し居候 互に一家の主婦となりても話す時は又元の學生時代に立戻り共にありし昔を現在の如くに思出し居候早く御伺申上る筈の處塚の海岸に避暑に出かけ海水浴

に忙がしく日のたつとも知らず立秋の朝に驚かしてしたしめ候御暑さ烈しき時なれば何とぞ御身御いとひ遊ばされ度候御校のます、御隆昌の程をかげながら祈候 亂筆にて失禮ながら御見舞まで

かしこ

- 一、右の外南園會報發送に對する御禮狀御住所異動通知等會報部宛にておこされた御書簡が澤山ありますけれども紙數の都合上、家庭の様子や御地方の状況などの記されたものだけを掲載して其他は除きました今後とも御家庭及御地方状況を記されたる御書簡を多數御送り下さいませ様に願ひます
- 二、尙本會宛の御通信類には第何回卒業等とか何年卒業とか何年卒業とか御記し下さいませ様願ひます又姓のかわつた方は舊姓何々と附記して下さいませ



### 會員名簿

(大正十一年九月)

#### 特別名譽會員

兵庫縣武庫郡木山村(逝去)  
 久原 房之助氏  
 久原 清子氏

#### 名譽會員

兵庫縣武庫郡打出村  
 齊藤 幾太郎氏  
 田浦 市郎氏  
 松浦 吉良氏  
 龍口 俊治氏  
 增山 宗史氏  
 岡村 勇二氏  
 岡十郎氏

#### 特別會員

阿武郡萩町河添(大津郡三隅村)  
 齊藤 貞彦氏  
 池上 岩太郎氏  
 伊藤 通利氏  
 荒川 貢助氏

#### 舊特別會員

阿武郡佐々並村(死亡)  
 松野 ユキ  
 松浦 コウ(伊藤)全  
 松本 和 全、東田町(補)阿白水尋常高等小  
 梅田 カツ(宮本)全南片河(補)朝鮮京城大和町三  
 大金 田トキ 大瀬戸崎  
 山本 政子(山本)阿萩平安古(補)死亡  
 水木 チヨ(倉田)全、全魚店町 山口町上金古曾森  
 山口 エン(津田)全、全東田町 重部屋  
 井原 ミツ(竹内)全、全惠美須町京都府加佐郡志樂  
 河崎 スエ(中島)厚狹郡舟木町字小野(補)廣島市大手町九丁  
 高垣 清子 阿萩古萩 目三九番地  
 田中 冬子 全、椿村 (死亡)  
 伊藤 ミドリ(齋藤)全、大井村(補)神戸市平野馬場町  
 山下 歌子(小澤)全、椿村  
 久保田 ミサエ 北海道函館區 陸軍官舎第十七號  
 後藤 ハル(田邊)阿萩惠美須町朝鮮南浦明映町  
 永井 ミツ(村田)全、椿東村小畑(補)東房市外中野  
 町打越

本校職員住宅(玖珂郡玖珂村)  
 阿武郡萩町松本 森脇八重子  
 本校職員住宅(下關市丸山町一九八九) 五十崎  
 阿武郡萩町川島(廣島縣比婆郡美古登村) 野田ヨシ  
 全平安古(阿武郡彌富村) 安野市  
 全(阿武郡三見村) 長澄ハ  
 同椿村 有田音彦  
 全萩町今古萩(阿武郡吉部村) 河村直一  
 全全惠美須町 藤田直人  
 全全土原 安田直人  
 本校寄宿舎(吉敷郡吉敷村) 中村モス  
 阿武郡萩町平安古(大津郡菱海村) 上村利三  
 全全東田町 原田彌政  
 全全川島 川島梅子

### 校外會員

第一回卒業生 (大正二年三月卒業) (年齢順)

阿武郡萩町平安古 (井上) 飯塚 新三郎  
 靜岡縣立高等女學校 沼田 大谷  
 大阪府北河内郡立河北高等女學校 田中 繁  
 京都府大宮八條下ル西入ル坂本方齋藤 太  
 阿武郡萩町河添 齋藤 太  
 山口縣都濃郡立都濃高等女學校 米原 鶴  
 縣立山口高等女學校 本原 旭  
 下關市武久園 (八木) 進藤 太  
 和歌山縣有田郡廣 (坪野) 井藤 太  
 門司市尾上中町 (奈良) 三崎 太  
 阿武郡萩町平安古 河津 太  
 阿武郡萩町平安古 古河 太  
 東京市外高日町雜司ヶ谷金山三三九(藤野) 河津 太  
 大阪府下東成郡玉出町六二〇 河津 太  
 山口縣立萩中學校 死亡  
 阿武郡萩町江向 死亡  
 熊毛郡室積町山口縣女子師範學校  
 東京美術學校  
 阿武郡萩町江向  
 吉敷郡陶村

(補)は本校補習科卒業  
 ○は校外會員會費金壹  
 圓(卒業の際納入の  
 分)納入済

#### 氏名 本籍 近況

松野 ユキ 阿萩土原 在下ノ關(住所不明)  
 松浦 コウ(伊藤)全 福岡縣大里町柳井區  
 松本 和 全、東田町(補)阿白水尋常高等小  
 梅田 カツ(宮本)全南片河(補)朝鮮京城大和町三  
 大金 田トキ 大瀬戸崎  
 山本 政子(山本)阿萩平安古(補)死亡  
 水木 チヨ(倉田)全、全魚店町 山口町上金古曾森  
 山口 エン(津田)全、全東田町 重部屋  
 井原 ミツ(竹内)全、全惠美須町京都府加佐郡志樂  
 河崎 スエ(中島)厚狹郡舟木町字小野(補)廣島市大手町九丁  
 高垣 清子 阿萩古萩 目三九番地  
 田中 冬子 全、椿村 (死亡)  
 伊藤 ミドリ(齋藤)全、大井村(補)神戸市平野馬場町  
 山下 歌子(小澤)全、椿村  
 久保田 ミサエ 北海道函館區 陸軍官舎第十七號  
 後藤 ハル(田邊)阿萩惠美須町朝鮮南浦明映町  
 永井 ミツ(村田)全、椿東村小畑(補)東房市外中野  
 町打越

○佐々木フヲコ 全三見村(補) 宇田尋常高等小學校在職

○金子ハツ 阿大井村 朝鮮京城西界洞六四

○福間サト(藤田) 全福川村 大津郡日置村字長行

○長谷川サダ(野上) 全土原(補) 支那福州台灣銀行舍宅

○倉田静子 阿萩西田町(補)

○藤井キク 全德佐村 下關市岬之町大崎保太商店

○大崎トシヨ(平田) 全萩熊谷町 萩濱崎町

○馬庭タマヨ(金子) 全福川村(補) 臺灣嘉義郵便局官舎

○松井チヨ(河上) 全萩橋本(補) 大坂府東成郡住吉村字新開一二七七番地

津田 桃代(金子) 全橋東村香川津

●第二回卒業生 (大正三年三月卒業) (年齢順)

氏名 本籍 近况

○安藤マサ(大岩) 阿萩新堀 朝鮮大邱府上町三

○時藤マナ(松村) 全全江向 阿萩福村

○岡レン(大崎) 大三隅村 山口町圓政寺

○桂ツヅエ(國司) 阿橋村 萩町今古萩

○有田マツ(阿部) 全吉部村(補) 臺灣臺北龍匣口庄三四四

○桑木マツ(多田) 全橋東村(補) 東京荏原郡池上四七西村方

上田トミ 阿萩河添 福岡縣久留米市外

○石津喜興子(中村) 全全東田町 福岡縣久留米市外

○草刈フヲ 全全河添(補) 三井御井村

○上田信子 全全木村 山口町伊勢門前堀内

○神代君子 全阿萩河添 山口縣高梁町柿ノ木町

○玉木節 美大嶺村(補) 廣島縣佐伯郡大野浦驛

○玉木ハツヨ(難波) 阿萩米屋町(補)

○吉田チヨ(原) 全全土原(補) 福岡縣嘉穂郡穂波村平恒中島鐵業株式會社本部

○大野アキ(森重) 全奈古村 朝鮮京城府光化門通リ陸軍官舎七八

○木原八霜(伊藤) 全萩堀内(補) 吳市寺本町一四七

○嶋藤千代(堀) 全萩濱崎(補) 死亡

○内藤正子(小野) 全橋村沖原 (住所不明)

○高橋恭(長見) 全萩鹽屋町(補) 在大坂(住所不明)

○難家キシコ(中原) 全橋東村(補) 大阪府下玉出町四八〇

○安達ハナ 全全(補) 香川縣丸龜市風袋町中ノ町

○岡藤ミヨコ(藤本) 全萩御許町

○原キク 全全平安古(補) 阿佐々並村

○田中千代(中原) 全全橋本 神戸市湊川町二丁目一〇番地

○倉重マサヨ 全橋東村 下關市後田三二一

○小坂キク(岡) 全小川村(補)

○山縣於松(伊藤) 全大井村 神戸市須麻大手宮ノ西九番地

○宮本タカ 全全西田町 東京府下巢鴨宮下一六九三横地素之進内

○横地幸(河野) 全全江向

○田邊カメ(山下) 全全橋東村

○河村タミ子 阿萩熊谷町

○藤掛美智子(三宅) 全全江向

○澄田ハツ 阿萩堀内 福岡縣田川郡神田村字金田東棧橋

○吉本ヨシ(神村) 全全米屋町 阿橋村雜式町

○阿部シマ 全全北片河町 大深川村正明市

○岡部シヨ 全全須佐村 大三隅村

○山根英子 全全河添(補) 萩町河添仲ノ町玉置内

○河村貞子(三好) 全全西田町 姫路市五軒邸八九

○藤田豊子(未成) 全全平安古 熊毛郡島田村原

○三浦テイ(大中) 熊淺江村(補) 熊毛郡島田村原

●第三回卒業生 (大正四年三月卒業) (年齢順)

○阿部タケヨ 阿彌富村 下關市田中新町一丁目

○加藤雪(栗屋) 下關市田中新町一丁目

○藤田愛子(箭島) 阿吉部村(補) 大三隅村

○島田ウメコ(山本) 阿萩濱崎 下關市入江町海岸通リ

○佐々並マツ(藤村) 全全川上村 東京府下豊島郡瀨川町字田端五四三

○松岡花子(松野) 全全土原 東京府大井町出石五一六八

○三浦チセ 全全濱崎

○櫻井由子(河北) 全全平安古

○河野ミツコ 全全今古萩(死亡)

○山口屋シナ(山下) 全山田村 馬來半島柔佛洲南興護謨栽培所合名會社藤田組山口屋彌一方

○大森チヨ 阿萩濱崎 青森筒井陸軍官舎

○伊藤ミツ(村上) 全全東田町 東京本郷區本郷五丁目一四

○椿嘉子(三上) 全全山田村

○西山トメ 全全全 兵庫縣加古郡高砂町錦紡高砂支店內

○國弘トメ 全全全

○林清子 全全平安古 小川尋常高等小學校在職

○尾坂喜興子(君谷) 阿小川村 名古屋市熱田白鳥五

○野村ツルヨ(田中) 全全橋東村字後小畑

○中村操(田村) 全全橋東村 門司市吉住町四丁目

○吉田壽美 全全川島(補) 大日置村神田尋常小學校在職

○植村フミヨ(田中) 全全橋東村

○齋藤マサ 全全大井村

○三好アヤコ(秋枝) 全全福賀村

○厚東佐世 全全橋東村(補)

○原フミ(長井) 全全上村 京都伏見深草石峰寺下

○南方京 全全橋東村(補) 神戸市須麻町西代カ

○植村サチヨ(山本) 全全三見村 山口町今市七七

○三原幸子(山中) 全全橋本 吉敷町小郡町

○福永フサ(伊藤) 全全上村

○倉増千代子 全全高俣村(補) (死亡)

○河田シズ 全全高俣村

○齋藤 キク 阿 椿村 大阪北區天滿橋筋三ノ一七  
 ○阿武 カメ 全椿東村 在朝鮮(住所不明)  
 ○赤司 尊子(倉田)全萩吉田町 福岡市地行東町五番丁一三七  
 ○黒瀬 キミコ 全萩江向 東京市外千駄ヶ谷八七四  
 ○山下 サト 全山田村  
 ○吉賀 クリ(三村)全萩濱崎吉賀幸助方 朝鮮釜山本町一丁目  
 ○小宮 トヲ(中原)全全土原 神戶市北野町四丁目  
 ○長谷 トシ(吉賀)全全熊谷町 六七  
 ○藤井 菊(鹽見)全椿村(補) 五銀行内  
 ○津守 フキ(重枝)全萩橋本町 布哇ホノルルホハイ  
 ○中村 フミ(大山)全椿村 トミシン會社  
 ○松原 ツル 全萩米屋町 (死亡)  
 ○久保田 ヨシ(大田)全全土原 下野市醫生  
 ○村木 秀子 阿萩堀内 美於福小學校在職  
 ○能美 滿壽子 全全江向(補) 福岡縣若松市堺町四丁目  
 ○馬屋 原孝子 全椿東村  
 ○内藤 ヨシコ 全萩町江向  
 ○佐藤 シヅ(村田)全全江向 (金子)全全平安古(補)住所不明  
 ○藤井 テル(村田)全全土原 萩明倫小學校在職  
 ○河野 千世 全全土原(補)萩濱崎新町  
 ○小笠原 嘉子(三好)全全米屋町 新旅順松村町二二  
 ○能美 ヨシ(片山)全全椿東村 奈古尋常高等小學  
 ○井上 マツコ 阿 福川村(補) 校在職

○長嶺 芳子 全德佐村  
 ○小河 ハナエ(岩竹)全萩江向 阿武郡小川村  
 ○白井 ハナ(平木)全椿木村(補) 萩明倫小學校在職  
 ○金子 ヨシ 全萩町江向 大正九年六月死亡  
 ○岩崎 トミ 全椿東村  
 ○岡野 サダ(阿座上)全全津守町 臺北市大稻 下奎府  
 ○田原 千代子(石井)阿萩東田町 聚街五八番戶  
 ○伊藤 喜代(古橋)全全川島 兵庫縣須磨大手町下庄條一三ノ二五  
 ○野村 フシ 全全米屋町 東京市本郷區駒込動坂町一〇六  
 ○金子 清 全全宇田郷村(補) 死亡  
 ○榎原 マサミ 全全萩町堀内(補)  
 ○堀永 フクコ 全全東田町  
 ○橋口 シズコ(松岡)全全椿東村  
 ○淺野 ミサオ(補)全全萩江向 鹿兒島縣出水郡野田村大字上名  
 ○寺田 クリ 阿椿東村 東京市本郷區湯島新花町五四  
 ○阿部 チヨ 全全萩町古萩 福岡縣戶畑町明活紡績會社社宅七  
 ○松屋 シヅコ(岡村)全全平安古  
 ○山本 松江 全全江向(補) 大坂市東區南久太郎町四丁目角松井方  
 ○三上 文(松井)全全川島(補) 京城永樂町二ノ三二  
 ○藤原 キク(三村)阿椿東村(補) 京城永樂町二ノ三二  
 ○小野 フミコ 全全奈古村豐浦郡尋常高等小學校在職

○藤井 政(大賀)全全萩町江向 (大正十年六月死亡)  
 ○小林 春(竹重)全全江向 神戶市兵庫二石通り一丁目七十七番地小林直五郎内  
 ○黒瀬 ヒサ(宮原)全山田村 在職  
 ○安田 ヨシ 全福川村(補)川上尋常高等小學校  
 ○米原 ハツメ 熊本市外黒髮村(補)都濃郡徳山町  
 ○鈴木 壽子 阿萩西田町(補) 萩町南古萩  
 ○村岡 ミドリ(堀江)阿全全江向 朝鮮咸鏡北道境城西門外  
 ○植松 ヨト 全全熊谷町  
 ○林 保子(渡邊)全全平安古 山口町八幡馬場  
 ○吉田 トキ(遠藤)全全古萩 山口町下堅小路原田裏  
 ○國重 静子 阿椿東村(補)  
 ○佐伯 千代子 全福川村(補)神奈川縣鶴見三角  
 ○松井 豐子(河村)全全萩橋本 大阪市南區心齋橋筋通南久太郎町四丁目  
 ○米澤 秀子(和田)佐防府町三田 大阪市南區天王寺石尻一四九一ノ二ヶ辻町五三一四石原方  
 ○阿武 文子 阿 福川村(補)  
 ○吉武 静 佐 中ノ關村 濱濱市外保土ヶ谷町一〇六日本籍  
 ○富塚 タネ(大田)阿萩津守町 朝鮮咸鏡南道成興東

○堀永 クリ(増野)全全濱崎 陽里  
 ○磯部 ヒサ(原田)全山田村 台灣基隆郡瑞芳庄九分  
 ○兒玉 豐子(山根)全嘉年村 福岡縣若松市山手通七丁目百五十九番地  
 ○高木 梅代 阿萩濱崎 横濱市西戸部町池ノ坂九二四  
 ○藤原 久枝 全全椿東村(補)大正七年十一月死亡  
 ○山根 マチコ(柳井)全全平安古(死亡)  
 ○井本 龜子 全全須佐村  
 ○伊藤 光子(北村)全全江向 大正十年十二月死亡  
 ○前田 トミ 全全地福村  
 ○江原 キク(能美)全全萩唐樋町 豊浦郡王司村御田  
 ○佐原 菊野(世良)全全椿村淵淵 岐阜縣東惠那郡中津  
 ○津原 ミヨ(浮里)全全三見村 高等女學校在職  
 ○猪口 菊枝 兵庫縣三原郡 白木尋常高等小  
 ○松崎 兵衛 松崎村 學校在職  
 ○中隈 富美(工藤)阿萩南古萩 大津郡山田村湯町  
 ○白井 アキコ(吉山)阿山田村倉江  
 ○長谷川 トシコ 全全藤生村  
 ○横山 マツル 全全萩河添  
 ○野村 マツル 全全椿東村(死亡)  
 ○井町 フミ 阿三見村 三見尋常高等小學校  
 ○岡山 タキユ 全全椿村雜式町 在職  
 ○岡 絹子(中村)全全生雲村 朝鮮慶尙北道迎日郡東

○岡本 秀子(田原)全山田村 海面ミツ浦項農場  
 ○柏村 ヨシ(中村)全萩川島 萩五間町岡本直介内  
 ○秋山 キク(齋藤)全全御許町(大正八年八月死亡) 支那吉林省城內富寧造  
 ○阿武 ミト(河村)全全東村松本(補)大連石見町六号 紙公司内  
 ○藤本 豐子(岩田)厚狭郡宇部市梶返區 在職  
 ○伊佐 喜美 阿萩橋本  
 ○原川 壽子 全全十原(補) 阿吉部尋常小學校  
 ○黒瀬 ヒデ(久保田)全全東村 在職  
 ○長見 マサコ 全全福賀村(補)東京府下流橋町柏木  
 ○下間 静子 全全萩吉田町在京都  
 ○高橋 ヨシコ 阿山田村玉江浦  
 ○藤井 フヲノ(藤原)佐防府町(補) 吳市和庄通三丁目  
 ○井上 ふみ子 阿萩江向 住所不明  
 ○藤井 文子(竹内)佐島地村(補)東京市下谷區谷中  
 ○野上 壽惠(長谷川)阿萩土原(補)(住所不明) 上三崎南町七一  
 ○石光 綾子 全全下五間町  
 ○堀ノ子 全全上五間町  
 ○吉村 ノブ(中村)阿萩東村中ノ倉  
 ○瀧田 高子(安田)全全河添 臺北久壽街二一  
 ○齋藤 ヤス子 全全格和 大坂市北區壺屋町二  
 ○末武 滿子 全全格東村越ヶ濱 一四水谷内

○玉井 芳子 全全江向 朝鮮慶尙南道南旨米穀  
 ○堀 君代 全全河添 大豆検査出張所玉井敏  
 ○山本 チヨコ 阿萩平安古(補) 助方  
 ○藤山 ユクセ 全全紫福村 東京市外上落合五一四  
 ○難波 アキコ 全全萩米屋町(補) 杉本唯介方  
 ○國司 八重 全全格東村鶴江 京都府木屋町御池  
 ○宗室 シゲ子 全全萩橋本  
 ○坂口 タカコ(高橋)全全江向  
 ○領家 マス(村上)全全東田町 安東縣一番通五丁目  
 ○植村 雪子 阿萩東村 小橋正一方  
 ○阿武 ミユキ 全全(死亡) 大連山手町滿鐵社宅  
 ○石川 文子 全全(補) 九ノ五ノ九  
 ○水津 フミユ(村木)全全 朝鮮京城朝日町二丁  
 ○谷井 雪子(榎)全全江向 目三番地  
 ○花村 秀子 全全堀内  
 ○岡本 ミチ 全全吉田町(補)吳市和庄通三丁目  
 ○堀 壽子 全全河添 七四神川論三方  
 ○山下 マス 全全平安古 三見尋常高等小  
 ○柴田 タケヲ(吉岡)全全高保村 福岡市赤坂七九九 學校在職

石井 壽萬 全全土原 東京市赤坂區新坂町  
 ○白根 光子 全全濱崎 千葉菊一方  
 ○上田 ツル 全全新許町(死亡) 萩東田町  
 ○久保 春枝(阿武)全全新許町  
 ○今地 マツ 全全川上村  
 ○吉田 ヨシ 全全萩濱崎(補)  
 ○吉野 俊子(中原)全全橋本(補)大正十一年四月死亡 (住所不明)  
 ○小笠原 マス 全全堀内  
 ○藤村 文子(野村)全全御許町(死亡)  
 ○松本 アサ(後藤)全全今古萩 門前市宗利町一丁目  
 ○渡邊 八百子 全全全江向  
 ○山本 照子 全全全橋本  
 ○永田 千代 全全全橋本  
 ○河村 トヲ(重枝)全全全橋本  
 ○吉永 良子 全全全米屋町  
 ○藤井 テル子(齋藤)全全全濱崎  
 ○廣瀬 全全全濱崎  
 ○宮原 百重 美赤郷村 島根縣津和野町下市  
 ○茂見 タミ 阿萩平安古 朝鮮京城若草町九七  
 ○三見 コウ 全全三見村 廣瀬幸一方  
 ○都等 ユキコ 全全生雲村(補) 路  
 ○小林 トキ 全全奈古村  
 ○中村 キク 全全萩唐麵  
 ○倉富 イチ 全全鹿野村  
 ○福根 アサコ(富士見)全全大井村 都濃郡徳山町字新町  
 ○伊藤 雪江 全全大井村 朝鮮釜山辨天町吉見

○伊藤 芳子 全全全 小畑ノ奥鳥越  
 ○伊藤 ヨシ 全全全 椿東村松本中ノ倉明  
 ○神代 政子(村上)全全全 光寺内  
 ○萩原 千代子(河村)全全全 鳥根縣美濃郡吉田村  
 ○松尾 壽 全全全 生雲尋常高等小學校  
 ○片山 キク(小河)全全全 在職  
 ○藏貫 ツル 全全全 山口町飯田町宮村竹  
 ○伊藤 トミユ 全全全 葎様方  
 ○山崎 アサ 全全全 大坂市外天王寺村大  
 ○山崎 サチ(河井)阿萩川島 字天王寺丸山山崎秀  
 ○伊藤 陸子 全全全 輔方  
 ○厚東 英子(福原)全全全 出所  
 ○飯田 静江(岸)全全全 千葉縣千葉市登戸一  
 ○長井 トシ 全全全 六  
 ○原田 ハルコ(石川)全全全 萩土原  
 ○岡田 八重子(松本)全全全 東京市赤坂區一ツ木  
 ○厚東 ヨシ 全全全 町四八番地  
 ○田村 良子(近藤)全全全 朝鮮新義洲守備隊  
 ○河崎 好子(竹内)全全全 官舎内  
 ○河崎 好子(竹内)全全全 神戸市池田村一九  
 ○河崎 好子(竹内)全全全 六

倉増 太代 全高俣河(補) (死亡)  
 池田 京子 全萩廣谷町(補)  
 岸森 芳江(藤本) 全全江向(補)  
 金子 喜代子 全全川島 朝鮮咸北鎭城西門外  
 武田 信子 全全山田村奥玉江 門司東本町二丁目海  
 河村 信子 全全江向 事商會  
 田上 ヨシ子 全全格東村(補) 兵庫縣明石市鷹匠町  
 藤井 キヨコ(田中) 全全格東村 堀端西入古川榮吉方  
 小柳 サヨ子(並川) 全全萩河添 臺灣台北西門外街一  
 吉田 フミ(厚東) 全全格東村(補) 丁目一六四  
 中島 ヨシコ 全全萩土原 大正七年六月死亡  
 松本 静子 全全東田町(補) 山口町金古曾  
 松尾 キク(中原) 全全格東村 神戶市野崎通三丁目  
 宮川 キツル 全全萩濱崎(補) 三十九番屋敷  
 西山 キクヨ(田中) 全全格東村 大坂府三島郡水玉地  
 齋藤 ミツ 全全萩南古萩(補) 小郡實科高等女學  
 藤井 三枝 全全江向 校在職  
 田中 静子 全全格東村(補) 東京市小川區竹早町  
 長屋 チヨノ 全全山田村木間 六九大塚方  
 紫田 キク 全全萩江向(補) (大正八年八月死亡)  
 中原 則子 全全福川村  
 松本 喜久子 全全格東村

渡邊 嘉子 全全萩古萩(補)  
 久保 アヤ子 全全江向(補) 萩明倫小學校在職  
 武田 静枝(木村) 全全島根縣邑智郡田所村  
 杉村 マツ子 全全阿山田村奥玉江(死亡)  
 小島 ムツ子 全全格東村(補) 格東小學校在職  
 土浦 ウメ 全全島根縣益田町  
 松浦 ムメ 全全萩橋本  
 吉田 貞子 全全格東村(補) 廣島市上流川町三九  
 齋藤 雪枝 全全萩新堀(補) 生田内  
 長日 千代子(松浦) 全全岩國散島 住所不明  
 桂 竹子 全全萩土原  
 神野 サキ 全全江向  
 奥 幾子(山根) 全全小野田(補) 大連市越後町三井  
 白井 チカ 全全阿萩村(補) 社宅内二〇號地  
 末岡 ハルコ 全全美於福村(補) 格東西小學校在職  
 渡邊 ヨシ 全全阿萩村濁淵 島根縣鹿足郡日原村  
 溝部 ハナコ 全全萩油屋町(補) 村上十郎内  
 藤村 峰子(多田) 全全 見町六五森野方  
 草列 政子 全全萩河添 神戶市中山手通七丁  
 小野 サキ 全全格東村(補) 目二十ノ六五  
 在職 格西尋常高等小學校

山内 ハツエ(乃美) 吉秋穂村山内唯五郎  
 肝付 澄江(瀧口) 東京麹町區下二番町  
 天野 ミツ(田坂) 全全格東村 五三番地  
 森脇 美智子(黒瀬) 全全山田村 佐波郡三田尻局内元  
 藤田 ハツセ 全全格東村 佐竹跡  
 秋山 ウメコ(増山) 全全萩五間町 (大正九年七月死亡)  
 新庄 貞子 全全熊谷町(補) 川上村立野小學校  
 増山 静子 全全全本 在職  
 第六回卒業生 大正七年三月卒業 (年齢順)  
 三好 シゲ 阿萩町濱崎 岡山縣井原高等女學  
 栗田 鹿子 同全全格東村 校在職  
 岩武 綾 同全全格東村 高俣村尋常高等小學  
 岩田 綾 同全全格東村 校在職  
 山田 マサ子 同全全格東村 福川尋常高等小學校  
 岩田 マサ子 同全全格東村 在職  
 竹重 ツチ 同全全格東村 (大正七年四月死亡)  
 小野 静子 同全全格東村 岡山市門田屋敷九七  
 野重 ツチ 同全全格東村 廣島市西九軒町  
 藤原 良子(富田) 同全全格東村  
 中野 シグタ 同全全格東村  
 藤田 志都(羽鳥) 同全全格東村  
 守田 志都(羽鳥) 同全全格東村  
 平田 マツコ 同全全格東村  
 堀川 マツ子 同全全格東村 東京市芝區高輪南町

田中 静子 同全全格東村(補) 五十四番地松御殿内  
 高洲 美代 同全全 明木尋常高等小學校  
 金子 静(桂) 同全全 在職  
 伊藤 ツルコ 同全全江向 大坂市外玉出町四八  
 今田 ナチコ 同全全五間町 五  
 山中 松子 同全全平安古 大坂北區北野大願寺  
 神田 サトシ(服部) 同全全三見村 町七三七長井方  
 有吉 トヨコ 同全全萩西田町 町七三七長井方  
 森屋 千代 同全全同瓦町(補) 丁目牧野タネ方  
 大谷 露子 同全全同米屋町 町七三七長井方  
 中村 貞子 同全全同唐樋 町七三七長井方  
 岡朝 文(林) 同全全同河添 町七三七長井方  
 福田 文(林) 同全全同河添 町七三七長井方  
 藤田 フサコ 同全全同格東村 町七三七長井方  
 末成 清子 同全全同萩平安古(補) 町七三七長井方  
 津田 ナツ(波多野) 同全全同新堀 町七三七長井方  
 後藤 通子 同全全同格東村 町七三七長井方  
 (大正八年死亡)  
 名古屋市西區台所町  
 二八

山田 繁 同萩濱崎町(補) 萩熊谷町島屋方
井町 繁 同全川島 同萩濱崎町(補)
阿武 繁 同全川島 同萩濱崎町(補)

村 上 同萩濱崎町(補)
香川 同萩濱崎町(補)
大島 同萩濱崎町(補)

山田 繁 同萩濱崎町(補)
井町 繁 同全川島 同萩濱崎町(補)
阿武 繁 同全川島 同萩濱崎町(補)

宮村 全萩濱崎町(補)
厚東 全全 全全















河村	佐伯	佐古	島本	竹谷	田村	田村	田村	友村	内藤	中原	中山	中山	西尾	原山	林野	波野	波野	福住	藤山	藤山	松浦	松浦	三輪	水島
フミ	フミ	チヨ	チヨ	キヨ	キヨ	ハナ	ハナ	ヒナ	シズ	シズ	キサ	キサ	テル	テル	アキ	キヨ	フミ	チヨ	チヨ	チヨ	タケ	タケ	ヒサ	ヒサ
全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村	全橋東村
本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎	本校寄宿舎

村田 子  
武蔵 子  
森田 子  
吉屋 子  
渡邊 子  
阿萩濱崎  
同萩町  
同三見村  
同大井村  
福岡縣鞍手郡新入村 阿萩江向

附記

- 一、右名簿中に相異の點あるか、又は今後氏名、本籍近況等に御異動ありたる際、速に南園會々報部へ御一報下されし。
- 二、本會へ宛てられた御書簡の類には御氏名の傍に第何回卒業とか又は何年卒業とか御附記下さいませ。又姓の改まりたる方は舊姓何々と御附記下さいませ。若し舊姓が記して無い時は、同名多き場合に名簿書改めの出來ぬことがあります。
- 三、校外會員にして名簿の氏名の上に「○」の符號なき方は校外會員費金壹圓御送付下されし、但し校外會員會費と明記下さいませ。

編輯だより

第十號の編輯を終りて、

○、こちら向け、我も淋しき秋の暮、こは、たれ俳人の口ずさみにて候ぞ、清澄の氣、充實の境、飛ぶ星の尾にも秋の輝はあるものを秋なればこそ候。

○、本校ここに創立第十周年を迎ふるご共に本誌亦十年一紀元を盡し候、微たりごはいへ歳々其の面目を改め得たるは、會員諸君の後援の賜に存候。

○、ただ非才、其の局に當るの器にあらず、編輯の名はかれど、御希望にそむき、御期待を裏切る、慚愧に不堪。されど馬もよく千里に至る、喉嚨たむのみに候。

○、茲に校外會員諸君に希望し度は、文の圓の記事の大部分は在校會員のものせしもの、校外會員に一層の賑ひを見せられたき事に候。奮つて御投稿願上げ候。

○、本誌をしてただに年中行事の一つとして發行するにあらず、會報として、より生命あるものたらしめたく、愈々校外會員諸君の奮起を願はざるを得ず候。

○、草一本、石ころ一つにも、草として、は

た石としての生の使命は有之候ものを、本誌は本誌としてよりよく生き申すべく、單なる存在の意義なきは今更の事に候。

○、宇宙の一秒も、人生には十年一昔、創刊の當時をかくかに想見すれば、現在の事實を眺ぶるの情、尙切なるもの有之候。願はくば御寛容ありたまひものに候。

○、向寒の朝、會員諸君の益々御健康と御幸福を祈り、本誌に對する一段の御理解を希望し筆を擱き候。(大正一一、九、三〇、宿直室の一隅にて、みつば生)

記念號の編輯を終りて、

○、南園會報はまだか？の會員諸君の催促そこにあはき慚愧と希望ごを持ちつゝ、印刷されたる本誌の配布の出來得る日を待ち詫びて、記念號の筆より申候。

○、折角の十周年記念式、諸事業の記事を、來年に對する事の如何やこの會長の御意をうけて、兎も角もまごめては見られど、自分ながら意に滿たざる事の多きを恥ぢ入り候。

○、殊に印刷の手落ち、筆途等ありて、さらだに經費重み、殆ど昨年の二倍を要するに至り、本會の財政上、一も二もご手控の止むを得ざりし事、残念に存じ候。

○、表紙の如き屬なる木版一度刷の費弱き、紙質亦劣悪、而して普通號の内容に至りては誤植の多き事言語に絶し、ごても一々正誤し難き不体載、ここに改めて御詫申上候。

○、時は歳末にせまり、候は烈風を誘へど、沈黙の朝、思索の夜、はるげき我等の道程に、輝く生の光明、そこには人生の樂園の展開されつつあるに候はずや。

○、早々の年を旬日に送り、更正の氣分もて次號に對する研致し度、十一號を期して相見申すべく、愈々御自重願上げ候。

(大正一一、一二、一五、小橋宿舎、みつば生)

大正十二年一月五日印刷  
大正十二年一月十日發行

山口縣阿武郡萩町  
編輯兼 柳原良助  
發行人 柳原良助

山口縣阿武郡萩町  
山口縣阿武郡萩町  
山口縣阿武郡萩町  
山口縣阿武郡萩町  
山口縣阿武郡萩町

印刷所 萩海海館  
發行所 萩高等女學校南園會

